

# 国立近現代建築資料館 紀要

第1号 2021 (令和3年)



**Bulletin of National Archives of Modern Architecture,  
Agency for Cultural Affairs**

Vol. 1 2021

# 国立近現代建築資料館 紀要

第1号 2021(令和3年)

Bulletin of National Archives of Modern Architecture,  
Agency for Cultural Affairs

Vol. 1 2021 (Reiwa 3)



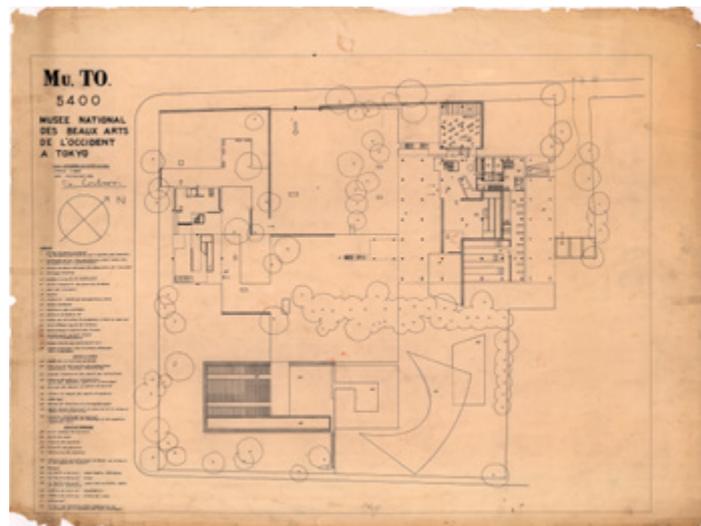
## NAMA's Collection

国立近現代建築資料館が所蔵する  
国立西洋美術館（ル・コルビュジエ設計）に関する資料例



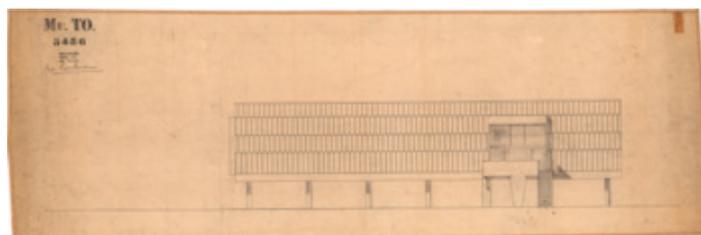
国立西洋美術館のポートフォリオ（表紙カバー）

国立西洋美術館の設計にあたっては、ル・コルビュジエ事務所でポートフォリオが作成された。ただし、資料館蔵のポートフォリオが、3枚の基本設計図と共に1956年7月18日送付されたそれであるかについては議論を要する。詳細は本誌 pp. 7-16を参照



国立西洋美術館基本設計図面 Mu. TO. 5400 文化センター全体配置図

1956年7月にフランスから送付された基本設計図3枚中の1枚に対応する。ル・コルビュジエは国立西洋美術館（右上）に加えて、不思議の箱（左下）と造形芸術の総合のための企画あるいは巡回展示館を提案している。調査の結果、サインも含めて人間の手による複製であることが判明した。詳細は本誌 pp. 29-30参照



国立西洋美術館実施設計図面 Mu. TO. 5486 南西立面図

1957年3月にフランスから送付された実施設計図9枚中の1枚に対応する。調査の結果、サインも含めて人間の手による複製であることが判明した。詳細は本誌 pp. 28-33参照

# 国立近現代建築資料館 紀要

第1号 2021(令和3年)

## 目次

- 
- 口絵
- 3 NAMA's Collection
- 論文
- 7 国立西洋美術館のポートフォリオについての比較研究  
加藤道夫, 加藤直子, 寺内朋子
- 17 日本の近代建築を支えた構造家たち  
竹内徹, 浜田英明
- 資料紹介
- 28 国立近現代建築資料館が所蔵するル・コルビュジエ設計の国立西洋美術館の図面群について  
加藤道夫, 加藤直子, 寺内朋子
- 34 村田豊建築設計資料整理報告  
飛田ちづる
- 39 岸田日出刀の1964年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告  
飛田ちづる
- プロジェクト
- 45 収藏品展の意図とプロセス  
令和2年度収藏品展『ミュージアム1940年代ー1980年代：始原からの軌跡』より  
遠藤康一, 木下紗耶子, 川向正人
- 年次報告
- 54 令和2年度 国立近現代建築資料館活動報告
- 54 I. 資料の調査・保管等
  - 57 II. 展示・教育普及
  - 60 III. 情報収集
  - 61 IV. 調査研究等
  - 62 V. 委員会
  - 62 VI. 運営
  - 63 VII. 予算
  - 63 VIII. 組織
  - 63 IX. 年譜

# Bulletin of National Archives of Modern Architecture

vol.1 2021

## Contents

- 
- Frontispiece**
- 3 NAMA's Collection
- Articles**
- 7 Comparison of the Portfolios on the National Museum of Western Art  
Kato Michio, Kato Naoko, Terauchi Tomoko
- 17 Structural designers who carved Japanese modern architecture  
Takeuchi Toru, Hamada Hideaki
- Material**
- 28 On the Drawings of the National Museum of Western Art Designed by Le Corbusier in NAMA Archives  
Kato Michio, Kato Naoko, Terauchi Tomoko
- 34 Report of architectural materials by MURATA Yutaka  
Tobita Chizuru
- 39 Report of diary by KISIDA Hideto to visit for Tokyo Olympics in 1964 as chairperson of Olympic facility  
Tobita Chizuru
- Project**
- 45 Purpose and Process of the Collection Show Case:  
Year's Collection Show Case, "Museums by Japanese Architects 1940s–1980s: Origins and Trajectories"  
Endo Koichi, Kinoshita Sayako, Kawamukai Masato
- Annual Report**
- 54 Annual Activity Report of NAMA, 2020 (Reiwa 2) fiscal year
- 54 I. Activities of Materials
  - 57 II. Exhibitions and Education
  - 60 III. Information Gathering
  - 61 IV. Research
  - 62 V. Committee
  - 62 VI. Management
  - 63 VII. Budget
  - 63 VIII. Organization
  - 63 IX. Chronology



# 国立西洋美術館のポートフォリオについての比較研究

[論文]

加藤道夫\*, 加藤直子\*\*, 寺内朋子\*\*\*

## Comparison of the Portfolios on the National Museum of Western Art

Kato Michio, Kato Naoko, Terauchi Tomoko

The aim of this paper is to clarify differences between portfolios of NAMA (National Archives of Modern Architecture) and NMWA (The National Museum of Western Art) and their relations to original drawings of FLC (Fondation Le Corbusier). The result is as follows: 1) There are differences that are beyond measurement errors in some plate layouts. 2) The colorings of NAMA's and NMWA's show subtle differences, both of which are different from those of the drawings of FLC. It suggests that both colorings are independent from each other. 3) Finally, we judge that both portfolios have different origins with different colorings.

キーワード：国立西洋美術館、国立近現代建築資料館、ル・コルビュジエ、ポートフォリオ

### 1. はじめに

国立西洋美術館（以下「西洋美術館」）のポートフォリオは、1956年7月9日（作成年月日）の3枚の建築図面と共に、1956年7月18日に送付されたとされてきた<sup>1</sup>。千代はその典拠についてル・コルビュジエ財団（Fondation Le Corbusier）が所蔵する（以下「財団蔵」）1956年7月10日（作成年月日）の「東京、西洋美術館の建設に関するル・コルビュジエの注釈（note）」（以下「注釈」）を挙げている（千代，2016，pp. 281–286；寺島・千代，2017，pp. 42–44）<sup>2</sup>。

関連して、二つのポートフォリオが存在する。以下にその内容に関する記載を日本における紹介順に示す。

一つが、西洋美術館が所蔵するポートフォリオ（以下「西洋美術館蔵」）である。同ポートフォリオは、2004年に西洋美術館が画商を通じて購入し、2009年に開催された『開催50周年記念ル・コルビュジエと国立西洋美術館』展に展示された。これについて同展カタログには次のように説明されている。「ル・コルビュジエは、設計がまとまった段階で、アルバム<sup>3</sup>という形でコンセプトを整理することがしばしばある。（中略）本アルバムは、『国立西洋美術館』の基本設計<sup>4</sup>が終了した時点でまとめられたもので、基本設計で提案された美術館以外の付属施設を含む全体計画の模型、基本設計図面、スケッチが収録されている」（寺島，2009，p. 88）。

もう一つは、国立近現代建築資料館が所蔵するポートフォリオ（以下「資料館蔵」）である。同ポートフォリオは、同館で2015年に開催された『ル・コルビュジエ×日本』展で展示され、展覧会後に坂倉家に返却された後に当館に寄贈された（2021年1月贈与契約締結）。これについ

て同展カタログには以下のように記されている。「ル・コルビュジエから1956年7月に送られてきた基本計画を説明するための全27枚<sup>5</sup>のポートフォリオ」（文化庁，2015，p. 30）。付言するなら、展覧会に際してつくられた上記のポートフォリオの複製（以下「資料館複製」）が当館に存在する。

以上のように二つのポートフォリオは、それぞれ独立して、あたかも1956年7月に作成され日本に送付されたポートフォリオであるかのように紹介されてきた。しかし、二つの異なるポートフォリオが存在することが示すように、これらが1956年7月に日本に送付されたポートフォリオそのもの（以下「オリジナル〔正本〕のポートフォリオ」）であるという確証はない。

次に二つのポートフォリオの差異についても明確にされてこなかった。また、二つのポートフォリオに掲載された模型写真や建築図面が財団蔵の模型写真とスケッチを含む建築図面（以下「原図」）とどのような関係にあるのかについても不明確である<sup>6</sup>。

本研究の目的は、以上のように独立して紹介されてきた二つのポートフォリオの差異とそれらと財団蔵の模型写真や原図との関係を明確化することである。そのために、必要に応じて財団蔵の模型写真や原図を参照しながら、二つのポートフォリオの調査を行い、比較検討を行った。本稿はその結果をまとめたものである。

### 2. 調査の方法と内容

調査方法は以下の通りである。

1) 調査の前段階として注釈に着目し、ル・コルビュ

\*国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士 \*\*国立近現代建築資料館 研究補佐員、博士（学術）  
\*\*\*国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士（工学）

ジエ事務所 (Atelier Le Corbusier) から日本に送付されたオリジナルのポートフォリオがどのようなものであったかを確認する。

2) 次に資料館蔵と西洋美術館蔵の比較調査を行う。調査にあたっては、財団が保有する模型写真や原図を可能な限り参照し、それらとの差異を検証しつつ行った<sup>7)</sup>。

a) 資料館蔵については、2020年11月以降、翌年4月にかけて、随時調査を行った。

b) 西洋美術館蔵については、下記の調査を行った。まず、2020年12月24日に加藤道夫が西洋美術館にて同館所蔵について予備調査を行い、資料館蔵との相違をまとめた。この結果を踏まえて、2021年4月12日に加藤道夫、加藤直子、寺内朋子の3名が、資料館複製を持参して西洋美術館蔵の再調査(以下「詳細調査」)を行い、予備調査で明らかになった相違を確認した。

3) 以上の調査をもとに、両ポートフォリオの差異とそれらの関係、具体的には前者が後者と同一なのか、あるいは前者が後者の複製であるのか、だとするならどのような手段で複製されたのかについての検討結果をまとめる。

### 3. 注釈に見るオリジナルのポートフォリオの概要

#### 3.1. 注釈に見るポートフォリオ

「注釈」には以下のように記されている。「25枚の図版 [planches]<sup>8)</sup> からなる CIAM グリッド [la grille CIAM] と数葉の計画図 [plans]<sup>9)</sup> の形で提出された計画 [projet] は、1955年12月からのすべての検討を示している」(筆者訳)。

補足するなら、CIAMグリッドとは「都市計画の課題の分析、総合と表示のために、1947年12月に ASCORAL によってつくられ、1948年3月28日～31日パリで開かれた CIAM の評議会の春季の会合で採用された」ものであり、その判型について「〈グリッド〉そのもの (21×33cm の判型シート)」と記されている (ボジガー, 1978, p. 38)。

以上から、注釈における「25枚の図版からなる CIAM グリッド」がオリジナルのポートフォリオに該当し、数葉の図面が1956年7月9日(作成年月日)の「Mu. TO. 5400-5402」という表題が記された3枚の図面に該当すると考えて差し支えないだろう。

#### 3.2. 注釈が示唆するポートフォリオと

##### 二つのポートフォリオとの対応

二つのポートフォリオの判型を見てみると、いずれも

21×33cmであり、注釈における「CIAM グリッド」に則っている。

資料館蔵は26枚のプレートからなる。対して西洋美術館蔵には末尾にプレート番号なしの「19世紀大ホール」のスケッチが掲載されたプレートが付け加えられている<sup>10)</sup>。

注釈における「25枚の図面」という記述に関して補足すると、どちらも図面番号は25で終わっており、1枚多いのは「16bis」という図面が挿入されているからである。

注釈には模型写真について次のように記されている。「取り外し可能な模型を製作した。(中略) 模型は壊れやすいため検討が終わるまで郵送できない。しかし、全体と取り外した状態の約20枚の模型写真によって、下記の内容を示しうるだろう。(後略)」(筆者訳、下線筆者)。二つのポートフォリオの模型写真プレートの枚数はいずれも15枚であり、注釈の記述「約20枚」と若干相違がある。

### 4. ポートフォリオの比較結果

#### 4.1. ポートフォリオの構成

西洋美術館蔵の末尾に加えられた27枚目(プレート番号なし)の図版を除けば、両ポートフォリオは以下のような構成を持っている。

1) pl. 1から15までの計15枚のプレート。左に模型写真を配置し、右にタイプ原稿による説明が加えられている(以下「模型写真プレート」)。

2) pl. 16から16bisを挟んで21までの計7枚のプレート。左に建築図面を配置し、右にタイプ原稿による説明が加えられている(以下「建築図面プレート」)。

3) pl. 22から25までの計4枚のプレート。左に建築スケッチを配し、右にタイプ原稿による説明が加えられている(以下「スケッチプレート」)。

#### 4.2. ポートフォリオのプレート順序とレイアウト

次に指摘しておきたいのは、資料館蔵は pl. 12と13の順序が入れ違っていることである。それは日本に送付されたオリジナル(正本)でない可能性を示唆している。対して西洋美術館蔵では入れ違いが認められなかった。

次に二つのポートフォリオの各プレートのレイアウト比較を行った。いずれも左に模型写真、建築図面、もしくは建築スケッチ等の図面を配し、右に帯状のタイプ原稿を配置するという同様なレイアウトを持っている。そこで両者がまったく同一のレイアウトであるかを確認するため、詳細調査において各プレートの右端から図版部

分右端までの距離を測定した。その結果、多くのプレートで数mmの違いがあることが確認された。以下に3mm以上の違いがあるプレートを列挙する(単位mm)。

- pl. 2: 資料館蔵100、西洋美術館蔵96  
(資料館蔵の模型写真の左端が微妙に孔にかかる)
- pl. 4: 資料館蔵100、西洋美術館蔵97  
(資料館蔵の模型写真の左端が微妙に孔にかかる)
- pl. 11: 資料館蔵90、西洋美術館蔵83
- pl. 14: 資料館蔵75、西洋美術館蔵67-68
- pl. 15: 資料館蔵71、西洋美術館蔵68
- pl. 16: 資料館蔵62、西洋美術館蔵65
- pl. 18: 資料館蔵61、西洋美術館蔵64

模型写真端部の境界は若干斜めになっているものもあり、計測誤差や pl. 2、4のように模型写真の裁ち落としの際に生じた不作為の誤差である可能性は否定できない。しかし pl. 11、14に見られるような5mmを超える差は計測誤差や不作為の裁ち落とし誤差とはいえない可能性を孕んでいる。

以上の計測結果は、両ポートフォリオが少なくとも親子関係(一方が他方の複製)にはなく、それぞれ独立して制作された可能性を示唆している。

### 4.3. タイプ原稿の貼り付け

資料館蔵の pl. 10、11、15にはタイプ原稿貼り付けの痕跡と想定される境界線が認められた。また、pl. 16から16bisを挟んで pl. 21までの7枚のプレートはすべてタイプ原稿が建築図面プレートの上に貼り付けられている。対して西洋美術館蔵では貼り付けは認められず、その明確な痕跡も発見できなかった。

### 4.4. 鉛筆による書き込み

資料館蔵には以下の書き込みが見られる。pl. 15には模型写真の下端付近にわずかに傾いた鉛筆による直線とその下に矢印が加えられている<sup>11</sup>。pl. 21には、屋上の両端に室外機を示すと考えられる矩形と矢印が加えられている。また、下記のプレートの裏面には以下の書き込みが見られる。pl. 6に「1」、pl. 11の裏面に「2」、pl. 12に「3」、pl. 15に「4」、pl. 16bisに「5」、pl. 23に「12」、pl. 25に「14」<sup>12</sup>(図1、表1、表2、表3)。

対して西洋美術館蔵には以下の書き込みが見られる。pl. 11のタイプ原稿下に「6」<sup>13</sup>。そのほか、pl. 12のタイプ原稿の「右 [droite]」上部に鉛筆で「左 [gauche]」。

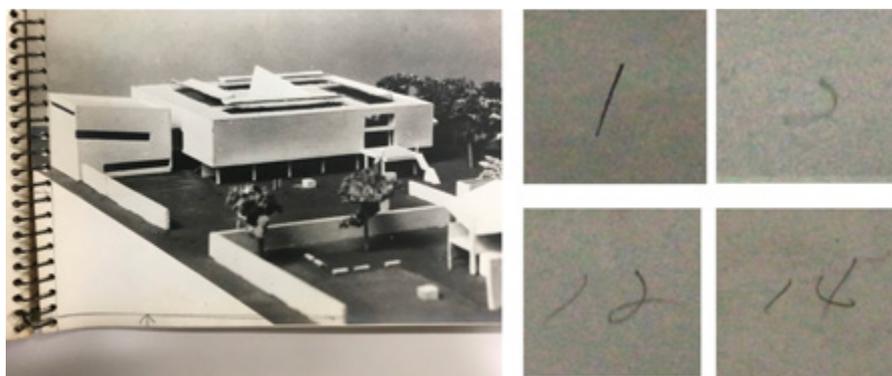
### 4.5. 模型写真プレートの比較 (表1)

#### 4.5.1. 模型写真プレートにおける模型写真の同定

以下では、財団蔵の模型写真や図面を参照しつつ、模型写真プレート、建築図面プレート、建築スケッチプレートとの3つの部分にわけて、両ポートフォリオの比較結果をまとめる。

模型写真プレートの比較に入る前に、両ポートフォリオに掲載された西洋美術館の模型写真が設計段階のどの案に対応するかの同定を行った。なぜなら、斜路の位置が実現案とつながる両ポートフォリオに掲載された建築図面と異なっているからである。この点に着目して財団蔵の建築図面を参照すると、この模型写真は、アンドレ・メゾニエが1956年3月から4月にかけて作成した図面に対応していることがわかった<sup>14</sup>。

次に両ポートフォリオに掲載された模型写真の同定を行った。西洋美術館の模型写真については、財団に計70枚の写真が存在する(資料番号L3-17-1)。それは以下



pl. 15 下端における書き込み

裏面における数字の書き込み

図1 資料館蔵ポートフォリオへの書き込み

表1 ポートフォリオの模型写真プレートの比較

プレート 番号	資料館蔵		西洋美術館蔵		ル・コルビュジェ財団蔵写真			備考
	プレート	部分詳細	プレート	部分詳細	メゾニエ選択FLC写真 (トリミング, 回転済)	FLC資料番号	メゾニエが選択したFLC蔵 写真リスト(対応部分)	
1						L3-17-1(60)		
2						L3-17-1(57)		資料館蔵に以下の彩色。 美術館に赤の彩色。一般 動線(黄)とサービス動 線(紫)を示す矢印
3						L3-17-1(59)		
4						L3-17-1(57) 部分		
5						L3-17-1(59) 部分		
6						L3-17-1(60) 部分180度 回転		資料館蔵裏面に「1」の 書き込み
7						L3-17-1(57) を270度 回転		
8						L3-17-1(63) 270度 回転		西洋美術館蔵に赤いシミ 資料館蔵にはなし
9						L3-17-1(65)		
10						L3-17-1(64)		
11						L3-17-1(59) を15度 回転		資料館蔵裏面に「2」の 書き込み。西洋美術館蔵 表面に「6」の書き込み
12						L3-17-1(55)		資料館蔵では pl.12 と 13の順序が逆。資料館蔵 裏面に「3」の書き込み
13						L3-17-1(60)		両プレートに同一の汚れ あり。ポートフォリオ写 真の上部背景が財団写真 より広い。資料館蔵では pl.12と13の順序が逆
14						L3-17-1(62)		
15						L3-17-1(56)		資料館蔵裏面に「4」の 書き込み。資料館蔵の模 型写真の下端に線と矢印 の書き込み

の枝番からなる計6枚のシートから構成される：[1-15]、[16-27]、[28-40]、[41-53]、[54-65]、[66-70]（寺島・千代，2017，pp. 54-56）。

このうち、[54-65]は12枚の模型写真からなる。このシートにはメゾニエによる以下の書き込みがある。「東京美術館 [Mu. Tokio] のグリッド [la grille] のために選択された写真 [dichés] A.M. (André Maisonnier の略)」。さらに同シートの12枚の模型写真の下にはプレート番号が記され、その内の写真番号57、59、61の下にはそれぞれ2つのプレート番号が記されている。

以上からポートフォリオに使用された全15枚の写真は財団蔵の模型写真と同定することができた。

#### 4.5.2. 模型写真プレートの比較

次に模型写真プレートについて資料館蔵と西洋美術館蔵の比較を行った。以下にその比較結果を示す。

まず資料館蔵の pl. 2 では、西洋美術館部分が赤く彩色されている。対して西洋美術館蔵はモノクロの彩色痕跡が認められる。

次に資料館蔵では、黄色と紫の矢印が描かれている。黄色の矢印は来館者の動線を紫の矢印はサービス動線を示している。対して西洋美術館蔵にはそのような彩色や矢印の描き込みは存在せず、その痕跡すら認められない。とはいえ、pl. 2 はいずれも財団所蔵の L3-17-1 (54-65) にまとめられた模型写真 (57) を使用している点に違いはないことが確認された。以上から資料館蔵は財団蔵の模型写真のモノクロ印刷の上に彩色をほどこしたものと判断される。(図2)

また、複数のプレートで模型写真の版面が微妙に異なることが確認された。上記の結果も、両者に親子関係がなくそれぞれ独立に制作されたことを示している。

#### 4.6. 建築図面プレートの比較 (表2)

##### 4.6.1. 財団が保有する対応図面

建築図面プレートの比較に入る前に、両ポートフォリオに掲載された建築図面がどの原図に相当するかの同定を行った。その結果、それらは1956年7月9日の日付(作成年月日)図面に由来することを確認した。該当する図面の財団の図面番号(FLC\*\*\*\*)と各プレートの対応関係は以下の通りである。

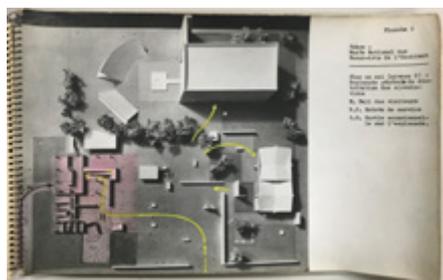
- 1) FLC24615がpl. 16の原図に相当する。pl. 16bisはその部分に対応する。ただし、資料館蔵に見られるような西洋美術館部分を彩色した図面は存在しない。
- 2) 4層(階)の平面図から構成されるFLC24616AとFLC24616Bがpl. 17からpl. 20の原図に相当する。後者は前者をモノクロ印刷したものに彩色をほどこしたものである。
- 3) FLC24617AとFLC24617Bがpl. 21の原図に相当する。後者は前者をモノクロ印刷したものに彩色をほどこしたものである。

##### 4.6.2. 両ポートフォリオの建築図面プレートの概要

建築図面プレート7枚の内 pl. 16は西洋美術館を含む全体計画の配置図であり、16bisから20までは西洋美術館の各層(階)の平面図である。

資料館蔵では、前述のように別紙のタイプ原稿が貼り付けられており、pl. 16bisを除くすべてのプレートに彩色が施されていることが確認された。

対して西洋美術館蔵には、テキストの貼り付けも彩色もなくモノクロの建築図面とタイプ原稿が同一紙の左右に配置されていること、そしてグレーの彩色の痕跡が確認された(図3)。



資料館蔵 pl. 2



西洋美術館蔵 pl. 2

図2 両ポートフォリオの模型写真プレート(pl. 2)

#### 4.6.3. 二つのポートフォリオの彩色の比較分析

次により詳細な彩色の比較分析を行った。ここでは pl. 21 (断面図) の分析結果を示す。

資料館蔵では、19世紀大ホールが青く彩色され、照明室からの光が黄色に彩色されている。対してモノクロの西洋美術館蔵では、青色の痕跡は認められず、黄色に彩色された部分のみ彩色の痕跡が認められる (図4)。

#### 4.6.4. 財団蔵建築図面との彩色の比較

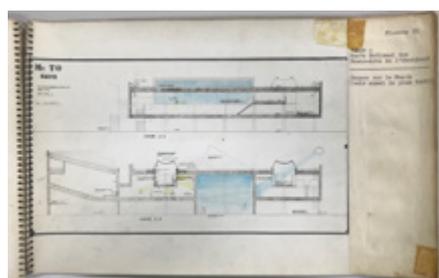
次に、財団蔵の彩色図面との比較を行った。前述のよ

うに、財団にはすべての建築図面プレートに対応する原図が存在する (FLC24615、24616A、24617A)。加えて pl. 16と16bisを除くプレートに対応する彩色図面が存在する (FLC24616B、24617B)。FLC24617Bは、トレーシングペーパーに黒インクで描かれた原図 (FLC24617A) のモノクロ印刷に水彩が施されたものである。比較に当たっては、資料館蔵、財団蔵のカラー図版をいずれもモノクロに加工して行った (図5)。以下に pl. 21 (断面図) の分析結果を示す。

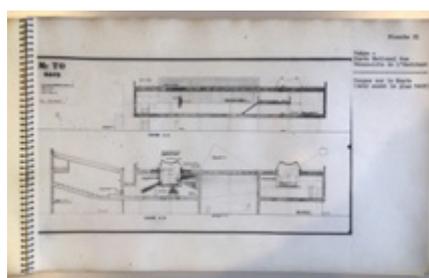
西洋美術館蔵、資料館蔵と FLC24617B の床スラブ

表2 ポートフォリオの建築図面プレートの比較

プレート番号	資料館蔵		西洋美術館蔵	ル・コルビュジェ財団蔵			備考
	プレート	備考		ポートフォリオ対応図面	FLC図面番号	日付 (作成年月日)	
16		FLC24615のモノクロ印刷に彩色 タイプ原稿貼り付け			FLC24615	1956年7月9日	
16bis		FLC24615のモノクロ印刷 タイプ原稿貼り付け 裏面に「5」の書き込み			同上部分	1956年7月9日	
17		FLC24616A (部分) のモノクロ印刷に彩色 タイプ原稿貼り付け			FLC24616B (部分)	1956年7月9日	FLC24616Aのモノクロ印刷に彩色
18		FLC24616A (部分) のモノクロ印刷に彩色 タイプ原稿貼り付け			FLC24616B (部分)	1956年7月9日	FLC24616Aのモノクロ印刷に彩色
19		FLC24616A (部分) のモノクロ印刷に彩色 タイプ原稿貼り付け			FLC24616B (部分)	1956年7月9日	FLC24616Aのモノクロ印刷に彩色
20		FLC24616A (部分) のモノクロ印刷に彩色 タイプ原稿貼り付け			FLC24616B (部分)	1956年7月9日	FLC24616Aのモノクロ印刷に彩色
21		FLC24617Aのモノクロ印刷に彩色			FLC24617B	1956年7月9日	FLC24617Aのモノクロ印刷に彩色



資料館蔵 pl. 21



西洋美術館蔵 pl. 21

図3 両ポートフォリオの建築図面プレート (pl. 17)

の断面部のポシェ（塗りつぶし）を比較すると、いずれも FLC24617A の赤色鉛筆の痕跡を保持していること（図5の赤楕円部参照）、すなわち、いずれも FLC24617A に起源をもつことが確認された。

次に資料館蔵と西洋美術館蔵との彩色領域を比較すると、微妙な差異が認められた。それは、資料館蔵のプレートと（モノクロ複製である）西洋美術館蔵のもとになった彩色プレートの彩色が独立して行われたことを示唆している。

また、資料館蔵と FLC24617B、西洋美術館蔵と FLC24617B について同様の比較を行った。その結果は必ずしも明確ではないが、同様の差異が認められた（図5の青楕円部参照）。

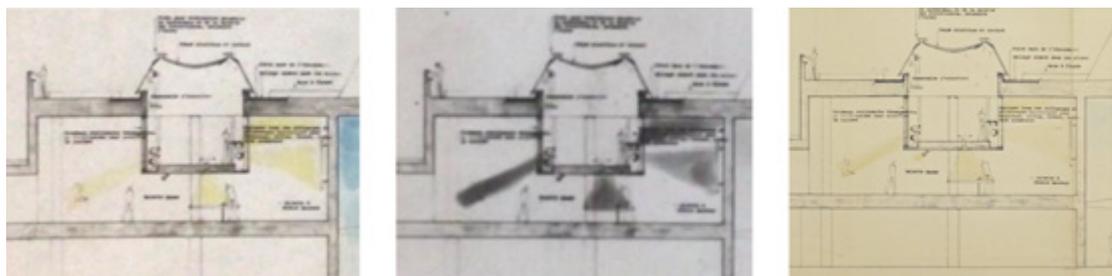
以上を総合すると、FLC24617B と資料館蔵の彩色

図面は、いずれも FLC24617A のモノクロ印刷に独立して彩色されたものであり、西洋美術館蔵も同様にして彩色された図のモノクロ印刷であると判断できる。

#### 4.7. スケッチプレートの比較（表3）

pl. 22から25については、財団に原画スケッチとタイプ原稿を貼り合わせた図面が存在する（順に FLC29036D、29936E、29936B、29936C）。いずれもトレーシングペーパーに黒インクで描かれており、pl. 22、25は色鉛筆で彩色されている。

対して資料館蔵と西洋美術館蔵のプレートはいずれもモノクロであるが、色鉛筆による彩色の痕跡が見られる。しかも原画に見られるテープ跡の痕跡が両者の pl. 22、23と西洋美術館蔵の pl. 25に認められた（残りの

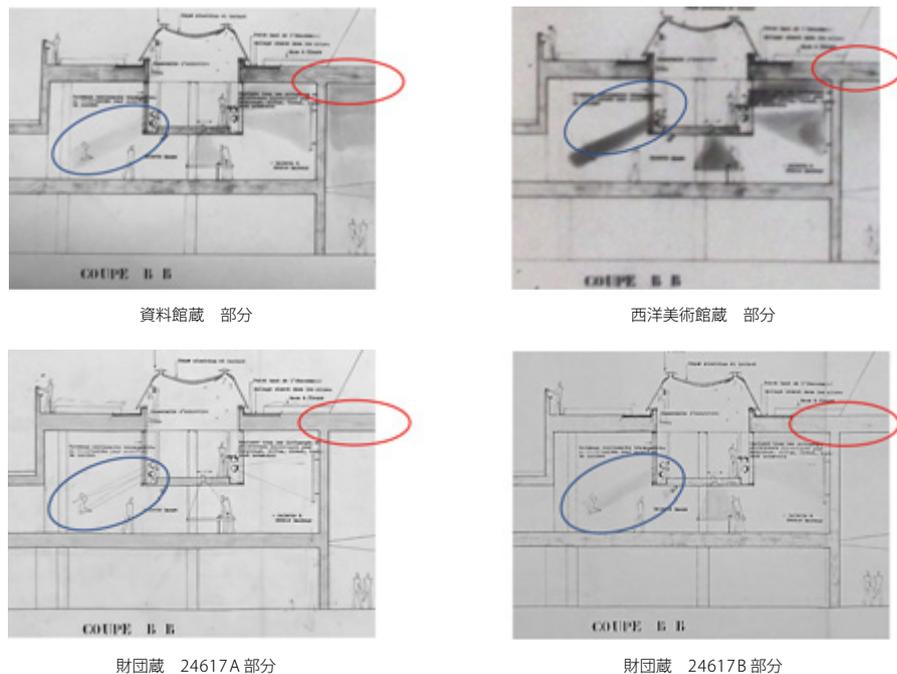


資料館蔵 pl. 21部分

西洋美術館蔵 pl. 21部分

財団蔵図面 FLC24617B部分

図4 両ポートフォリオと財団蔵図面との彩色比較（pl. 21）



資料館蔵 部分

西洋美術館蔵 部分

財団蔵 24617A部分

財団蔵 24617B部分

図5 両ポートフォリオと財団蔵図面との彩色部分の詳細（pl. 21部分）

表3 ポートフォリオのスケッチプレートの比較

プレート番号	資料館蔵		西洋美術館蔵	ル・コルビュジェ財団蔵			備考
	プレート	備考		ポートフォリオ対応図面	FLC図面番号	日付(作成年月日)	
22		FLC29936Dのモノクロ印刷			FLC29936D	未詳	トレベに彩色(色鉛筆)とタイプ原稿貼り付け
23		FLC29936Eのモノクロ印刷			FLC29936E	未詳	トレベに彩色(色鉛筆)とタイプ原稿貼り付け
24		FLC29936Bのモノクロ印刷			FLC29936B	未詳	トレベに彩色(色鉛筆)とタイプ原稿
25		FLC29936Cのモノクロ印刷			FLC29936C	未詳	トレベに彩色(色鉛筆)とタイプ原稿貼り付け
なし					FLC33443	1959年2月12日	FLC24648の印刷に彩色(水彩)とパステル(輪郭線)

プレートについてはテープの痕跡が未詳)。さらに、両者の pl. 24 の右下に原画と同じ位置の汚れが見られる。

以上を総合すると pl. 22 から 25 については、いずれも財団蔵の原画のモノクロ複製と考えると差し支えないだろう。

## 5. 結論

本研究の結果を要約すると以下のようになる。

- 1) 建築図面プレートの原図は財団蔵の Mu.TO. 5400-5402 であり、1956年7月9日の日付(作成年月日)である。対してポートフォリオの模型写真プレートは、前の段階の計画案(1956年3月から4月にかけて作成された図面)に対応していることを確認した。
- 2) 資料館蔵プレートには pl. 2、16、17、18、19、20、21 のプレートに彩色が認められる。対して西洋美術館蔵プレートはすべてモノクロプレートから構成される。ただし、pl. 2、16、17、18、21 には彩色の痕跡が認められる(表1, 2参照)。加えて資料館蔵の pl. 2 には矢印の描き込みが見られる。対して西洋美術館蔵の pl. 2 に矢印の描き込みは見られない。
- 3) 複数のプレートのレイアウトにおいて計測誤差や裁ち落としの差異に生じた不作為の誤差とは考えにくい差異が確認された。
- 4) 資料館蔵における建築図面プレートの彩色と西洋美術館蔵に見られる彩色の痕跡は、その領域が微妙

に異なっていることが確認された。

- 5) 以上から、資料館蔵は、財団蔵の模型写真、建築図面、建築スケッチをレイアウトしたモノクロプレートの一部のプレートに彩色を施して制作されたことがわかった。ただし、資料館蔵がオリジナル(正本)であるというという確証は得られなかった。すなわち、オリジナル(正本)のポートフォリオではなく、試作品である可能性がある。
- 6) 対して、西洋美術館蔵は、資料館蔵とは別に制作・彩色されたポートフォリオのモノクロ複製であり、両者が親子関係にないことを示している。また、1959年2月12日(作成年月日)の図面のモノクロ印刷を含んでおり、その限りにおいて1956年送付のオリジナルのポートフォリオと同定できない。ただし、西洋美術館蔵がオリジナル(正本)のポートフォリオのモノクロ複製であり、27枚目のプレートが後から付加されたものであることは否定できない。

## 注

- 1 ポートフォリオ送付について藤木は「1956年7月到着の基本計画の説明ポートフォリオ表紙、内容は図面(淡彩着色)、模型写真、スケッチ(後略)」と記している(藤木, 2011, p. 123)。また、図面送付について寺島・福田は「7月18日、在仏西村大使、ル・コルビュジェより基本設計図3枚(Mu. To. 5400-5402)を受け取り、日本に送付」と記している(寺島, 2009, p. 148)。

- 2 財団資料番号AFLC, F1-12-174。同注釈 [note] の本文を日本で初めて紹介した千代は以下のように説明している。「1956年7月9日付けの東京の国立西洋美術館(1959)基本案図書に添付している説明文。ル・コルビュジェは図面と合わせて日本に送付している」(千代, 2016, p. 285 訳注)。同注釈末尾には「付随する技術的な覚書(ママ、原文 [note])については、メゾニエが作成する」と記されている。
- 3 本稿では表記を統一するため、引用を除いて「ポートフォリオ」と表記する。
- 4 図面の内容は配置図、各階平面図と断面図のみであり、基本設計図と呼ぶには不十分な内容と言わざるをえない。
- 5 資料館蔵のプレートの枚数は1から16, 16bisを挟んで17から25までの計26枚である。表紙を含んで27枚となる。
- 6 千代(2016)は設計過程における建築図面に関する研究を行っている。しかし、ポートフォリオに掲載された模型写真や建築図面についての詳細な言及はない。
- 7 模型写真については、財団が所蔵する模型写真シートを参照した(資料番号L3-17-1: 以下に所収、寺島・千代, pp. 54-56)。図面については、Le Corbusier Plans Onlineを参照した。
- 8 25枚の図版 [planches] (図版には16と16bisがあるので正確には26枚の図面)とは模型写真15枚と建築図面7枚と建築スケッチ4枚からなる21×33cmの冊子(ポートフォリオ)をさす。
- 9 数葉の計画図 [plans] とは1956年7月に送付された3枚の青図 (Mu.TO. 5400-5402) を指す。仏語表記では「plans」であるが、断面図が含まれるので「計画図」と訳した。
- 10 このプレートは財団蔵の内観19世紀大ホールの内観スケッチ (FLC33443) のモノクロ複製であり、1959年7月12日の日付(作成年月日)が記載されている。同ホールでの写真壁面の展示の検討のために作成された。したがって、このプレートは1956年7月時点では存在せず、あとから付け加えられたと考えられる。それゆえ、加藤は西洋美術館蔵のポートフォリオはオリジナルのポートフォリオではない可能性を指摘している(加藤, 2017, p. 8)。
- 11 この書き込みは西洋美術館蔵には存在しない。資料館蔵の書き込みがル・コルビュジェ事務所で行われたとすると、当ポートフォリオが送付されたオリジナル(正本)ではなく、レイアウトのチェック用に作成された試作品である可能性を示唆している(注13末尾も参照)。
- 12 資料館蔵の裏面に「6」から「11」と「13」の書き込みはない。しかし、「6」から「11」の数は、pl. 17からpl. 22の枚数に対応する。したがって、「6」から「11」のプレートは、pl. 17からpl. 22に相当すると考えられる。同様に欠落する「13」はpl. 24に相当すると考えられる。以上から14枚のプレート群を以下のように特定できる: 模型写真プレート4枚 (pl. 6, 11, 12, 15)、建築図面プレート6枚 (pl. 16bisから21)、スケッチプレート4枚 (pl. 22-25)。ここでは、模型写真が以下の3枚 (pl. 6 [西洋美術館屋根伏俯瞰]、pl. 12 [全体計画、全景俯瞰]、pl. 15 [全体計画、西洋美術館正面視]) に限定され、図面プレートとスケッチプレートにおいては、pl. 16 (全体計画の配置図) のみが省略されている。それは、西洋美術館の計画により焦点を絞ったポートフォリオの簡略版が構想された可能性を示唆している。だとすると、このポートフォリオが別のポートフォリオ作成のために使用されたことになり、同ポートフォリオがオリジナル(正本)でなく、試作品である可能性を示唆している。
- 13 西洋美術館蔵で「6」と記されたpl. 11は、資料館蔵で「1」と記されたpl. 6から6枚目に当たるという対応関係が認められる。この番号付けは資料館の裏面に記された番号とは一致しない。
- 14 山名は「初期案」と記し、実現案につながる基本設計案と区別している(山名, 2018, p. 176)。以下に同じ位置に斜路が配置された財団蔵の日付(作成年月日)付き図面を列挙する(年-月-日-FLC図面番号-署名):
- 56-3-07-24640-Maisonnier,  
56-3-09-24670,  
56-4-04-24647,  
54-4-23-24669-Maisonnier,  
56-4-24-24635-Maisonnier.
- その後、5月25日以降の日付(作成年月日)の図面では斜路の位置が基本設計案と同じ位置に変更された:
- 56-5-25-24686,  
56-5-35-2471-5-Maisonnier,  
56-5-29-24692,  
56-5-29-24696,  
56-5-30-24724,  
56-5-30-24714-Maisonnier.

## 参考文献(発行年代順)

- ボジガー, W. 編: 〈ル・コルビュジェ〉全作品集1946-1952, A.D.A. EDITA Tokyo, 1978 (Boesiger, W. ed.: *Le Corbusier Œuvre complète 1946-1952*, Les Éditions d'Architecture (Artemis), Zurich, 1953の邦訳版)
- ボジガー, W. 編: 〈ル・コルビュジェ〉と彼のセーヴル街35番地のアトリエ全作品集1952-1957, A.D.A. EDITA Tokyo, 1977 (Boesiger, W. ed.: *Le Corbusier Œuvre complète 1952-1957*, Les Éditions d'Architecture (Artemis), Zurich, 1957の邦訳版)
- 寺島洋子編: 開館50周年記念ル・コルビュジェと国立西洋美術館, 国立西洋美術館/ (財) 西洋美術振興財団, 2009
- 藤木忠善: ル・コルビュジェの国立西洋美術館, 鹿島出版会, 2011(第2刷2016)
- 文化庁監修: ル・コルビュジェ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に, 文化庁, 2015
- Le Corbusier Plans Online*, Fondation Le Corbusier et Echelle-1, 2015
- 千代章一郎: ル・コルビュジェ図面撰集—美術館編—, 中央公論美術出版, 2016

- 加藤道夫：コーラとしての建築へー ル・コルビュジエの《国立西洋美術館》一、図学研究, 51 (152), pp. 6-12, 2017 (初出：日本図学会2016年度春季大会講演論文集)
- 寺島洋子, 千代章一郎編：ル・コルビュジエの芸術空間——国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡, 国立西洋美術館／(財) 西洋美術振興財団, 2017
- 山名善之：世界遺産 ル・コルビュジエ作品群 国立西洋美術館を含む17作品登録までの軌跡, ToTo 出版, 2018

#### 謝辞

西洋美術館蔵ポートフォリオの調査に当たっては、コロナ禍の中、国立西洋美術館のご厚意により、複数回の閲覧機会をいただいた。仲介の労をとっていただいた前副館長の村上博哉氏ならびに閲覧に立ち会っていただいた川口雅子氏に感謝の意を表する。

(2021年5月9日原稿受理)

# 日本の近代建築を支えた構造家たち

[論文]

竹内 徹\*, 浜田英明\*\*

## Structural designers who carved Japanese modern architecture

Takeuchi Toru, Hamada Hideaki

Compared with architects, not many people can list-up the names and achievements of structural designers. However, behind every great architects there are always structural engineers who supported them. In response to a request from the Museum of Modern and Contemporary Architecture, the Japan Structural Designers Club has been researching materials left by talented structural designers collaborating with Hamada laboratory at Hosei University since 2017. In this paper, based on the results of the survey, the achievements of representative Japanese modern structural designers are overviewed and discussed.

キーワード：構造家、耐震設計、空間構造、構造デザイン

### 1. はじめに

過去に大きな業績を残した建築家の名前を列記することは容易であるが、構造家の名前と業績を列記できる人は必ずしも多くない。しかし名建築家の陰には必ずそれを支えた構造家の存在がある。日本構造家倶楽部では文化庁国立近現代建築資料館からの依頼を受け、2017年より法政大学浜田研究室と協力しながら主要な構造家が残した資料の所在概要把握調査を行ってきた。本稿ではその調査の結果を踏まえ、調査の対象となった代表的な日本近代の構造家について紹介していきたい。

調査を実施したWG委員は以下のとおりである。

主査：竹内徹、委員：新谷真人、伊藤潤一郎、金箱温春、小堀徹、佐々木陸朗、多田脩二、中田捷夫、満田衛資（以上日本構造家倶楽部）、小澤雄樹（芝浦工業大学）、川口健一（東京大学）、原田公明、安藤顕祐（日建設計）、浜田英明（法政大学）、藤本貴子（法政大学2020-）、顧問：難波和彦。

図1に2018年のシンポジウム資料としてまとめた構造家の系譜例を示す。関東大震災～戦前に活動したエンジニアを第一世代、戦後～1970年代の高度成長期に活躍したエンジニアを第二世代とすると、現在は第二世代の教え子である第三世代が1980年以降活躍し、引退を迎えつつある状態と言える。第二世代のエンジニアが残した図面、計算書、スケッチ、模型類等のアーカイブは現在第三世代が受け継いでいる場合が多いが、同世代の引退・逝去に伴い逸散、廃棄される危険性が高い。WGではまず「構造家に焦点をあてるのか、構造技術に焦点を当てるのか」という議論を経た上で明治以降～1970年代に至るまでの主要な構造設計作品約

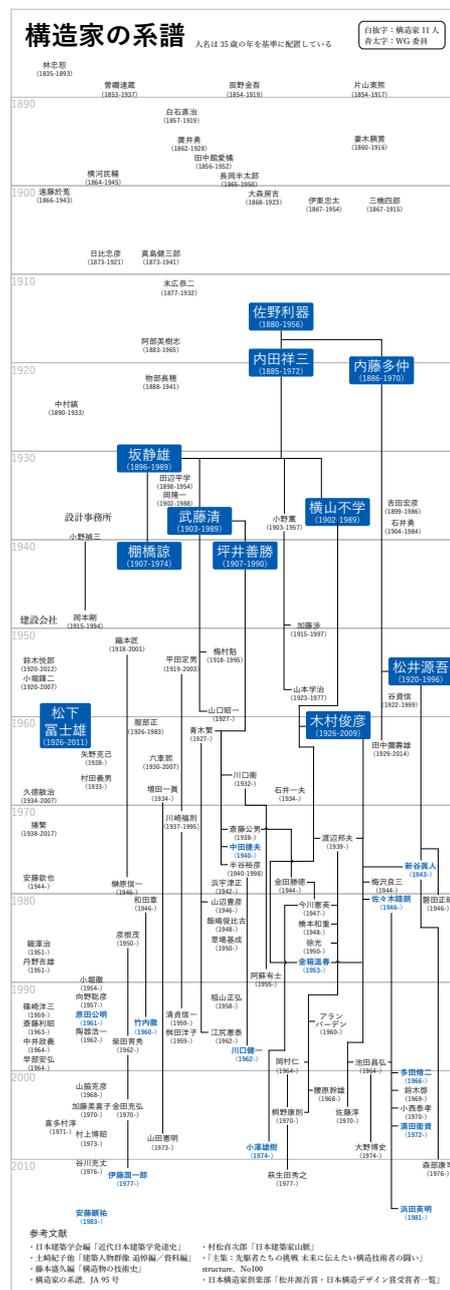


図1 日本の構造家の系譜

\*東京工業大学教授、博士(工学) \*\*法政大学教授、博士(工学)

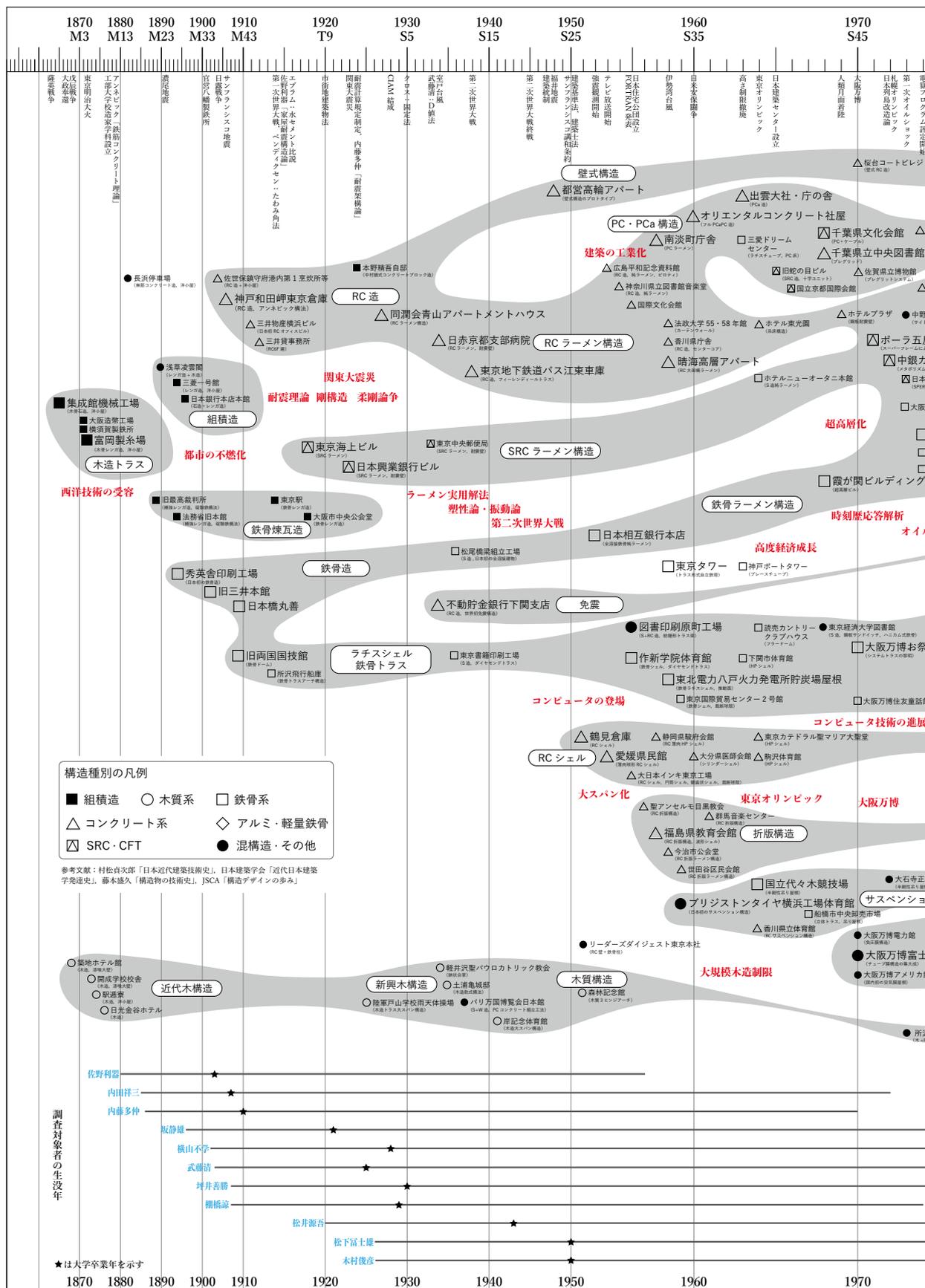


図2 日本の構造デザインの系譜 -1

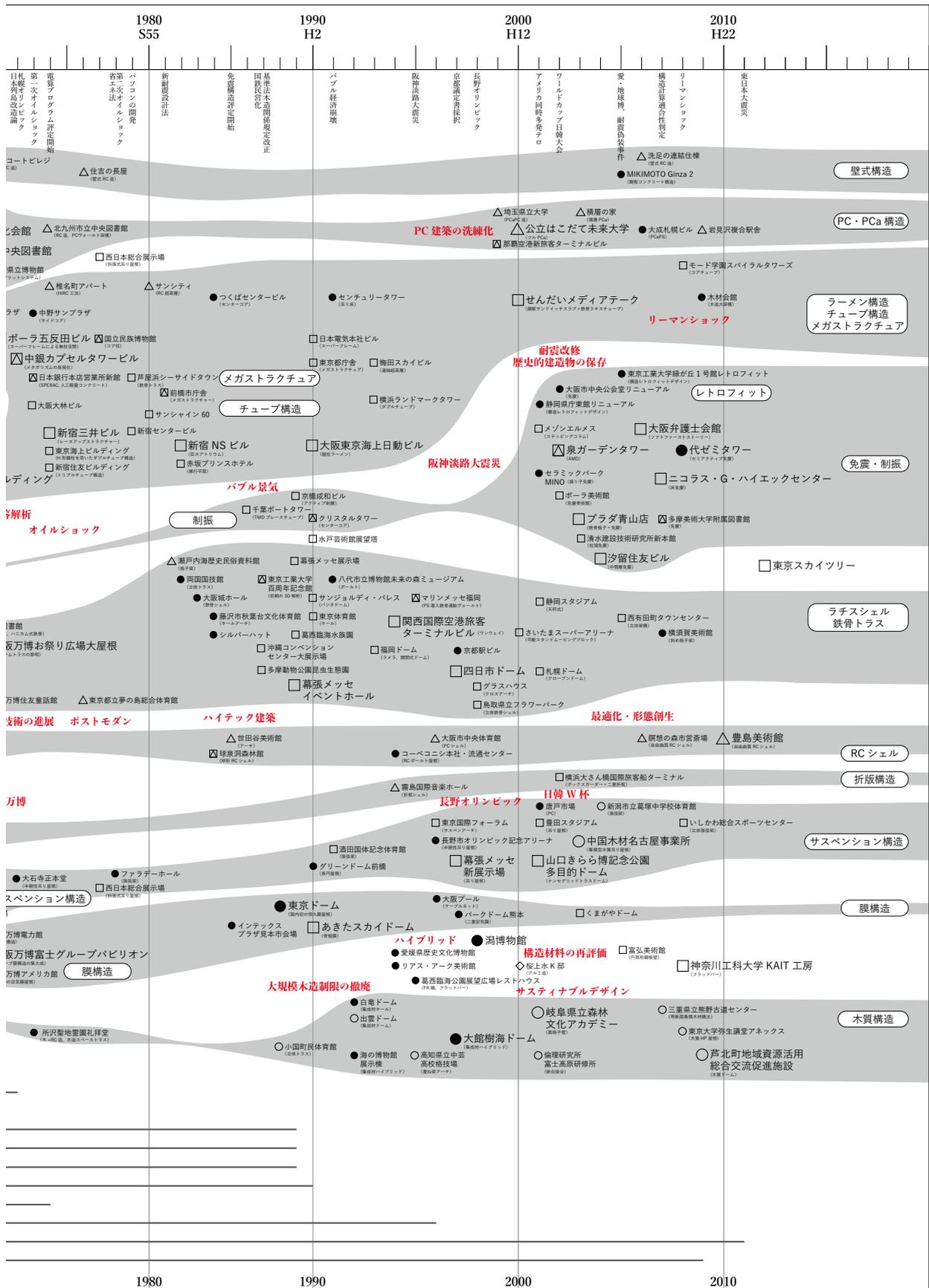


図2 日本の構造デザインの系譜-2

200件を抽出、その潮流をリードした11名の構造家（構造エンジニア）を選出し調査を行った。2018年度調査で選ばれたのは図1中に箱書きで記述した人たちである。

以下、これらの構造家が生きた時代について振り返りたい。図2は明治以降、2010年ころまでの構造技術の変遷と代表的な構造作品を配置したものである。この年表に沿い、大きく分けて明治以降、大阪万博1970年くらいまでの領域とそれ以降の領域、そして耐震構造から超高層ビルにいたるその領域と、大スパン空間構造に関する領域と分けて眺めていく。

## 2. 耐震設計と建築構造専門領域の確立

明治以前の低層木造建物で構成されていた東京（江戸）の街は火災に非常に弱かったため、明治政府は西洋式の建築技術・教育の導入と共に欧州式の煉瓦造を導入することで不燃化を図った（図3）。しかし、こういった煉瓦造・組積造は地震に非常に弱い。サンフランシスコ地震が1906年に起こり大きな被害が出たのを見て、佐野利器（1880-1956）は1920年に市街地建築物法の導入に尽力し、世界初の耐震基準（ベースシア0.1）が設定された（図4）。そのあと3年後に発生した関東大震災は既存の煉瓦造建物を壊滅状態に至らしめた（図5）。その



図3 都市不燃化を目指した煉瓦造の導入



図4 佐野利器と耐震設計規準の制定



図5 1923 関東大震災による被害



図6 内藤多仲と日本興業銀行

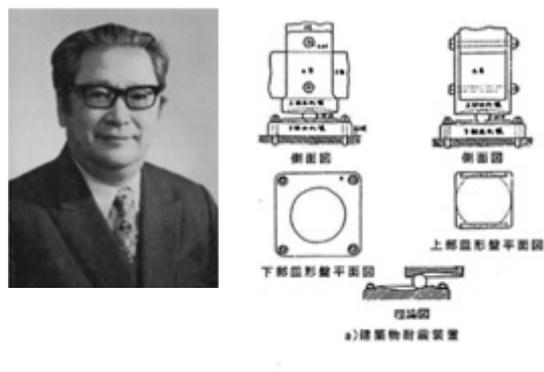


図7 棚橋諒と大正期の免震特許構法例



図8 免震構法実施例（不動銀行下関支店）

ころ鉄筋コンクリートによるラーメン構造骨組に壁を挿入した耐震構造が提案され、それを日本興業銀行の構造設計で実践したのが内藤多伸(1886-1970)である(図6)。同氏の言う「トランクの間仕切り」のように配置された耐震壁によってこの建物は関東大震災を無傷で生き延び、耐震壁を配置したラーメン構造(柱梁剛接合)が我が国のスタンダードな建築構造の姿になっていく。また、欧州では1900年以前から鋼鉄の量産化が始まり、それと同時に工業化も非常に勢いで進んでいった。日本でも1901年の八幡製鉄所の操業と鉄骨造の導入後は鉄骨構造と煉瓦造、あるいはRC造を組み合わせ

東京駅や国会議事堂等の主要なインフラが整備されていった(図9)。我が国の主要大学の建築教育においても、この震災が建築構造分野の専門領域を拡充する契機になった例が多い。

1920~1930年代には、建物を固く作るべきだという佐野利器らと、柔らかく作れば地震力を低減できるという海軍の真島健三郎らとの間で著名な剛柔論争が起こり、その後、棚橋諒(1907-1974)によるポテンシャルエネルギー論が提示された(図7)。ただし当時は強震記録が得られなかったため、この議論は結論が出ず終わってしまう。その一方でこの時代、数多くの免震構造

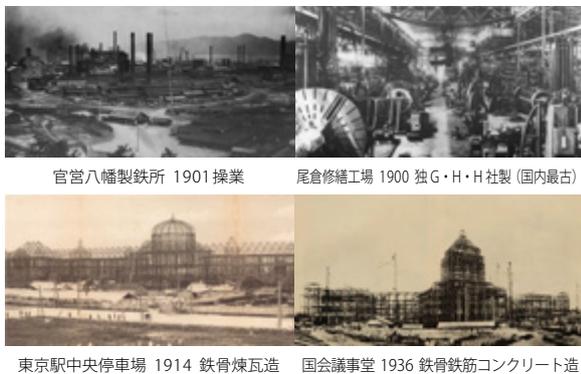


図9 鉄鋼業と鉄骨造の導入 (1900-1940)

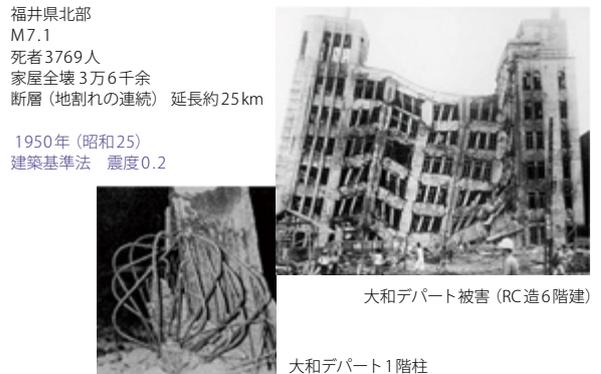


図10 1948 福井県北部地震と耐震設計規準改定



図11 G.W. Housnerと強震記録

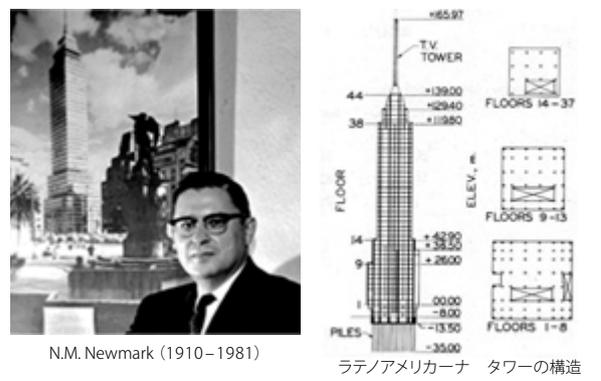


図12 N.M. Newmarkと時刻歴応答解析



図13 武藤清らによる動的設計法の導入



図14 高さ制限の撤廃と霞が関ビル建設(1968)

の特許が出願されるとともに、世界最初の免震構造である不動銀行下関支店ビルが関根要太郎と岡隆一らによって1934年に実現している(図8)。ただし当時まだ積層ゴムは存在しておらず、ロッキングコラムを基礎に埋め込むことで長周期化を図っている。

これらの初期耐震設計を施した街づくりは第2次世界大戦により一度壊滅し、焼け野原となる。戦後復興の最中、福井地震が1948年に発生し(図10)、建築基準法の震度は0.2に引き上げられる。このころようやく精度のよい強震記録が米国で得られるようになり、その応答特性を用いた Housner による応答スペクトル法の確

立(図11)、そしてコンピュータの発達により実現した Newmark の時刻歴応答解析手法(図12)が確立した。これを受けて、かつての剛構造論者であった武藤清(1903-1989)による時刻歴応答解析を用いた柔構造の研究が行われ(図13)、その結果、1920年以來の100尺(31m)の高さ制限が撤廃され、1968年には初めての超高層ビルである霞が関ビルの建設に至った(図14)。

### 3. メタボリズムと空間構造デザインの発展

一方、空間構造の世界では鉄筋コンクリートが発明されたあと、ヨーロッパを中心にそれまでの柱梁構造と

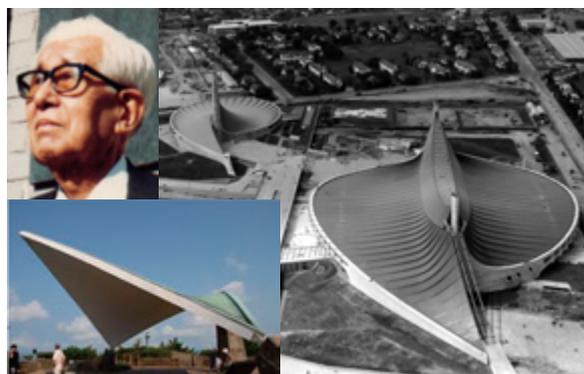


図15 坪井善勝とシェル構造、代々木体育館

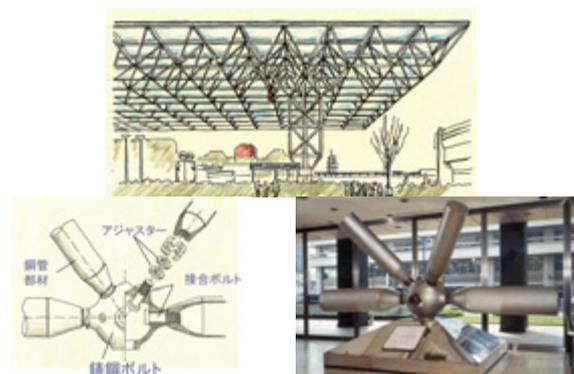


図16 大阪万博(1970)お祭り広場大屋根トラス

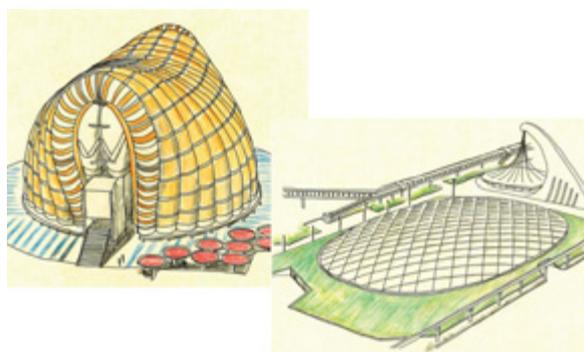


図17 大阪万博富士パビリオン、米国館(空気膜構造)



図18 PC構法の発展: 蛇の目ビル(1965)



図19 京都国際会館と木村俊彦



住友児童館: 組柱により支えられ宙に浮遊する単層ラチスドームユニットは、木村俊彦により単純メタボリズムの具現化。部屋ユニットは自由な振動モデルを用いて解析・設計された。タカラ・ビューティリオン: 黒川紀章によるメタボリズムの具現化。部屋ユニットは自由に組み替え、移動が可能。

図20 大阪万博におけるメタボリズム

異なるシェル構造が開発され、1930～1950年代にトロハ、ネルビー、キャンデラ等によって様々な空間構造デザインが実現していった。これを受けて日本におけるコンクリートシェルの発展を牽引したのが坪井善勝(1907-1990)である。坪井は学術的研究と並行し、様々なRCのシェル構造や代々木体育館(図15)、大阪万博大屋根(図16)等の鋼構造デザインを実現していった。

代々木体育館は1964年の東京オリンピック水泳競技場として整備されたものであり、ケーブルを大胆に使用した吊構造による造形の美しさより、現在でも我が国を代表する建築作品の一つとして評価されている。

大阪万博大屋根では、鋳鋼製の接合ノードを用いた立体スペースフレームシステムの開発により108m×292mの空中展示空間を実現し、その後の我が国の構造デザインやシステムトラスの開発に大きな影響を与えた。1970年の大阪万博ではこれ以外にも多くの先進的な構造技術が試みられた。図17の富士パビリオン、アメリカ館に代表される空気膜構造はその代表的なものである。

大阪万博以降、経済の高度成長は鈍化するが、建築技術は成熟段階に入る。一つのトレンドは工業化であり、プレキャストコンクリートを用いた、様々な建築の形



図21 メタボリズムの実践(1970代)



図22 松井源吾と力学に基づく構造形式の多様化



メタボリズムの延長線上で内装・設備まで建築ユニットをメーカーで製造し、家ごとトラックに載せて移動・挿入することで建設・引越しの概念が実行された。ASTMでは5層ごとのメガトラス階に空中公園が設けられた。振動解析で用いられた地震力は2次設計時PGA 400galであったが、風振動に対する設計は不十分であった。

図23 工業化住宅の集成(1979-82)



図24 超高層建物の一般化とボックス断面鋼柱の普及

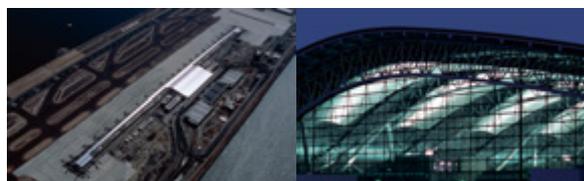


図25 超高層建物のデザインの多様化(1990-)



図26 恒久膜構造の一般化

態・施工法が追求された。その旗手が前川國男や木村俊彦(1926-2009)であり、図18、19に示すような名作が生まれ出されていった。同時にこの頃、建築を増殖させていく、あるいは移動させていくメタポリズムの概念が夢を持って試みられた(図20, 21)。その終着点が大手ゼネコンと鉄鋼メーカーによって推進された芦屋浜高層集合住宅(図23)と見えよう。住居一戸をトラックで運搬し、メガフレームに差し込んでいくということも大真面目に検討されたが、結果的には運搬コストなどにより経済的合理性が成立しなかったことから、徐々にその熱は冷めていった。



関西空港ターミナルビル 1994

幕張メッセ 1989

図 27 空間構造のデザインの多様化 (1990-)

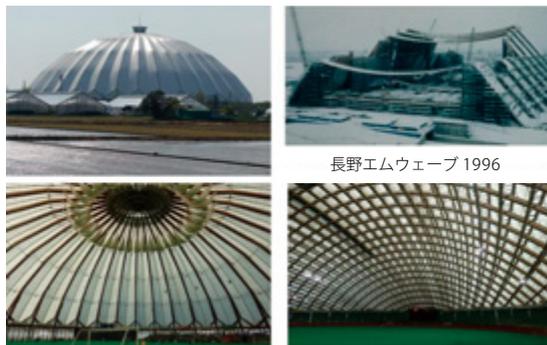
グレージングシステムによる透明建築の実現 (1984-95)



東京国際フォーラム 1996

日本長期信用銀行本店  
ガラスキューブ 1993

図 28 透明建築の展開 (1990-)



出雲ドーム 1992

大館樹海ドーム 1997

図 29 ドーム建築による木構造の復権

この時代を通じて活躍した構造家の一人に松井源吾(1920-1996)がいる。松井源吾は大学で教鞭をとりながら力学原理に基づいた構法開発を行い菊竹清訓等の建築家と組み、新しい構造デザインに基づく作品群を生み出していった(図22)。

一方、1980年代には超高層建物はかなり一般的となり、箱型断面の鋼材柱部材が量産されるようになって、これが日本の鉄骨骨組の標準となっていく。初期は整形な超高層ビルが多かったが(図24)、解析技術の進歩とともに多様な超高層ビルのデザインが実現するようになった(図25)。

一方、空間構造は1980年代後半のバブル経済以降、長野オリンピックやワールドカップ等に伴う、ドーム建設ブームがあった。この時代には、日本初の恒常的な空気膜構造である東京ドーム、そして鋼管骨組膜の名作である秋田スカイドーム、そして二重空気膜のパークドーム熊本や、張弦梁を使用するテンション構造を用いた前橋ドームなどが実現していった(図26)。また鋼構造分野でも、それまで隆盛を誇っていたシステムトラスに変わり空港や展示場を中心に溶接鋼管トラスや形鋼の組合せによる有機的な構造デザインが指向されるようになった(図27)。

ガラス被膜で覆われた透明建築が多く実現したのもこの時代である(図28)。1980年代後半にヨーロッパで展開されたサッシュレスガラス構法、ケーブル等を用いたファサードデザインに影響を受けたもので、我が国の耐震・耐風条件に合うよう改良された構法が1990年以降一般化され、広く普及した。

一方、大規模木造建築は1959年に建築学会による大規模木造禁止宣言後長く途絶えていたが、1990年以降、屋内競技場を中心に多くのドーム建築が集成材を用いてデザインされるようになり(図29)、炭素固定による木質材の地球環境問題への親和性も後押しとなって一般建築への普及が試みられている。

#### 4. 構造資料調査WGの活動

以上、駆け足で明治以降の構造デザイン史を眺めてきた。構造資料調査WGでは、まず2017~2018年度に具体的にこの時代に生きた11名の構造家、佐野利器、内田祥三、内藤多伸、武藤清、坪井善勝、坂静雄、棚橋諒、横山不学、松井源吾、松下富士雄、木村俊彦の残存資料の調査および所在のリストアップ化を行うとともに、保存すべき資料とその保存方法について議論し取りまとめを行った(図30, 31)。また、2019年度は調査をより後代の第3世代に広げ、横河民輔、織本匠、平



図30 近現代資料館構造資料調査WGの検討



図31 構造資料調査の様子（木村俊彦、2018）

田定男、鈴木悦郎、谷資信、山口昭一、矢野克巳、田中彌壽雄、村田義男、播繁、渡辺邦夫の11名に関する資料調査を追加実施した。これらの成果は国立近現代建築資料館のウェブサイトより公開されている。2019年5月には調査結果報告を兼ねて法政大学にてシンポジウム「日本の近代建築を支えた構造家たち」を開催した。同シンポジウムには200名を超える参加者が詰めかけ、建築関係者の関心の高さを伺わせた(図32)。

一方、1990年以降の構造家資料においては図面や計算書等の電子化が一段と進んでおり、後代の構造資料継承に関してはその対応も喫緊の課題となってきている。特に知的財産権の運用厳格化やデジタルデータのインターネットを通じた拡散性の増大により、構造家がまだ存命の内に没後のデジタル資料の所有権移管や公開の是非についての意思を記録しておくこと、また、電子化を視野に入れた残すべき資料の種類や移管書式の整備等について、当該構造家を交えてまとめていくことが早急に求められる状況となっている。構造資料以



図32 シンポジウムの開催（2019.5）

外の分野でも21世紀以降、設計情報の電子化が進んでおり、これ等の情報をいかにアーカイブとして構築し、継承するかの方策を見出すことは近現代建築資料館にとっても今後の課題となると考えられる。また、電子化が先行する構造資料調査についてのデジタルデータ収集方針策定を進めることは、建築にかかわる他の電子情報をいかに継承していくかの方針についても貴重な参考情報となると思われる。

2020年度では、その第一段階として、2017~2019年の3か年にわたる構造家の概要資料調査の成果をふまえて、複数の存命構造家の資料について調査を進めるとともに、デジタル資料アーカイブ構築のための課題を整理し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承にかかわるさまざまな可能性について検討を始めている。

#### 参考文献

- 日本建築学会編：近代日本建築発達史, 1969-1972  
土崎紀子他：建築人物群像追悼編／資料編, 住まいの図書館出版局, 1995  
藤本盛久編：構造物の技術史——構造物の資料集成・事典, 市ヶ谷出版社, 2001  
構造家の系譜, JA95号, 2014.9  
国立近現代建築資料館：我が国の近現代建築に関わる構造資料の概要把握調査報告書(平成29年度, 平成30年度, 令和2年度), 2017-2020

#### 図版出典

- 図1, 図2 法政大学浜田研究室作成：日本の構造家の系譜, 我が国の近現代建築に関わる構造資料の概要把握調査平成30年度報告書, 国立近現代建築資料館  
図3 〈左上〉東京風景, 小川一真出版部, 1911, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/764167/16>  
〈左下左〉鉄道院東京改良事務所：東京市街高架鉄道建築概要, 1914, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1914851/19>  
〈左下右〉たましん地域文化財団／デジタルアーカイブ, <https://trc-adeac.trc.co.jp/html/Mirador/1392015100/1392015100200010/039-011>  
〈右〉東京景色写真版, 江木商店, 1893, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/764109/39>  
図4 〈左〉建築雑誌, 1956.12  
〈右〉大阪朝日新聞, 1928.3.7(神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫), <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/index.html>  
図5 国立科学博物館地震資料室, [https://www.kahaku.go.jp/research/db/science\\_engineering/namazu/03kanto/03kanto.html](https://www.kahaku.go.jp/research/db/science_engineering/namazu/03kanto/03kanto.html)  
図6 〈左〉建築雑誌, 1970.12  
〈右〉内藤多伸：架構建築耐震構造論, 1924, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/979174/169>

- dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/979174/169  
図7 〈左〉京都大学：満田衛資委員より提供  
〈右〉日本免震構造協会：免震構造入門, オーム社, 1995  
図8 〈左〉関根要太郎研究室@はこだて, <https://fkaidofudo.exblog.jp/5909770/>  
〈右〉岡隆一：建築物免震構造の研究, 建築雑誌, No.527, pp.1425-1450, 1929.11  
図9 〈左上〉製鉄所購買会編：製鉄所写真帖, 1914, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966058/23>  
〈左下〉鉄道院東京改良事務所：東京市街高架鉄道建築概要, 1914, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1914851/14>  
〈右上〉製鉄所共済組合購買部：製鉄所写真帖, 1932, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1112164/26>  
〈右下〉参議院ウェブサイト, <https://www.sangiin.go.jp/japanese/70/70-3.html>  
図10, 図11, 図12 柴田明德：時代で見る耐震工学の今と昔, Source：NTT Facilities Research Institute Inc. <https://www.sein21.jp/TechnicalContents/Shibata/Shibata0104.aspx>  
図13 〈左〉日本コンクリート工学会, [https://www.jci-net.or.jp/j/jci/voice/voice\\_list.html](https://www.jci-net.or.jp/j/jci/voice/voice_list.html)  
〈右上・右下〉国立科学博物館：日本を変えた千の技術博：竹内徹  
図14 〈左〉Blog 荷風!, 2006.4.20, [https://www.kajima.co.jp/news/digest/jan\\_2005/kajimakiko/index-j.html](https://www.kajima.co.jp/news/digest/jan_2005/kajimakiko/index-j.html)  
〈右上〉三井不動産：霞が関ビルディング, 1968, p.60  
〈右下〉鹿島守之助：創造の生活, 1968, 口絵  
図15 〈左〉中田捷夫氏提供  
〈左下〉【ARC STYLE】, [http://www.arcstyle.com/nagasaki/407\\_yumiharidake.html](http://www.arcstyle.com/nagasaki/407_yumiharidake.html)  
〈右〉川口衛構造設計事務所, <https://kawa-struc.com/>  
図16 〈上・左下〉描画：竹内徹  
〈右下〉撮影：竹内徹  
図17 描画：竹内徹  
図18 新谷真人氏提供  
図19 〈左〉画像提供：国立京都国際会館, [https://www.ickkyoto.or.jp/planner/users\\_guide\\_and\\_tariff/guide\\_brochure/](https://www.ickkyoto.or.jp/planner/users_guide_and_tariff/guide_brochure/)  
〈右〉シンポジウム 日本の近代建築を支えた構造家達パレット, 法政大学, 2019.5  
図20 新建築, 1970.5  
図21 〈左〉撮影：Jordy Meow / CC-BY-SA 3.0, <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nakagin.jpg>  
〈右上〉磯崎新《空中都市-渋谷計画》CG(制作：芝浦工業大学有志研究室, デジタルハリウッド大学院小倉研究室)：メタポリズムの未来都市展——戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン, 2011, <https://www.mori.art.museum/blog/2011/08/4-3.php>  
〈右下〉公益社団法人ロングライフビル推進協会(BELCA), <http://www.belca.or.jp/1125.htm>  
図22 〈左上・左下〉シンポジウム 日本の近代建築を支え

た構造家達パンフレット, 法政大学, 2019.5

〈中〉撮影: 竹内徹, 松井源吾作品集1955-1988 (構造家松井源吾ウェブサイト), <https://genko-matsui.musalab.co.jp/>

〈右〉撮影: 二川幸夫, 松井源吾作品集1955-1988 (同上)

図23 季刊カラムNo.50, 1974.1

図24 〈左〉季刊カラム, No.59, 1975.12

〈右〉撮影: Okajun / CC-BY-SA 3.0, [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokyo\\_Shinjuku\\_Oka2.JPG](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokyo_Shinjuku_Oka2.JPG)

図25 〈左〉撮影: Jo / CC-BY-SA 3.0, [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Osaka\\_Tokio\\_Marine\\_Nichido\\_Bldg\\_20061105-001.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Osaka_Tokio_Marine_Nichido_Bldg_20061105-001.jpg)

〈右〉撮影: Jun-URA / CC-BY-SA 3.0, [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Century\\_Tower\\_Juntendo.JPG](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Century_Tower_Juntendo.JPG)

図26 〈左上〉撮影: Carpkazu / CC-BY-SA 3.0, [https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Tokyo\\_Dome#/media/File:Tokyo\\_dome.JPG](https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Tokyo_Dome#/media/File:Tokyo_dome.JPG)

〈左下〉撮影: 竹内徹

〈右上〉秋田県総合公社ブログ, <https://plaza.rakuten.co.jp/akitasogokosya2/diary/201101250000/>

〈左下〉松田平田設計, <https://www.mhs.co.jp/work/greendome-maebashi/>

図27 〈左・右上〉岡部憲明アーキテクチャーネットワーク, <http://www.archinet.jp/jp/projects/chronological/kia>

〈右下〉幕張メッセウェブサイト, <https://www.m-messe.co.jp/organizers/layout/layout#layoutPhoto>

図28 〈左・中〉日経アーキテクチュア, 1993.12

〈右〉撮影: Kakidai / CC-BY-SA 4.0, [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokyo\\_International\\_Forum\\_Glass\\_Building\\_3.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokyo_International_Forum_Glass_Building_3.jpg)

図29 〈左上・左下・右下〉撮影: 竹内徹

〈右上〉播繁氏提供

図30, 図31 国立近現代建築資料館: 我が国の近現代建築に関わる構造資料の概要把握調査平成29年度報告書, 2017

図32 〈上〉シンポジウム 日本の近代建築を支えた構造家達パンフレット, 法政大学, 2019.5

〈中・下〉会場撮影: 桐原武志

※以上、ウェブサイトについてはすべて2021年7月26日最終閲覧

(2021年5月5日原稿受理)

# 国立近現代建築資料館が所蔵するル・コルビュジェ設計の 国立西洋美術館の図面群について

[資料紹介]

加藤道夫\*, 加藤直子\*\*, 寺内朋子\*\*\*

## On the Drawings of the National Museum of Western Art Designed by Le Corbusier in NAMA Archives

Kato Michio, Kato Naoko, Terauchi Tomoko

NAMA (National Archives of Modern Architecture) has several drawings on NMWA (The National Museum of Western Art). The purpose of this report is to clarify the followings on them; 1) their making process, 2) their differences from the drawings sent from Atelier Le Corbusier, 3) their relations to the original drawings in FLC (Le Corbusier Foundation). The result is as follows: 1) The drawings of NAMA were only 9 drawings corresponding to the drawings sent from Atelier Le Corbusier. 2) They were not original drawings sent from Atelier Le Corbusier, but their handmade copies in Japan (Junzo Sakakura architects and engineers). 3) They come to be evidences of the design process of NMWA in Japan.

キーワード：国立西洋美術館、国立近現代建築資料館、ル・コルビュジェ、建築設計図面、複製

### 1. はじめに

国立近現代建築資料館（以下「資料館」）は、坂倉家より寄贈の坂倉準三建築研究所から引き継がれた図面群を所蔵している（2014年12月贈与契約締結）。その中に、ル・コルビュジェ事務所（Atelier Le Corbusier）固有の図面タイトルが記された国立西洋美術館（以下「西洋美術館」）の建築設計図面が存在する。この図面タイトルはプロジェクト名を示すアルファベットと数字からなり、1920年代半ばからル・コルビュジェ事務所においてオーソライズされた図面に記されるようになった。当初は3桁であった数字が後に4桁に変更された。西洋美術館ではMu.TO.と4桁の数字から構成される（以下「Mu.TO.\*\*\*\*」と表記）。

ただし、資料館が所蔵する（以下「資料館蔵」）西洋美術館の図面が1)どのような経緯で制作され、2)ル・コルビュジェ事務所（Atelier Le Corbusier）から送付された建築図面とどのような関係にあるのか、3)さらにいえば、送付図面の元になったル・コルビュジェ財団（Fondation Le Corbusier）所蔵の図面（原図）とどのような関係にあるのかについては必ずしも明確ではない。

本報告は、この点を明確化するため、現時点で追える範囲で調査を行い、その結果をまとめたものである。調査方法は以下の通りである。

1) 複数の先行研究を参照しつつ、ル・コルビュジェ事務所から日本に送付された図面群の全容を整理する。

併せて、上記送付図面とその原図にあたるル・コルビュジェ財団所蔵の図面との対応関係を明らかにする。

2) 資料館蔵の図面と上記の送付図面との関係、具体的には前者が後者と同一なのか、あるいは前者が後者の複製であるのか、だとするならどのような手段で複製されたのかについて検討する。

### 2. 日本に送付された図面群

ル・コルビュジェ事務所での原図にあたる図面の作成、日本への送付の経緯、その内容については、寺島（2009）が最も詳しく、加藤（2017）は、巻末に収められた福田作成の年表に記されたメゾニエの図面も含めて、送付図面についての整理を行っている。

その他、付け加えるなら、藤木（2011）には、日本に送付された図面がどのようなものであり、どのように加工されて利用されたかについての記述がある。千代（2016）および寺島・千代（2017）には、ル・コルビュジェ財団所蔵（以下「財団蔵」）の西洋美術館図面に加えて、西洋美術館実現に関連する書簡撰に加えて1956年7月10日付の「東京、西洋美術館の建設に関するル・コルビュジェの注釈（note）」（以下「注釈」）が掲載されている。

本資料紹介では、資料館蔵の図面と比較するため、日本に送付された図面について、a) その送付日時、b) その形式（原図或いは青焼き図面〔青図〕<sup>1)</sup>）、c) 送付部数に着

\*国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士

\*\*国立近現代建築資料館 研究補佐員、博士（学術）

\*\*\*国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士（工学）

目して、重複を恐れず再整理を行った。その結果は以下の通りである。

寺島によれば、図面送付は基本設計図1回と実施設計図3回であり、その内容を整理すると以下のようになる(寺島, 2009, p. 148)。

以下、送付はフランスにおける送付日、受領は日本における受領日をさす。

#### 1) 基本設計図送付

1956年7月18日、在仏西村大使がル・コルビュジエ

より基本設計図3枚 (Mu. TO. 5400-5402) を受け取り、日本へ送付 (8月9日受領)<sup>2</sup>。

#### 2) 実施設計図送付

a. 1957年3月30日、在仏古垣大使がル・コルビュジエより実施設計図9枚 (Mu. TO. 5481-5489) [平面図6枚と断面図3枚] の青焼き図面 (青図) 2部を受け取り、日本へ送付。4月10日文部省受領 ([ ]内筆者挿入)。

b. 1957年5月9日、図面11枚 (Mu. TO. 5581-5589)

表1 日本に送付された図面群

図面タイトル	財団対応図面	日付 (作成年月日)	図面名称/備考
Mu.TO. 5400	FLC24615	1956年7月9日	文化センター全体配置図 (plan d'ensemble)
Mu.TO. 5401	FLC24616A	1956年7月9日	第3, 4, 4bis, 5層平面図
Mu.TO. 5402	FLC24617A	1956年7月9日	断面図AA, BB
Mu.TO. 5481	FLC24618A	1957年3月26日	第2層平面図/ グランドレベル
Mu.TO. 5482	FLC24619A	1957年3月26日	第3層平面図/ 展示ギャラリーレベル
Mu.TO. 5483	FLC24621A	1957年3月26日	第4層平面図/ 中3階レベル
Mu.TO. 5484	FLC24622A	1957年3月26日	第5層平面図/ 屋上レベル
Mu.TO. 5485	FLC24623	1957年3月26日	南東立面図
Mu.TO. 5486	FLC24624	1957年3月26日	南西立面図
Mu.TO. 5487	FLC24625	1957年3月26日	標準断面図 (coupe standard) / 展示ギャラリー
Mu.TO. 5488	FLC24625	1957年3月26日	19世紀大ホール 断面図
Mu.TO. 5489	FLC24627	1957年3月26日	19世紀大ホール 断面図
Mu.TO. 5509	FLC24628	1957年5月2日	北東立面図
Mu.TO. 5510	FLC24629	1957年5月2日	北西立面図
Mu.TO. 5526	FLC24630	1957年6月13日	外壁施工例 (Variante pour la construction des facades)

に加えて、Mu. TO. 5509-5510 [立面図] の青焼き図面 (青図) 2部を送付。5月29日に受領 ([ ] 内筆者挿入)。

- c. 1957年6月8日、在仏大使が9枚の図面 (Mu. TO. 5481-5487, 5509-5510) 図面1部と付属説明書2部を受け取り、6月14日送付 (6月26日受領)。加えて巻末の年表には下記の設備関連、ファサードの詳細について記した図の送付が記されている。「1957年6月14日 [ル・コルビュジエ事務所の担当者

の] メゾニエ、吉阪へ照明、ガラスパネル、空調設備等の詳細及びファサードに関する図面 (Mu. TO. 5526) を送付 [受領日の記載なし] ([ ] 内筆者挿入)。

以上の送付図面については、対応する原図が財団に所蔵されている。それぞれの財団図面番号と日付 (作成年月日) を示すと表1のようになる。

次に当時の坂倉事務所の所員で西洋美術館の設計を担当した藤木による情報を加える。それによれば、

表2 資料館蔵の図面群

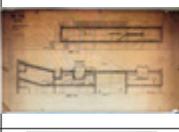
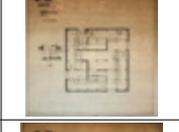
図面タイトル	資料館蔵図面	建築資料館図面番号 (仮)	財団対応図面	日付 (作成年月日)	図面名称/備考
Mu.TO. 5400		501-02-056	FLC24615	1956年7月9日	文化センター全体配置図 (plan d'ensemble)
Mu.TO. 5401		501-02-055	FLC24616A	1956年7月9日	第3, 4, 4bis, 5層平面図
Mu.TO. 5402		501-02-054	FLC24617A	1956年7月9日	断面図AA, BB
Mu.TO. 5481		501-02-045	FLC24618A	1957年3月26日	第2層平面図/ グランドレベル
Mu.TO. 5482		501-02-043	FLC24619A	1957年3月26日	第3層平面図/ 展示ギャラリーレベル
Mu.TO. 5483		501-02-044	FLC24621A	1957年3月26日	第4層平面図/ 中3階レベル
Mu.TO. 5484		501-02-042	FLC24622A	1957年3月26日	第5層平面図/ 屋上レベル
Mu.TO. 5486		501-02-052	FLC24624	1957年3月26日	南西立面図
Mu.TO. 5487		501-02-053	FLC24625	1957年3月26日	標準断面図 (coupe standard) / 展示ギャラリー



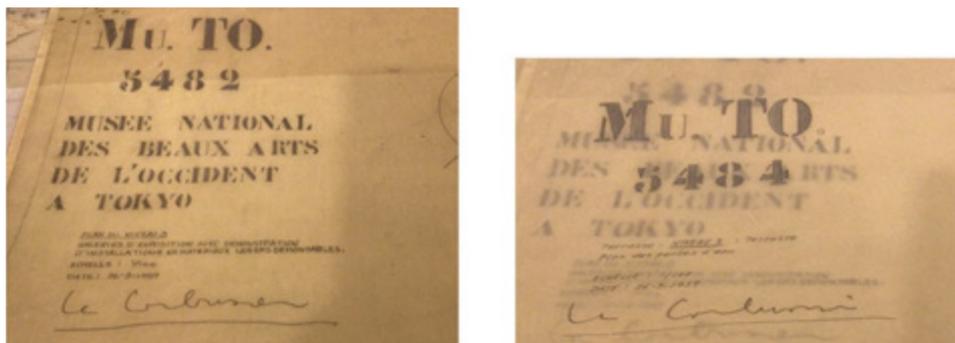
図1 ル・コルビュジェ事務所で使用されたステンシル・プレート（複製）



ル・コルビュジェ財団蔵  
FLC24616A（部分）

資料館蔵（坂倉家より寄贈）  
501-02-055（部分）

図2 財団蔵と資料館蔵の図面の比較（Mu.TO. 5401 部分）



501-02-043（部分）

001-02-042（部分）

資料館蔵（坂倉家より寄贈）の実施設設計図（部分）

図3 資料館蔵の実施設設計図（Mu.TO. 5482, 5484 部分）

1956年7月に「到着した(ママ)」した「3枚の図面」は「青写真(青図)」であり、「トレースされ、焼き増し後、関係者にくばられた」と記されている(藤木, 2011, p. 124)。これは、上記1)の基本設計図に相当すると考えて間違いない。

また、実施設計図(藤木は「基本設計」と記しているが、ここでは寺島にならって「実施設計」とする)については、「基本設計(ママ)は1957年4月から6月にかけて到着。図面11枚、縦ダクト内合わせ図、設計説明書(A4変形)、第2原図だ」(藤木, 2011, p. 128)と記されている<sup>3</sup>。これは、その内容が図面11枚に加えて設計説明書を含むことから、上記の2章2)の実実施設計図送付におけるb. c.を合わせたものに相当すると考えられる。

以上の送付図面についてまとめると、以下のようになる。

- 1) ル・コルビュジェ事務所から送付された図面は、コルビュジェ事務所の図面タイトル Mu. TO. 5400-5402 (作成年月日: 56年7月9日) の基本設計図3枚に加えて、Mu. TO. 5481-5489 (作成年月日: 57年3月26日) 9枚と Mu. TO. 5509, 5510 (作成年月日: 57年5月2日) のそれぞれ北東と北西の立面図2枚、そして Mu. TO. 5526 (作成年月日: 57年6月13日) である。Mu. TO. 5526は単独で送付されただけでなく、書式が著しく異なっており、補足的な図面と考えられる。
- 2) 基本設計図3枚 (Mu. TO. 5400-5402) は青焼き図面(青図)1部が送付、実施設計図9枚 (Mu. TO. 5481-5489) については青焼き図面(青図)が計4部、Mu. TO. 5509-5510については、青焼き図面(青図)2部が送付されたことになる。
- 3) 別途、1957年6月8日に図面9枚 (Mu. TO. 5401-5407, 5409-5510) が1部送付されているが、体裁は詳細不明である。後述の藤木のいう第2原図がこれに当たる可能性がある<sup>4</sup>。

### 3. 資料館蔵のル・コルビュジェ事務所由来の西洋美術館図面

資料館蔵の図面を調査した結果、ル・コルビュジェ事務所由来する痕跡をとどめる図面、すなわちル・コルビュジェ事務所固有の図面タイトルと「Le Corbusier」の署名(らしきもの)が記された図面は9枚に限定されることが判明した(表2)。

以上の資料館蔵の図面はすべてトレーシングペーパーに手描きであり、「Le Corbusier」の署名らしきものが記されているため一見すると原図に見える。しかし、調査結果は以下の通りである。

まず第一群の図面 (Mu. TO. 5400-5402) について、財団蔵図面との比較調査結果について述べる。

- 1) 資料館蔵の Mu. TO. 5400 から Mu. TO. 5402 の3枚はインキングされた図面であり、図面タイトル (Mu. TO. \*\*\*\*) の記載がいずれも財団固有の書式であるステンシル・プレート(型板)を用いた転写ではなく、手描きの痕跡がある。(図1, 図2)
- 2) 資料館蔵の図面のテキスト部は、斜体の手描き文字で書かれている。対して財団蔵の原図のテキスト部は立体のタイプライターによる印字、もしくはそのカーボンコピーである(図2)。
- 3) 前述のように、日本に送付された図面は青焼き図面(青図)であり(藤木, 2011, p. 124)、日本に送られた原図は存在しない。
- 4) 以上から、資料館蔵の図面はコルビュジェ事務所で作成されたオリジナルの図面ではなく、(日本において)人間の手によってトレースされたものであると判断される。したがって、「Le Corbusier」という署名も精巧なトレースと考えられる。

次に第2群の図面 (Mu. TO. 5481 から 5484, 5486, 5487) についての財団蔵図面との比較結果について述べる。これについては、青焼き図面(青図)が送付されている(寺島, 2009, p. 148)。付言するなら、藤木は第2群の図面群について「第2原図」と記していた(藤木, 2011, p. 128)。

対して資料館蔵の図面はトレーシングペーパーへの手描きトレースである。「Mu. TO. \*\*\*\*」のポシェ(黒塗り)部分もステンシル転写ではなく、鉛筆描きの痕跡が認められる。また、財団蔵におけるタイプ原稿部分については、斜体だけでなく立体で精巧にトレースされたものも存在する(図3)。

したがって、資料館蔵図面は藤木が記載した第2原図とは考えられない。寺島が記載した青焼き図面(青図)か藤木が記載した第2原図のトレースと考えられる。

### 4. 結論

資料館蔵の「Le Corbusier」の署名らしきものが記された図面群について以下が明らかになった。

- 1) 資料館蔵の図面群は日本に送付された基本設計図3枚 (Mu. TO. 5400-5402) と実施設計図9枚 (Mu. TO. 5481-5489) の一部6枚 (Mu. TO. 5481-5484, 5486, 5487) の計9枚に対応する。
- 2) 上記の基本設計図3枚に対応する図面については、藤木が記載した「トレースされ」た図面である可能性が高い。

- 3) 1957年の4月から6月に送付された実施設計図について、資料館蔵図面には「第2原図」は存在しない。
- 4) 以上から資料館蔵の図面の中はいずれも日本に送付された図面そのものではなく、ル・コルビュジエの署名ヤル・コルビュジエ事務所における日付(作成年月日)を含めて人間の手によってトレースされた複製図面であると判断できる。したがって、資料館蔵図面に記載された日付(年月日)は複製図面(資料館蔵図面)の作成年月日を示すものではない。
- 5) 資料館蔵の図面は、坂倉事務所における西洋美術館の設計過程において、人間の手による図面複製が行われたという当時の設計作業工程を示す具体的な証拠となっている。

## 注

- 1 寺島(2009)は「青焼き図面」と表記している。ただし、寺島のいう「青焼き図面」は陰画である。資料館では青地に白の線図(陰画)を「青図」、白地に青の線図(陽画)を「青焼き図」と区別しているの、青焼き図面(青図)と表記する。
- 2 寺島・福田は図面送付について「7月18日、在仏西村大使、ル・コルビュジエより基本設計図3枚(Mu. To. 5400-5402)を受け取り、日本に送付」と記している(寺島, 2009, p. 148)。また、送付された図面(Mu. TO. 5400-5402)には1956年7月9日の日付が記されている。そのうちMu. TO. 5400は『全作品集1952-1957』に掲載された(ボジガー, 1997, p. 166)。また、同図面の送付に添付された1956年7月10日付の「東京、西洋美術館の建設に関するル・コルビュジエの注釈(note)」(以下「注釈」)が存在し、そこには以下のように記される。「25枚の図版[planches]からなるCIAMグリッド[la grille CIAM]と数葉の計画図[plans]の形で提出された計画[projet]は、1955年12月からのすべての検討を示している」(筆者訳)。注釈の「数葉の計画図」が送付図面に対応する。
- 3 寺島(2009)には「第2原図」という記載はない。本稿の2章日本に送付された図面群、2) 実施設計図送付a. b.にあるように4月、5月受領の図面は「青焼き図面(青図)」としている。「青焼き図面(青図)」という明示的な記載がないのはc.にある6月受領の図面のみである。
- 4 ここでの「基本設計」とは図面タイトルから寺島(2009)における「実施設計図」にあたる。すなわち、送付された図面は青焼き図面(青図)か第2原図ということになる。

## 参考文献 (発行年代順)

- ボジガー, W. 編: 〈ル・コルビュジエ〉全作品集1946-1952, A.D.A. EDITA Tokyo, 1978 (Boesiger, W. ed.: *Le Corbusier Œuvre complète 1946-1952*, Les Éditions d'Architecture (Artemis), Zurich, 1953の邦訳版)
- ボジガー, W. 編: 〈ル・コルビュジエ〉と彼のセーヴル街35番地のアトリエ全作品集1952-1957, A.D.A. EDITA Tokyo, 1977 (Boesiger, W. ed.: *Le Corbusier Œuvre complète 1952-1957*, Les Éditions d'Architecture (Artemis), Zurich, 1957の邦訳版)
- 寺島洋子編: 開館50周年記念ル・コルビュジエと国立西洋美術館, 国立西洋美術館 / (財) 西洋美術振興財団, 2009
- 藤木忠善: ル・コルビュジエの国立西洋美術館, 鹿島出版会, 2011(第2刷2016)
- 文化庁監修: ル・コルビュジエ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に, 文化庁, 2015
- Le Corbusier Plans Online, Fondation Le Corbusier et Echelle-1, 2015
- 千代章一郎: ル・コルビュジエ図面撰集—美術館編一, 中央公論美術出版, 2016
- 加藤道夫: コーラとしての建築—ル・コルビュジエの《国立西洋美術館》—, 図学研究, 51 (152), pp. 6-12, 2017(初出: 日本図学会2016年度春季大会講演論文集)
- 寺島洋子, 千代章一郎編: ル・コルビュジエの芸術空間—国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡—, 国立西洋美術館 / (財) 西洋美術振興財団, 2017
- 山名善之: 世界遺産 ル・コルビュジエ作品群—国立西洋美術館を含む17作品登録までの軌跡—, ToTo出版, 2018

## 謝辞

本報告作成にあたっては、財団蔵のタイプ打ちを伴う大判図面に関して、千代章一郎氏からタイプ打ちが図面に直接なされているという貴重な証言とその制作法についての助言をいただいた。ここに感謝の意を表する。

(2021年5月9日原稿受理)

# 村田豊建築設計資料整理報告

[資料紹介]

飛田ちづる\*

## Report of architectural materials by MURATA Yutaka

Tobita Chizuru

This is the temporary report of architectural materials by MURATA Yutaka, who is famous for PNEU and Nihon Bankoku exhibition in 1970, which is partly collected at "Le Centre du Pompidu". His activity is not placed at the era, however the project might be jazzy and challenging. Half of the materials is already listed and published at NAMADB. New viewpoint of his activity will be found in the future after listed.

キーワード：村田豊、空気膜構造、パビリオン

### 1. はじめに

本報告は、2019(令和元)年度に贈与契約を締結した村田豊建築設計資料の整理に伴う調査報告及び、佐々木の研究<sup>1</sup>に記載された村田豊のプロジェクトに加え、新たなプロジェクトを記載し、同時に写真資料から可能な範囲でプロジェクトの確認を行い報告するものである。同資料群は、図面以外は現在も整理中であり、今後新たなプロジェクトが追加される可能性もある。

村田豊は前出の研究にも記載されているように1917(大正6)年に新潟県新潟市に生まれ、1985(昭和60)年に没するまで、1970(昭和45)年に「管圧式空気構造建築技術の開発」により科学技術庁長官賞を受賞するなど、一貫して建築の可能性に独自の姿勢をもって挑み続けた。代表作として日本万国博覧会のパビリオンにおける空気膜構造施設が挙げられる。また、建築評論家の川添登との親交から、キャンティの設計も担当した。

### 2. 村田豊建築設計資料の収蔵までの経緯

旧村田豊建築事務所を出所とする。1988(昭和63)年に村田豊が逝去し、同事務所が閉鎖された後、資料は遺族へと引き継がれ、村田家(新潟県新潟市)に移された。2003(平成15)年頃、これらの資料のうち、村田の代表作に関する建築設計図書と模型の一部がポンピドゥー・センターに寄贈された。2013(平成25)年12月、村田家の実家にて保管されていた資料は、村田豊息女のあが氏が勤務する跡見学園女子大学(埼玉県新座市)へと移され、2019(令和元)年9月に贈与契約を締結し、後国立近現代建築資料館収蔵に至った。

本資料群は村田豊建築事務所を含めた村田豊の建築設計活動に関するものであり、図面筒23本、図面ケー

ス8点、ケースなし図面16束、模型2点、書籍、報告書、アルバム等段ボール13点、写真額装1点、写真筒1点、映像資料段ボール1箱から構成される。

これらを、図面とそれ以外に分けて、概要調査の結果全体の構成を決め整理を行った。フォンドの下位に前述の容器をファイルとして位置づけた。ファイル番号は1から48番を図面、後半をそれ以外とした。2021(令和3)年4月現在、図面は既に目録作成を終え、後半のファイルを整理中である。なお、整理中ではあったが、当館主催2020(令和2)年度後期展覧会である収蔵品展に富士グループパビリオンの立面図の青焼きを出品した。また、国立近現代建築資料館収蔵資料検索システム(NAMADB)にファイルレベルのデータを投入済みである。

### 3. 村田豊建築設計資料の整理方針

村田豊建築設計資料の整理方針は、図面の前半と後半およびその他で異なる。本来であれば統一した方針の下、調査と整理を行うことが望ましいが、前半部分については後半と合わせた方法をとることが可能なように目録を作成しているため、こうした方式を採用した。

後半の整理方針は以下のとおりである。大原則として当初の状態をそのまま目録に記述することを決め、調査者の判断を含まない整理方法を採用している。つまり、資料調査時、目録作成時に判明することは備考欄等にファイルあるいはアイテムレベルで記載はするものの、物理的に関連性のある資料をまとめたり、図面等に記載されている番号順に並べ替えたりといった作業は行わない。また、収蔵資料検索データベース(NAMADB)への資料情報掲載を前提としているため、資料番号として、例えばアイテムとした資料にはフォンド番号からアイテム番号までを振り、アイテム以下の目録は同時に

\*国立近現代建築資料館研究補佐員、博士(世界遺産学)

作成せず、員数のみ記載している。

この手法を採用することで、資料群を研究する人間が改めて調査を行う環境を整えた。調査者による判断を行わないことで、研究を行う人間の判断が研究の初期段階となる。

建築資料を調査する人間は、その多くが建築の知識を持つため、資料調査や目録作成の際に自らの経験に基づき、番号順の並べ替え、まとめ、或いは第二原図、施工図といった分類を行うことが多いようである。

しかし、その作業により失われる情報が少なからず存在すると思われファイル25番以降は採用していない。この手法を採用することにより、調査者の作業が早くなること、並べ替え等を行わないが備考欄に判明したことや他の資料との関連性から推察できることを記入し、一通りの整理を終えたのち、さらなる調査、あるいは研究を行える下地作りとした。

手つかずの資料を並べ替えることにより、失われる情報を可能な限り減らすという方針のもと実施した結果であることを記したい。

## 4. 資料整理の経過報告と追加プロジェクト

### 4.1. 全体の傾向

2019(令和元)年度6月から図面の整理を開始した。6月から1月までにファイル1番から24番、2020(令和2)年度9月から1月までにファイル番号25番から48番の整理と目録作成を終えた。

並行して、ファイル49番以降の資料の整理も進めている。こちらは書簡、写真、アパチャーカード、業務用のメモ、書類などが含まれている。また、委託会社の図面なども含まれている。概要調査のレベルではあるが図面以外の資料もまた、村田豊氏の建築活動を物語る。

前任者の資料によれば現地調査を行い当館に運び込んだ際に箱ごとに番号を振り、それをファイル番号とした。図面一枚から、紙質、表現手法、スクリーントーンの表現、色鉛筆と鉛筆、村田豊建築事務所の印、修正の手法などが読み取れる。

概算であるが、A0以上、A1、A2、A3、B4、B5大に大別され、最も多い判型はA1、少ない判型はA0及びB4以下である。

### 4.2. 追加プロジェクトの数と種類

今回の報告では、図面の整理と書類、写真等の一部を整理し、既存研究で発表されているプロジェクトに追加すべきものがあるとわかったので、表1に判明した年代とともに記す。原則として村田豊事務所設立後の1956

(昭和31)年以降としたが、収蔵資料に含まれている寺田邸は記載した。また、収蔵資料ではないが村田あが氏から村田豊氏のプロジェクトとして提示された永田邸も追記している。プロジェクト年代は今後の整理により多少前後する可能性はある。追加プロジェクトの名称および年代については資料調査時に判明した、図面の記載を採用している。表中「新規」欄に※印のあるものは今回の調査で判明したプロジェクトであり、「収蔵」欄に印のあるものは当館に図面を収蔵しているプロジェクトである。

### 4.3. 全体の傾向

図面資料のうち、最も多いプロジェクトは博覧会関係、次いで、レストラン、住宅が並ぶ。また、村田豊の特徴である空気膜構造(以下、PNEU)を見れば、養鰻、プール、遊園地なども見られる。また、病院の設計も行っている。

博覧会関係が多いのは、村田豊の得意とする、空気膜構造の活躍する場が永続的な用途ではなく、一時的な用途にその利便性と華やかさを見出されているからだと思われる。一方で永続的な用途の場合、倉久邸別邸(クラーク邸別邸)のように、屋根の意匠、家具、照明の曲線にその特異性を見出すことができる。村田豊氏の仕事に使われた手帳やメモなども残されているため、今後こうした設計に関してメモが残されていれば、合わせて調査することで、より深く理解することができると思われる。

図面から、第二原図ではない複写された図面が残っている7-25のようなファイルも存在する。博覧会パビリオンを除き公共性の高い建築を扱った印象は薄いものの、鳥羽市、新潟市役所に関連した計画案も存在する。なお、追加プロジェクトのうち年代の判明しないものは、21件ある。

### 4.4. 追加プロジェクトの傾向

整理の結果今回の整理で追加されたプロジェクトのうち年代の判明しているものは、1970年代および1980年代(昭和40年代後半から60年代)が多い。その内訳は空気膜構造が最多と思われ、ついで商業施設としてレストランである。年代の判明していないプロジェクトは、空気膜構造8件、商業施設6件、個人住宅2件である。寄贈者である村田あが氏から、事務所の受注傾向として空気膜構造を追求しつつ、並行して商業施設の受注もしていたと聴いており、それが裏付けられたといえる。

また、テニスコート、プール、養鰻施設などPNEU

は屋外施設で使用されるため、屋外施設の受注の多いことも特徴的である。商業施設については、村田の印象的な華やかさがハレの日を演出する必要がある商業施設において喜ばれたのではないだろうか。

印象論であるが村田豊は、時代に即した設計や、建造物および記念碑に象徴される永続性とは別の意義を希求した建築家と推察する。村田豊建築設計資料の図面は全体的に力強い。他の資料と合わせ、今後思考の過程を辿ることができる可能性もある。

#### 注

- 1 佐々木暢「村田豊の建築——同時代の空気構造と彼のオリジナリティ」(2014年度東北大学大学院工学研究科修士論文)

#### 謝辞

本報告は、村田豊建築設計資料の寄贈者である村田あが氏(跡見女子学園大学教授)の助言、前任者の藤本貴子氏(法政大学教務助手)らによる収蔵手続きと目録作成に加え、稲垣晴夏氏(国立映画アーカイブ)、小澤梓氏(埼玉県立公文書館)、岡野春咲氏(千葉大学大学院修士課程)の整理と目録作成による。ここに記してお礼申し上げる。

(2021年5月11日原稿受理)

表1 村田豊氏のプロジェクト一覧

竣工/計画年	新規	収蔵	プロジェクト名	備考†1
1952 (昭和27年)		※	寺田邸	
1959 (昭和34年)			岡田邸	木造応力外皮屋根
		※	エスゲラ箱根別荘案	
1960 (昭和35年)			長崎印刷埼玉工場	
			チェニス首都計画国際コンペ案	
		※	レストランキャンティ内装	S40
		※	鳥羽ホテル計画案	
1961 (昭和36年)		※	高橋邸	
		※	三浦邸	
		※	賛育会病院	S37
1962 (昭和37年)		※	レストラン常盤家	
			ポール・ネロ邸案	
		※	日本鉱業給油所案	S36
		※	千葉県知事公邸改装	
			村田宗家の墓	
		※	日本鉱業給油所案	
		※	すきやき「神戸」	
1963 (昭和38年)		※	REZ de-CHAUSEE	
		※	絵画堂ギャラリー	
			ラジオ関西改装案	
		※	龍村織物美術館東京支店改装	
1964 (昭和39年)		※	寺中邸	吊屋根 S38
		※	レストランキャンティ増築	
		※	保坂邸	吊屋根 S38
		※	乃木坂マンション案	
1965 (昭和40年)		※	Project pour Le Coin de Bourigue au Grands Mazons Matuzakaya	
		※	クラブ・シャングリラ内装	
			日本炭素ビル案	
		※	光輪閣将来計画案	
		※	ソニービル内装工事 (ベルベデーレ内装)	
		※	荻野邸	
1966 (昭和41年)		※	福澤邸	
		※	三井邸	吊屋根
		※	ベルベデーレ内装	
		※	HAKONE	狸穴CHIANTISSIMO
		※	鳥羽市開発計画案 鳥羽市観光商業地域造成診断報告書第2編	1966-2
1967 (昭和42年)			ピニシェル計画案	
			フォントナ内装	トリコット構造
		※	クラブ・トベ	
		※	ラ・モール内装	
		※	バブ・カーディナル	棚
		※	三好箱根別邸案	吊屋根
		※	新聞邸 (案)	S52
			万博本部ビル設計競技審査員	
			シャンゼリゼ内装工事	
		※	佐渡改装 佐渡雲清山庫裏本屋改装	
		※	上野・松坂屋キャンティ	4 2 . 3 . 2 4 4 2 . 4 . 6 4 6 . 1 . 2 1
1968 (昭和43年)		※	加納邸マンション内装	トリコット構造
		※	ブティック・ペビードール内装	
1970 (昭和45年)		※	クラブ花内装	
		※	亜鉛鉄板コンペ	
		※	日本万国博覧会富士グループパビリオン	空気膜構造
		※	日本万国博覧会電力館水上劇場	空気膜構造 S44
		※	渡辺邸	
		※	キャンティ名古屋松坂屋本店新館8階レストラン	
		※	クラブニューハナ内装	
		※	バーラー・羅甸内装	
		※	サンジェルマン内装	
1971 (昭和46年)		※	バリボンビドーセンター国際コンペ案	引張構造
		※	村田邸計画案	
		※	箱根コンペ案	
		※	伊勢丹デパート地下鉄連絡階段拡張計画案	
1972 (昭和47年)		※	PNEUMATIC STRUCTURE	
		※	ソビエトロシア青少年スポーツ施設案	空気構造
		※	水泳場+アイススケート場	
		※	海洋博ステンレス二重膜空気構造案	
		※	宮田邸計画案	
		※	ジャクラ計画案	
		※	クラーク別邸 倉久氏別邸	
1973 (昭和48年)		※	キャンティ赤坂店内装	
		※	広橋医院	吊構造
			空気仮枠FRP量産住宅案	
		※	上杉邸	吊構造
		※	テニスコート	S46
1975 (昭和50年)		※	原宿のビル計画	吊構造
		※	永野邸 (案)	
		※	沖繩海洋博覧会芙蓉グループパビリオン	
			吊構造による小学校建築案	
		※	クラブシャトレ	S40
1976 (昭和51年)		※	網膜式空気構造開発	S53
		※	村井邸	
		※	M式水耕研究所用空気構造温室	
		※	三重県 養鱈池用空気構造	
		※	萩山クラブ計画案	
		※	CAF_ LATIN HIROSHIMA	
		※	CAF_ LATIN CHIBA	
		※	松岡産業用鰻エアーハウス	
		※	日野市高幡台スポーツランド管理棟新築工事試案	51.4.7, 52.1.19, 52.2.7
		※	銀座羅蜀	51.5.26
		※	PNEUMATIC HYDROPONIC GREEN-HOUSE in NAGOYA	
		※	グリーンウッドPNEU	
		※	大林組リヤドニューマチックグリーンハウス (案)	
1977 (昭和52年)		※	持田邸	
			レストランベルベデーレ吉祥寺店内装	
		※	箱根小涌園子供村「空気のお山」	
		※	箱根小涌園プールサイド	
		※	辻口邸	吊構造 不明
		※	日野市児童館試案	
		※	広島駅ビル2F羅蜀改装工事	
		※	PNEUMATIC HILL NO.7	
		※	農業用PNEUMATIC HOUSE NO.4	
		※	小涌園PNEUMATIC HILL	
		※	箱根別荘	
1978 (昭和53年)			芦屋の吊構造ビル案	
		※	神戸垂水中学校プール空気構造上屋	S52
			名鉄スーパーマーケット屋上プール空気構造上屋	
		※	HAKONE新築工事	
		※	黄桜酒造PNEU	
		※	40m x 40m TENT プール 家庭用 プールPNEU	
		※	アラビアPNEU (案)	53.4.28
		※	グリーンウッドテニスランチ 空気構造 屋内テニス場	53.5.25
1979 (昭和54年)		※	箱根三好別邸	
			針生邸	
			神戸神楽台、同王塚台中学校プール空気構造上屋	
			名古屋家具移動展示用空気構造	
			青山ピラ・モデルナ 中目黒	二重膜空気構造
			青山表参道ビル屋上実験農場用空気構造	
			北海道上の国町・湯の町町営 プール空気構造上屋	
		※	HAKONE新築工事	
		※	社会学園PNEU	
		※	玉川高島屋展示空気構造	
		※	(テニスコート)	54.1.11
		※	テニスコート 三面用空気構造	54.5.14
		※	プールPNEU (竜興興業のもう一つのプール)	54.12.5
1980 (昭和55年)			岐阜県多治見高校プール空気構造上屋	
			名古屋近郊釣り堀空気構造上屋	
			木曾福島町味噌倉空気構造	
		※	箱根小涌園子供村施設	
		※	正ちゃん池 PNEU	55.8.28
		※	小田急城テニスガーデン	55.8.4
		※	ブルドーム (日本アルミ カタログ用)	55.2.20

竣工/計画年	新規	収蔵	プロジェクト名	備考	
1981 (昭和56年)	※	※	柴田邸案	吊構造	
			サーカステント案	サスペンション膜構造	
			宮崎県立工業高校プール空気構造上屋		
	※	※	沖縄パシフィックホテルプール空気構造上屋		
			日本大学横芝セミナーハウスプール空気構造上屋		
	※	※	名古屋フラワーショー用空気構造	管圧式	
	※	※	神戸ポートピア博覧会芙蓉グループパビリオン		
			空気膜構造計画案		
			空気膜構造		
	※	※	慶応大学50M+30M プールPNEU	56.12.4	
1982 (昭和57年)	※	※	新宿伊勢丹デパート屋上遊具	空気構造 S50	
	※	※	池袋サンシャインシティ屋上遊具「胎内くぐり」	空気構造	
			日本橋三越デパート屋上空気構造及びグリッドシェル案		
			EXPO'85農林水産館案及び芙蓉館案	空気構造	
			ラ・ヴィレットコンペ案		
	※	※	「長生きする家」コンペ案	1982	
	※	※	POOL PNEU No.82709	57.7.9	
	※	※	橋本高校	57.9.29	
	1983 (昭和58年)			群馬スイミングスクール空気構造	
				ディズニールンド用空気構造案	
			新潟博覧会会場全域を覆う空気構造案		
			ミサワホーム研究所及び同伊豆実験農場用空気構造案		
※		※	東京国立競技場テニスコート及び駐車場空気構造案		
※		※	草津町プールPNEU No.2	58.2.4	
※		※	草津町プールPNEU No.1	58.2.4	
1984 (昭和59年)				高知黒潮博覧会ヤンマー館空気構造	
				栃木博覧会農業館空気構造	
				沖縄プール空気構造上屋	
	※	※	東京都三宅島阿古小・中学校体育館空気構造		
			鹿児島テクノフェア空気構造パビリオン		
1985 (昭和60年)			新宿伊勢丹デパート屋上遊具「エアロトンネル」	空気構造	
			太陽工業エアロジウム (空気構造遊具) 試作		
	※	※	ダイキン、テニスコート用空気構造案		
			太陽工業、間伐材によるジャングルジウム		
	※	※	YOKOTA	米軍横田基地内プール 製造はM式水耕研究所 1985年2月15日	
	※	※	名山小学校屋上プール	製造はM式水耕研究所 1985年2月15日	
1986 (昭和61年)	※	※	神社	1985.8.8	
	※	※	村田式網膜空気構造CABLE NET 交点金物	1985 8 31	
			熊本博覧会空気構造水耕パビリオン案		
			φ 300m 空気膜構造案		
	1987 (昭和62年)	※	※	国際蘭博覧会のための2棟のパビリオン	
※		※	新潟市役所跡地建設計画 (案)	9月1日	

			家具等図面	
	※	※	江崎邸内扉	
			ミロワール	
			三角テーブル	
	※	※	田中邸	
			内装	
			設備	
			トヨウケ邸計画案	
	※	※	住宅計画案 試作組立住宅	
			鉄骨造住宅コンペ案	
			佐藤邸計画案	
			プレハブ住宅案	
			プロジェクト不明	
	※	※	全自動水耕空気構造農園	
	※	※	ONCOURS INTERNATIONAL- PARC DE LA VILLETTE PARIS	
	※	※	中村風船乗り	
	※	※	Alpha cubic	アパレル会社のプティック、オフィス (M.A.)
	※	※	キャンデー水耕	
	※	※	JACRA伊豆工場	
	※	※	鳥の立花	
	※	※	CAF LATIN TOKUYAMA	
	※	※	La Maijoin Latine a TOKUYAMA	
	※	※	川添邸	
	※	※	ボーリング場	
	※	※	日本橋羅罎	
	※	※	宮口邸	
	※	※	〔プール〕	
	※	※	網膜空気構造水泳場計画	
	※	※	M氏邸	
	※	※	Mさんの住まい	
	※	※	FRP Sandwich Domes Shaped on the Shallowest Possible Pneumatic Forms	
	※	※	PNEU POLI-CLIMATES	

	※	※	永田 (鐵佐) 邸 †2	(M.A.)
--	---	---	--------------	--------

	※	※	半田 †3	半田富久氏の揺れる石の彫刻の技術的な相談に乗ったもの (M.A.)
--	---	---	-------	-----------------------------------

†1 S40は昭和40年を示す。なお、図面に記載されていた年を記しているため、既存研究と齟齬がある。

†2 収蔵資料ではないが、村田あが氏の指摘によりプロジェクト一覧に追記した。

†3 プロジェクトではないが、図面に準じるものが収蔵されているため加えている。

# 岸田日出刀の1964年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告

[資料紹介]

飛田ちづる\*

## Report of diary by KISIDA Hideto to visit for Tokyo Olympics in 1964 as chairperson of Olympic facility

Tobita Chizuru

This diary was written from 25<sup>th</sup> August to 19<sup>th</sup> November in 1960 by KISIDA Hideto. He visited several countries as chairperson of Tokyo Olympic facilities committee. His text is not official but private, therefore it shows directly his sights and ideas for architecture with his era. NAMA has three diaries and this is last one. After all three are published, it may be bespoken a part of his activities.

キーワード：岸田日出刀、東京オリンピック大会、1964年、視察

### 1. はじめに

本報告は、国立近現代建築資料館収蔵資料である岸田日出刀資料に含まれる岸田日出刀の日記帳の調査報告である。1960(昭和35)年に同氏は東京オリンピック施設特別委員長として欧州と米国に渡航し、その際につづられた。なお、1959(昭和34)年に東京大学を定年退官し、1966(昭和41)に没する間の渡航となる。

日記帳からは、オリンピック施設に加え、パルテノン神殿、各地の都市の様子、ホテルの評価から建築家としての視点のみならず、約60年前の日本人の欧州および米国渡航の様子、現地の状況をうかがい知れる。岸田氏にとって少なくとも生涯3度目の渡航であり、過去の訪問時との比較、戦争による傷跡を記録する一方で、切望した場所に足を踏み入れた感動なども率直に書かれている。

なお、文中の日記帳の翻刻は抜書である。

### 2. 全体行程と概要

全体の行程は表1のとおりである。1960(昭和35)年8月25日に羽田を出発し、10月19日に同空港に到着、帰国している。旅行会社から渡されたと思われる地図も日記帳に挟み込まれており、これに加え搭乗券の半券、宿泊先の領収書、宿泊予定のホテルの住所、日記帳に記されている都市名、駅や建物の名前から行程表を作成した(表1)。全体を通してみると日付は飛んでいる箇所もあるため、その間の行動や滞在先は推測となるものの、約50日間の旅程でほとんどの期間は日記帳に記されている。

主な内容は、各国のオリンピック施設の現状と建築計画の視点、第二次世界大戦の際に爆撃を受けて変化した町の様子、前回訪れた際の印象と今回の印象の比較、戦後復興、東西ドイツ、米国の印象、建築家としての想い、趣味のゴルフなど業務の他、私的関心も書かれ多岐に亘る。また、業務としての渡航であるため、各地での面会者、日本人との交流も少なくない。国立近現代建築資料館収蔵資料において岸田の設計図面は多くなく、岸田の業績として丹下健三を多数の業務に推薦したとされているが、そうした資料でもない。しかし、公務における日記帳を追うことで、そこに至るまでの経験、思想を見出せると考えられる。なお、本報告は、三冊収蔵されている日記帳のうち最後のものであり、私的な文書としても後期にあたる。

### 3. オリンピック施設視察

1964(昭和39)年に開催された東京オリンピックのための施設を検討するため各地の施設について述べている。フィンランド、イタリア、ドイツ、スウェーデンなどが挙げられる。施設に加えて周辺環境への配慮、競技によって、日本は新設する必要があるもの、新設の必要はないものが書かれている。

例えば、競艇施設については、日本にはないため新設する必要があると記載されている。

以下、一部を引用する。

八月二十八日(土) [……] 議事堂一九三一年シレーン教授作、モダン風のフィンランド伝統式の議場等

\*国立近現代建築資料館研究補佐員、博士(世界遺産学)

せまし、すべてに小規模。オリンピック競技場。塔上に昇っただけ。〔……〕デザインとしてのスケール小さく強さもあまりなし。住宅街と近いが、街がよくまとまっているから、スポーツ的な雰囲気醸成にはこと欠かない。これが大切。さて東京は？。

八月三十一日(水)七時朝食。直ぐタキシーでオリンピック競技場へ。施設そのものは大したことないが、スポーツ的環境の整備は実に申し分なし。東京大会の諸施設もこの点で大いに反省の要あり。

九月一日(木)○西伯林見物〔……〕○国立競技場、オリンピック・スタジアムへ。二十四年前に足しげく通った当時と殆ど変わらない。外部の石がすこし黒くなった位の差か？こゝとローマのオリンピック競技場設備を比較すること、おもしろし。

〔九月〕六日(火)〔……〕○西停車場前のカフェ(宿のすじ斜め向い)短い昼食、タキシーで→競技場、運転手親切、中も見。ソ連とフットボール競技あったとか一面の新□(聞か)紙。九万五千人収容とか。堂々の競技場、デザインもよく、周囲に十分の空地、緑地、何とも羨まし。北沢氏ウイーンの競技場をとのことだったが正にその通り。

九月七日(水)〔……〕→ヴェニス寄港、然し空港はヴェニスより離れているらしく一面の平野。○ローマ着(ヴェニスから一時間あまり)。岡部・土肥二君出迎え、まもなく中山夫妻もドイツより飛来、いつしよの車で宿へ。途中、ローマのあれこれ古い建物が車窓から指呼出来。「遂にローマ」への感特に深し、宿、クレ射撃競技場近くのエルミタージュ、村や主競技場にも案外近いところ。○主競技場、マルミ競技場、水泳競技場等一通り見る。

〔九月〕八日(木)○自転車競技場(EUR)オリンピック村、日本選手宿舎、鯉のぼり立つ、ピロティ付二階建デザインは兎に角ピロティ造りはよし、特に日本などには適した形式、下で雨の時など選手達みな仲よくテレビを見雑談、芝生もまあ、従業員宿舎の大きな棟からちよつと商店街といった形、なかなか、よし。

〔九月〕十二日(月)〔……〕ナポリの港と街は想像以上に大きく立派、サッカー競技場(陸上も勿論可)十万以上を容れ、迫力あるデザイン。ローマのものより数等上。レストラン・マリノで中食。(魚料理で名あるところとか)海に近い繁華街。ヨット・ハーバー。前々からあるヨット倶楽部の港を使う。日本では新しく造らねばならず、なか、大へん。これも歴史と伝統。〔……〕

〔以下、米国〕十月十五日(土)○昨夜中、風雨あつたようなれど、上天気すばらし、七時半起床、十時半に空港に出かけるまでちよつと時間あり、林田さんの親切な誘いでオリンピック・スタジアムへ、名刺を出して特別に中に入れて貰らい、写真。(十万人は十分に入りそう。神宮国立競技場はさて如何か。)

#### 4. 米国訪問

10月4日から米国に入り、ニューヨーク、ワシントン、シカゴ、サンフランシスコ、(ロスアンゼルス)を訪問している。東海岸と西海岸にわたり主要都市を訪問したことがわかる。その中に、日本庭園の訪問と違和感、ゴルフ場への関心、超高層ビル(スカイスクレーパー)からの眺望も記載されている。日本で初めて超高層ビルが建設されたのは1968(昭和43)年の霞が関ビルディングとされており、当時米国を訪れた岸田の目には世界最高峰の高層建築物として威容を誇ったと思われる。

十月七日(金)○すばらしい上天気。七時に起きて、九時四十五分のマンハッタン巡りにサークル・ライン・サイトシーイングに。定刻乗船(四十三丁目、west end 83)。客も相当。ハドソンをくだり自由の女神像→ダウタウン→摩天楼の壮観→国連本部会館→ぐるつと廻ってハドソンに、ジョージ・ワシントン・メモリアル橋の下を乗船所へ。ニューヨーク全貌をみるとは実によいルート。スカイスクレーパー群のすばらしき!!○一時半一度宿に帰り、あらためて散歩、エンパイアステート・ビルへ。八十階の展望台で、天気よい故、その壮観たとえようなし。○二階まで昇れるが待ち人多く割愛して四十三丁目駅へ、〔……〕

十月十一日(火)〔……〕○新築のブルデンシャル・ビルの屋上へ、50C/1人、四十階までエレヴェータ、四十一階へエスカレーター、エンパイアステートビルの壮観に比すべくもないが、それでもシカゴの高大さを知るにはよし、歩みかつ休みつゝ、ループを散歩、五時半帰宿〔……〕

帰国直前にハワイ州のホノルルを訪問して、その様子や住宅地における感想が記され、北米大陸と異なる雰囲気がよく伝わる。

以下、引用する。

十月十八日(火)○ワイキキ濱へ。ホテルが沢山あり海特にきれい。丁度運よく、フラダンス公演中スナップ数枚、紺碧の海、丁々の椰子樹、□の芝生、その上

でのフラダンス、青い空、これがホントのハワイ。感強し。○ダイヤモンド・ヘッドを廻り、海岸沿いの高級住宅地へ。ホントに極楽らしい感じ。こんなところに住むとノンキになり、ボケになるおそれありか。新しい住宅地に家建ち続く、平屋、日本調!!、日本に建つ家よりずっと落ちついて雅味ある日本調、これ見よがしの新しい日本の住宅建築にないよさあり、これ見よ!!は何でもこまる○ハナウマ湾、ちょっと珍しい入江、これより海岸沿いのすばらしいカラニアオレの駅道→スーアヌ・パリー峠、風の名所、今日は幸か不幸かあまり風なく眺めよし、峠を下りオアフゴルフ倶楽部、会員組織でハウスでの昼食は出来ず、国民墓地に上り、ホノルル、全市を俯瞰、→カピナオリ街のおもしろいレストランで昼食、ビールなか、おい

## 5. パルテノン神殿など他の建造物

日記帳の記述およびはさまれている資料から、各地で都市内の名所をめぐっていたことがわかる。City tourと記載されたパンフレットおよび地図は丁寧に貼り付けられ、また町の様子のわかるチラシも残る。

[九月]三日(土) [……]夜の照明の美しさは東京の方がずっと上、街路照明はなか、よし、特に感心させられるのは夜の街の蛍光灯の色。白熱燈に出来るだけ近い色になってるのは吾が意をえたり。日本の照明家はもつと、夜の光についてよい感覚をもつてほしい。明るいだけが照明の能ではなし。すべてのものを美しく見せるのがホントの夜の照明とするべし。

パルテノン神殿訪問時の記述は、切望していたことがよくわかり、一日滞在した翌日も早朝から訪問している。

[九月]十五日(木) [……]十時タクシーでアロポリスへ。車に乗る前に小供の乞食金をねだってうるさし。こんな光景は東京大阪にはない。よほど貧富の差が甚だしいところらしい。○初めて見るアロポリスの丘の上の壮観、建築家四十年の夢が実現し感激特に大、宿変への為め正午引上げ、新しいプラカ・ホテルで昼食。徒歩でアロポリスへ。午後、日没近くまでアロポリスで過ごす。カラー一本(20)プラスX(白黒)四本(36)周囲は明日のことにする。[……]

[九月]十六日(金)七時起床、朝食前に徒歩、宿よりアロポリスを一とめぐり、途中(風の塔「リンクテラスの記念碑」)を見る。何れもアロポリスを背景

としてスナップ)。オリンペイオンの大列柱を配してアロポリスをいろ、誰のスナップにあるものらしいが、それだけすばらしい眺め。建築家らしい青年一人自分と同じようにスナップして廻っていた。[……]アロポリスの東南方に立つちよつとした丘に上ぼり、アロポリス遠景のすばらしい写真、パノラマ等よく撮ってればよいが。物売りうるさし、熊本君の話によるとエハガキ等は宿-街の店-現場物売の順で安価とか、ちよつと逆のようなれど土地の事情に詳しい人の言、そうなのだろう。車でマラトンの古跡へ、紺碧の湖一面のオリーブ樹。

## 6. 旅における生活と出来事

### 6.1. ホテルの評価や買い物など

同伴した勝子夫人がアクセサリーを紛失した際、翌日の室内掃除担当者がアクセサリーを見つけて、寝台脇の台においていたことを非常に喜ぶなど、身の回りの印象的な出来事も書かれている。また日本語話者の勤務するホテルが過ごしやすいこと、道を教えてくれた人物、ホテル付近の店の感想、フランスおよび英国で百貨店を訪ねたこともつづられている。

また、土産物についても度々触れている。時計やゴルフクラブ、スカーフなどに加え、特に印象的なものはレヴロンの爪切りである。米国のワシントンで初めて購入し、その後の訪問都市でも購入を試みている。当時の米国では既に一般的だったのか、どこでも買えるといわれている。日本の爪きりの歴史を調べる必要はあるものの、1960年代(昭和30年代)の日本の爪きりより機能的だったと想像する。なお、同じ会社である保証はないがレヴロンという会社は現在も存在し、化粧品関連用具を販売している。

### 6.2. 国境越え

旧ソ連領であった場所に行き先を間違えた列車に乗ったため足を踏み入れた。

[九月]二日(金)今日は全然自由。子供のように近く動物園へ。近くのシュタト・バーンでワンゼーへ。二度遊んだ伯林だが、まだこ、へは一度もいったことなし。ウエストクロイツでちよつとまごつき、更にベルリン・ワンゼーですつと降りればよいものを、ベルリンの前おきが変と思ひそのま、乗って行ってポツダムへと思ったのが誤りのもと、ギーブニツゼー駅でソ連兵から旅券の提示を求められ、査証ないので降ろされ、ホームの汚い小屋へ。パスポー

トも持っていかれどうなることかと心配していたら十分ぐらいであっさりかえてくれた。職業名明記してあるのでまちがいだったことがすぐわかったのだろう。

イタリアでは悪天候により列車の運行に乱れが生じ、フィレンツェに思いがけず宿泊することとなる。自動車による移動の疲労やたまたま同席した米国人夫妻の親切さ、人ごみに空襲を想起するなど、岸田に残る戦争の記憶も窺い知れる。

[九月]十九日(月) [……] それからが大変、汽車大混乱、ローマ近くの大雷雨で大出水。線路洗われて不通、応急修理で大遅延の列車客フィレンツェに殺到、○一行ボロニアまで乗換へ、一等車も身動きとれぬ惨めさ、ヒコーキのアメリカの二組の夫婦と同一行動、一人親切に世話してくれる。嬉し。丁度空襲時の列車行を想い出す。身の危険のないのありがたいが、今晚中にヴェニスへ着けるかどうか、又明日飛行機にのれるかどうか、明日中にローマへ帰れるかどうか心配になる。然し気をもんだら切りがないとあきらめれば案外落ち着く。言葉の通じないところでこのような混乱はホントに精神的に参ってしまう。

空港の雰囲気、入国審査、税関については国ごと、空港ごとに書いている。イタリアについてはシーザーの子孫とは思えないお国柄であるとの評であり、英国においては定刻どおりに出発する飛行機、税関の厳しさ、米国においては同じ英語圏であっても雰囲気の違いについて述べている。

### 6.3. 美術館訪問、食事、面会者など

各地で美術館を訪れ、食事についても記載されている。ただし、食事については食べた場所と料理を記述しているのみで、さほど行数は割かれていない。特に印象的なものについては多少具体的に書かれているが、大抵はホテルの中の食堂や、付近の喫茶店、コーヒーショップと書かれている。会食の場合は値段および会食した人物とともに記載されているが、食事の内容は、主菜以外はほぼ触れられていない。日本料理やカレーライスについては、食べることになった経緯から述べているが、やはり記述は少ない。

## 7. まとめ

全体を通じて施設や歴史的建造物、観光名所、面会

者、町や空港、ホテルの質と雰囲気について記載している。反面、食事や交通手段については仔細に述べていない。渡航の目的は東京オリンピック開催のための施設視察であるから、当然ではあるが、当時日本円と各国の通貨のレートを考えると、食事にどの程度の費用を当てられたのか興味のあるところである。

岸田日出刀資料の中には、本報告で取り上げた日記帳のほかに大正時代の洋行、および1951(昭和26)年ごろの旅行の日記帳が存在するため、これらを調査することで、三冊目の日記帳の位置づけがより明確になると思われる。

### 謝辞

翻刻にあたっては田良島哲氏の指導を受けたことを記し感謝申し上げます。

(2021年5月11日原稿受理)

表 1 旅程概要

日程	移動手段	発地	着地	泊地	訪問先	食事	備考
8月25日	航空機	東京(羽田) 日本ケラフヴィク(アイスランド) 経由ハンブルグ(ドイツ)着			エルベ湖畔		
8月26日(金)		ハンブルグ→ロンドン(英国)経由	ストックホルム(スウェーデン)				
8月27日							記載なし
8月28日(土)		ヘルシンキ	フィンランド	ハンブルグ	フィンランド議事堂、オリンピック競技場(木の板張り住宅街と近い。スポーツ的な雰囲気(醸成には大切。)、北部住宅街、アレキサンダー二世、ロシアの像のある寺院	昼 中央停車場二階のレストラン チキンサンド	ホテル前のベンチで町行く人を漠然と眺める。
8月29日							記載なし
8月30日(火)			ストックホルム	ストックホルム	オールド・シティ、議事堂、市街、ジートルング、病院、市庁舎	昼 街の菓子店でホテルのレストラン	
8月31日(水)	航空機	①ヘルシンキ(フィンランド) ②ストックホルム→コペンハーゲン経由	①ストックホルム ②ハンブルグ	ハンブルグ(ベルリン・ヒルトン)	クルフェルステンダム繁華街	朝 夕 近くのレストラン	
9月1日(木)				ハンブルグ	ブランデンブルグ門、巴里広場、ウンター・デン・リンデン街、中央寺院、王宮、マルクス・エンゲルス広場、ソ連無名戦士の墓所 ○西ベルリン見物 国会議事堂、ハンザフィアテル、議会堂、シャーロットンブルグ宅、国立競技場、オリンピック・スタゲオン、フンクツルム、ドイツチュランド・ハルレ、グリューネワルト、ダーレムの米軍附属諸施設	朝 部屋で朝食 夕 キンドル	
9月2日(金)				ハンブルグ	動物園、ワンゼー	朝 ホテルの食堂 夕 ホテルの食堂	ソ連占領区へ間違えて行く。
9月3日(土)	航空機			ミュンヘン(ドイツケアー・カイザー)	ハンブルグ(ティアガルテン、ゲークスゾイン、ステアガルテン) 移動 南ドイツの村落を見る ミュンヘン(街歩き、街路照明についてのコメント)	朝 ゆっくり食事 夕 ノイエスゼーのレストランで喫茶 夕 十五階のレストランで食事	
9月4日(日)		ハンブルグ	ミュンヘン	ミュンヘン	カールス・プラッツ、カロリネ・プラツ、オペリスク、ケーニヒスプラッツ、アルテ・ピナコテック、独逸博物館		
9月5日(月)		ミュンヘン	ウィーン	ミュンヘン	ブルガールテン、リングシュトラッセ、国立オペラ劇場、歴史博物館、国会議事堂	夕 近くのレストラン	
9月6日(火)				ミュンヘン	ハプスブルグ王室の地下墓所、シエンブルン宮午後 競技場(95,000人収容、ドナウ川近く)→ポティーヴ・キル	昼 西停車場前のカフェ 夕 前のレストラン	
9月7日(水)	航空機	ミュンヘン→ヴェニス経由	ローマ		クレー射撃場、エルミターージュ、主競技場、マルミ競技場、水泳競技場	朝 近くでコーヒーと菓子、バナナ 夕 ブドー樹美しい庭で会食	
9月8日(木)					自転車競技場(EUR)、オリンピック村	夕 日本大使館	
9月9日(金)					馬競技場、クロスカントリー、ボートレースコース	夕 天津飯店(支那料理)	
9月10日(土)					バンテオン、聖ピエトロ大寺、コロシェウム、バジリカ・メンサンチオ、凱旋門、フォロ・ロマーノ、カラカラ浴場		
9月11日(日)					芸術展示場、閉会式		「東京大会ではセレモニーの演出に十二分の効果を出すようにするがよし」
9月12日(月)	バス	①ローマ→ナポリ ②ボンベイ→ナポリ	①ボンベイ ②ローマ		移動中 テラッチナナポリ 港、サッカー競技場、ヨットハーバー、ナポリのスラム街 ボンベイ 古跡	昼 レストラン・マリノ(ナポリ)	
9月13日(火)					トレヴィの噴水、エマヌエル二世教会堂、フォロ・ロマーノ	夕 ドイツ料理(中山夫妻)	
9月14日(水)	航空機		アテネ	アテネ(ナショナルホテル)		夕 黒田大使からの招待と思われる。	
9月15日(木)				アテネ	アクロポリス	昼 プラカ・ホテル	
9月16日(金)				アテネ	アクロポリス、風の塔	夕 大使邸	
9月17日(土)	航空機	アテネ	ローマ			夕 天津飯店	
9月18日(日)	航空機	ローマ	フィレンツェ	フィレンツェ(ホテル・アストリア)	ドーム、レニョール廣場、ボンテ・ヴェッキヨ		ローマ近くの雨と雷で列車の時刻が乱れて遅延
9月19日			ヴェニス	ヴェニス	聖マルコ廣場、ヴェニス(ドカレ宮殿、コロネード)		19日と記載はされていないが内容から19日分の行動と判断した。
9月20日(火)	鉄道	ヴェニス	ローマ	ローマ			

日程	移動手段	発地	着地	泊地	訪問先	食事	備考
9月21日(水)	航空機	ローマ	チューリッヒ	チューリッヒ(グランドホテル)		朝 ホテル	
9月22日		チューリッヒ	ジュネーヴ	ジュネーヴ(ホテルアリアナ)			日付の記載がないものの、内容から22日に該当すると思われるものを記載している。
9月23日(金)				ジュネーヴ	国際連盟会館、ローヌ河	朝 宿で公園のレストラン(中山夫妻) 昼 パリジエンヌ	カメオのイアリングが手元台に乗せてあった。
9月24日(土)	航空機	ジュネーヴ	パリ	パリ	マドレーヌ寺院前、オペラ座?	夕 大衆食堂	
9月25日(日)			パリ	パリ	ヴェルサイユ街、シャンゼリゼー、エトアール凱旋門		
9月26日(月)			パリ	パリ	コンコード広場、チュイルリー公園、ルーヴル宮、美術館、博物館、ノートルダム寺院	夕 ブルニエ(魚料理)	
9月27日(火)			パリ	パリ	ルクサンブル公園、ノートルダム寺院、ホテル・デ・ヴィーユ、オペラ前キャプシーヌ通り、マドレーヌ寺院、Aux Trois Quartiers(デパート)		
9月28日(水)			パリ	パリ	ボン・マルシエ百貨店、マドリラス百貨店ヴェルサイユ	昼 角の店でお茶とサンドイッチ	
9月29日(木)	航空機	パリ	アムステルダム	アムステルダム	ボート見物、アムステルダムの港		
9月30日(金)	航空機	アムステルダム	クロイドン空港(ロンドン)	ロンドン	オリンピック・スタジアム、リクスムゼウム(レンブラントの夜警)	昼 博物館内 夕 スキヤキ	
10月1日(土)				ロンドン	バッキンガム宮殿、キングスロード、リリー・ホワイト、ミュージカル鑑賞、ハー・マヒエスター	昼 カレーライス 夕 一等書記官夫妻、明子君	
10月2日(月)				ロンドン	オクスフォード・ストリート、トラファルガル広場、議事堂、ウエストミンスター橋、アペー、ウィンザー城、城付近のゴルフ、サッカー、フットボールの競技場	夕 日本人宅	
10月3日(月)				ロンドン	セント・ポール寺院、ロンドン塔、タワーブリッジ、タッソー夫人の蠟人形、ハロツドの店	夕 近くのレストラン	
10月4日(火)	航空機	ロンドン	ニューヨーク	ニューヨーク(ビルチモア・ホテル)	四十三丁目マチソンAv.		大使館の車で空港へ。
10月5日(水)				ニューヨーク	勤業銀行、ブロードウエー、ギムベル百貨店	夕 日本料理齋藤	
10月6日(木)				ニューヨーク	ニューヨーク タイムス・スクエア		
10月7日(金)				ニューヨーク	ハドソン、自由の女神像、ダウンタウン、摩天楼、国連本部会館、ハドソン、ジョージ・ワシントン・メモリアル橋、エンハイアステートビル、四十三丁目駅	宿の前のレストラン(昼もしくは夕)	レヴロンの爪切り
10月8日(土)		ニューヨーク	ワシントン	ワシントン	アーリントン墓地、リンカーン記念堂		
10月9日(日)				ワシントン	首都、議場、ワシントン記念塔、ボトマック公園ゴルフ場、ボトマック河、ジェファーソン記念堂、ジョージワシントン大学、ナショナル・ギャラリー国立美術館	朝 ホテル 夕 すきやき	
10月10日(月)	航空機	ワシントン	シカゴ	シカゴ			
10月11日(火)				シカゴ	No.2ループ、北部湖畔 ミース・ヴァン・デル・ローエの高層アパートメントハウス、シカゴトリビュン、ブルデンジャナル・ビル屋上	朝 ホテル 昼 スナック	
10月12日(水)	航空機	シカゴ	ロスアンゼルス	ロスアンゼルス	バーマー・ハウス、オハラ・フィールド、グランド・キャニオン		
10月13日(木)				ロスアンゼルス	林田さんの勤務するドラッグ・ストア、ディズニースタンド	昼 寿司 夕 すきやき	
10月14日(金)				ロスアンゼルス			記載なし
10月15日(土)	航空機	ロスアンゼルス	サンフランシスコ	サンフランシスコ	ロスアンゼルス オリンピック・スタジアム サンフランシスコ ポスト街、ロケット街	夕 チャイナ・タウンにて	
10月16日(日)	航空機	サンフランシスコ	ホノルル	ホノルル(アレキサンダーホテル)	サンフランシスコ 市中心近くのラチオステーションのある山上、ゴルフゲート公園、湖岸、ゴールデンゲート橋	朝 ホテル近くのレストラン	
10月17日(月)				ホノルル	ポスト・オフィス・ビル、生長の家ワイ支部、キングスst.を宮殿近くまで。アラモニア・センター	朝 ホテルのコーヒーショップ	
10月18日(土)				ホノルル	アラ・モア・センター、ワイキキ演、フラダンス公演、ダイヤモンド・ヘッド、住宅地、ハナウマ湾、カラニアナオレの駅、スーアヌ・バリー峠、風の名所、オアフゴルフ倶楽部、国民墓地	昼 カピナオリ街のレストラン 夕 日本食(ヒーコク通りのレストラン)	
10月19日	航空機	ホノルル、バリ経由	東京(羽田)				

[プロジェクト]

## 収藏品展の意図とプロセス

令和2年度収藏品展『ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡』より

遠藤康一\*, 木下紗耶子\*\*, 川向正人\*\*\*

### Purpose and Process of the Collection Show Case:

Year's Collection Show Case, "Museums by Japanese Architects 1940s–1980s: Origins and Trajectories"

Endo Koichi, Kinoshita Sayako, Kawamukai Masato

This paper is a report on the Year's Collection Show Case, "Museums by Japanese Architects 1940s–1980s: Origins and Trajectories" held at the National Archives of Modern Architecture, Agency of Cultural Affairs (Date: October 1st to November 15th, 2020). The purpose of this report is to document the process and outline of the exhibition planning. At the same time, through this exhibition, we will consider the possibility of disclosing the collection materials in the Architectural Archives.

キーワード：建築アーカイブズ、収藏品展、展示企画：Architectural Archives, Collection Show Case, Curation

### 1. はじめに

本稿は、文化庁国立近現代建築資料館で開催された『令和2年度収藏品展 ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡』（会期：令和2〔2020〕年10月1日～11月15日）における、展示企画におけるプロセス及び企画の概要に関する報告を行うことを目的としている。また同時に、本展を通じて、建築アーカイブズにおける収藏品資料の公開のあり方に関してその可能性を考察するものである。

### 2. 令和2年度収藏品展の企画

#### 2.1. 企画初期段階：コロナ禍の影響と収藏品展企画

令和2年4月、国内における新型コロナウイルスの急速なまん延により、日本政府が緊急事態宣言を発出したことを受けて、多くの美術館・博物館が休館を余儀なくされた。国立近現代建築資料館（以下、資料館）においても、当初7月からの開催を予定し準備が進んでいた企画展示<sup>1</sup>について、令和3年度に延期する判断が下された。同時に、不透明な事態の先行きを睨みつつ、替わって新たな年度前半の企画展示<sup>2</sup>として、収藏品資料による展覧会企画（以下、収藏品展）が秋口に行われることとなった。

本収藏品展企画は、上述の通り、当初予定された企画展示が延期されたことによる代替企画である。他方、資料館では年々増加する収藏品資料の公開・活用が運営上の課題となっており<sup>3</sup>、常設展示スペース設置の可能性と

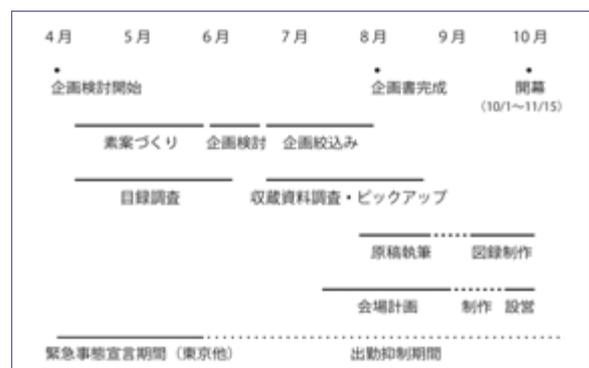


図1 収藏品展タイムテーブル

共に、収藏品資料を用いた定期的な展示企画の可能性が検討されつつあるタイミングと時を同じくして進行する性格のものでもあった。新規収藏品資料の紹介を中心とするものか、或いは、何らかのテーマに即してこれまでに収集された資料の中に関連性を見出すものとなるのか、企画の開始時点ではその方針も白紙であったことから、資料館における資料公開に関する基本的なアイデアを模索する試行的な役割が期待されていたと考えられる。

企画開始時においては、まず資料館スタッフ<sup>4</sup>により企画素案づくりが行われた。この素案づくりの目的は、上述のアイデア模索と並行して、全収藏品資料目録を概観し、各資料群の構成（作品名、用途、年代、資料の種別）、デジタルデータの有無や収藏品状況といった資料へのアクセシビリティを共有することから、企画のテーマ設定

\*元国立近現代建築資料館研究補佐員、宇都宮大学地域デザイン科学部建築都市デザイン学科講師、博士（工学）

\*\*国立近現代建築資料館研究補佐員、修士（学術） \*\*\*元国立近現代建築資料館主任建築資料調査官、東京理科大学名誉教授、工学博士

の可能性と限られた期間での企画遂行の可能性を確認することになった。

素案づくりは緊急事態宣言下の出勤抑制が開始した令和2年4月から約2か月間行われ、以下の7案が立案された<sup>5</sup>。

#### 2020 収藏品展等に向けた企画素案

1. 試行錯誤の住宅～近現代住宅資料にみる建築家の多面的な試み
2. 建築アーカイブズ～はじめまして編
3. つなぐ建築 ―それでも作るとすれば、何ができるか―
4. 「ここまで描くか!」ヒューマンスケールの描き込み
5. 広場／パブリックスペースのデザイン展
6. 建築文化と地域性
7. オンラインコンテンツの企画

この作業の結果、1970年頃までの近現代住宅における実験・思索的な試みに関するもの(1)、建築アーカイブズの対象となる資料の分類から建築資料とは何かを問うもの(2)、日常的な機能を越えた建築のあり方を探るもの(3)、建築のドローイングの詳細な描写に着目するもの(4)、日本の建築空間における広場に関するもの(5)、建築表現と地域に関するもの(6)、資料公開の目的と手法を位置づけようとするもの(7)という、本収藏品展に限らず、今後検討すべき課題を含む広範なテーマの可能性と問題意識を館内で共有することとなった。これらのうち、近現代住宅を対象を絞って企画検討が継続されたが、対象資料をリストアップする中で、資料公開に際しての個人情報取扱いに関してクリアにすべき諸処の課題克服に要する作業を短期間で行うことは困難であるということが判明したため、実行可能なテーマを求めて企画検討が続けられた。

#### 2.2. 企画内容の絞り込み段階：社会の状況との関わりの中で建築／建築アーカイブズの役割、意義を捉え直す

継続された検討においては、現在の社会状況における資料館の展示機能のあり方に焦点を当て、収蔵される資料群ごとに建築作品や年代、ビルディングタイプを対照することで企画の絞り込みが行われた。具体的には、新型コロナウイルスの影響により人々の活動に制約があるなか、展覧会に何を求めることができるかという問いを立て、それに対してミュージアム建築というビルディングタイプに着目した企画テーマの検討であった。

近年、メディアと美術館の共催により観客動員数を争う大型の展覧会が話題を呼んできた。入場を待つ人が長蛇の列をなし、展示物の前では折り重なるように

群がる人々の頭越しに鑑賞するというこのタイプの展覧会の状況に対して、他方、その場所の経験や人々の活動を重視したものや、ミュージアムのコレクションを見つめ直す動きも見られている。そこで、新型コロナウイルスによる制約下にあって、改めてミュージアムのあり方を考える、それを建築作品・資料から読み解くというテーマ設定の可能性について検討が行われた。

一方、資料館における建築資料の収集方針<sup>6</sup>は、体系化や網羅性を目的としたものでは無いことから、収蔵するミュージアム建築の資料も、建築家、時代において偏りが生じることが想定された。そこで全資料目録から該当するミュージアム建築<sup>7</sup>をリストアップした結果、1940年代～1980年代にかけて存在する図面やスケッチ等の資料から、それぞれ年代毎に特定の建築家による思考の痕跡、社会状況との関わりや技術的な側面について読み取りを進めることが可能であるとの結論が得られた。また同時に、資料間の関連性を軸とした批評的な性格を本収藏品展に求めていくという目標が定められた。

企画の実現性とストーリーの検討を行う目的で、現物の資料の確認と発表された建築家のテキストを往復する作業が8月上旬まで続けられ、企画書が完成した。それと共に10月1日の開幕に向けて、会場計画、図録、展示解説文、オーラルヒストリーの収録といった本格的な作業が急ピッチで進められた。

### 3. 展示ストーリー

#### 3.1. 展示の主旨

本展の展示主旨を下に示す。外出自粛により、社会が押し込められたような雰囲気覆われるなか、人々が公園を散策するように自由に歩きながら鑑賞する、ミュージアムに本来的に求められてきた性質に立ち返り、その空間のあり方を探求することを意図したテーマが設定された。

近代建築運動の影響を強く受けた1940年代～1950年代を皮切りに1980年代までの収蔵されるミュージアム建築を、時代・社会の変化との関係を重ね合わせて見ていく。時代毎に展開する主題への取組みと、その根底にあるアイデアの関係から、4つの時代の切り分けが導かれる。さらに、スケッチ、変更が重ねられる設計図、実施設計、詳細図、家具図といった資料館に収蔵される建築資料から、着想時のイメージから実現に至る建築家の検討内容を具体的に読み取ることができる。

こうして得られた日本の近現代建築資料にみるミュージアム建築の諸相の一端を、「始原」からの「軌跡」と位置づけ、展示のストーリーが構成された。

新型コロナウイルス感染拡大防止の対策を講じつつ、令和2年度収蔵品展「ミュージアム 1940年代-1980年代：始原からの軌跡」を開催します。

ミュージアムは、ルネサンス期に、王侯貴族が蒐集した古代の彫像などを、庭園や歩廊（ギャラリー）に陳列し、それを歩きながら鑑賞して楽しんだところから、本格的に始まったと考えられています。その当初からミュージアムは、開放されて、公衆の芸術的感性を育む場として活用される傾向がありました。長くて、広さと高さもあり、おだやかに自然光が射す空間と、移動しながらの作品鑑賞。作品の保護を大前提としつつ、理想の距離・光・開放感・動線などが追求されてきたミュージアムが、今回のテーマです。

収蔵品展ですので、当館がすでに収蔵し、また収蔵の運びとなった図面・スケッチなどを用いての、日本人建築家の設計によって1940年代-1980年代に国内外で実現したミュージアムに関する展覧会となります。始原に立ちかえって、その本来のあり方を考える機会とするために、当展では、博物館・美術館・工芸館・歴史民俗資料館などを含み、広く展示空間を捉える概念として「ミュージアム」を用いています。

展示された図面やスケッチは、ミュージアム毎の、アイデアの具体化するなわち「始原からの軌跡」を視覚化するものでもあります。そこからは、理想のミュージアムの実現に向けて奮闘する建築家・建築構造家たちの熱い思いが伝わってきます。

この機会に、ぜひ当展に、また近隣のミュージアムに、足をお運びください。

(川向正人 主任建築資料調査官)

図2 展示主旨(チラシ)

### 3.2. 章構成

4つの時代の切り分けによる本展の章構成を示す。

#### 第1章

近代美術館の誕生 1940年代-1950年代日本における戦後のミュージアム建築は、20世紀初頭の近代建築運動を推進した代表的建築家であるル・コルビュジエ(1887-1965)の〈無限成長美術館〉をプロトタイプとして展開した。その実現例のひとつとなる「国立西洋美術館」(1959)、彼の弟子である坂倉準三による「神奈川県立近代美術館」(1951)、吉阪隆正による「ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館」(1956)から、自然の光を取り入れ、外部環境と共生する戦後日本の近代美術館の息吹を読み取ることができる。

#### 第2章 素材・技術からの課題の克服

1950年代後半-1960年代

日本各地でミュージアム建設が進む中、新たなミュージアムの空間性の模索と並行して、空間を形作る素材や技術の側面における方法論が探求された。鉄筋コンクリートの構造体が「倉」のような大空間の展示室を支える「島根県立博物館」(1959、菊竹清訓)には「スカイハウス」(1958)と共通する空間システムが見られる。高橋誠一らによる「佐賀県立博物館」(1970)では、

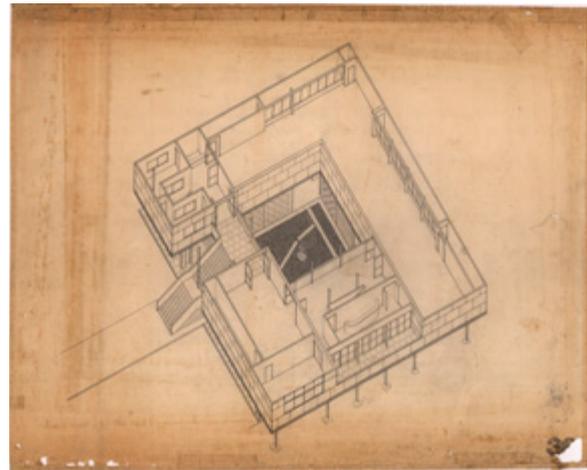


図3 神奈川県立近代美術館(1951, 坂倉準三)

#### 第1章展示作品リスト

- ・レオナルド・ダ・ヴィンチ展(1942, 坂倉準三)
- ・神奈川県立近代美術館(現・鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム, 1951, 坂倉準三)
- ・ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館(1956, 吉阪隆正)
- ・国立西洋美術館(1959, ル・コルビュジエ, 坂倉準三, 前川國男, 吉阪隆正)
- ・石橋文化センター・美術館(現・久留米市美術館, 1956, 菊竹清訓)

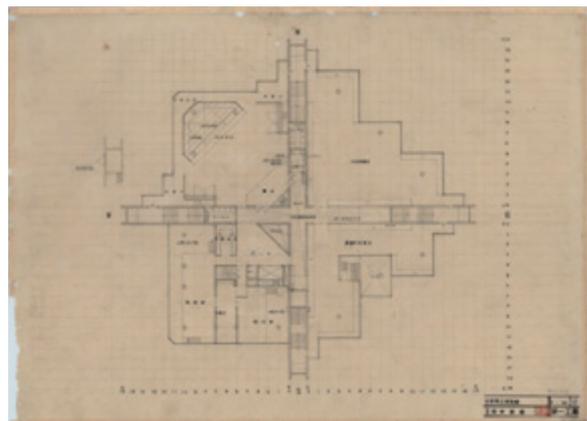


図4 佐賀県立博物館(1970, 高橋誠一/第一工房, 内田祥哉)

#### 第2章展示作品リスト

- ・島根県立博物館(現・島根県庁第三分庁舎, 1959, 菊竹清訓)
- ・富山美術館(計画家, 1961-1963, 菊竹清訓)
- ・佐賀県立博物館(1970, 高橋誠一/第一工房, 内田祥哉)
- ・佐賀県立博物館構造設計図(1970, 木村俊彦)
- ・EXPO'70 富士グループパビリオン(1970, 村田豊)
- ・日本万国博覧会電力館(1970, 坂倉準三)

構造家木村俊彦との協働によりプレキャスト・コンクリートのグリッドシステムが自由な平面の広がりを獲得する。科学と工学技術の発展とミュージアム建築の空間表現の重なりを捉えることができる。

#### 第3章 地域のミュージアムへ：

風土／伝統、大屋根 1970年代

1920年代に確立されたモダニズム建築のスタイルに、

大高正人は風土／伝統を造形・技術・素材において融合的に取り込む方法論を見出そうとした。「千葉県立美術館」(1974)、「群馬県立博物館」(1979)では、傾斜屋根の採用、素材の活用等を通じて、地域文化、ランドスケープとミュージアム建築の関わりへの試行過程が認められる。

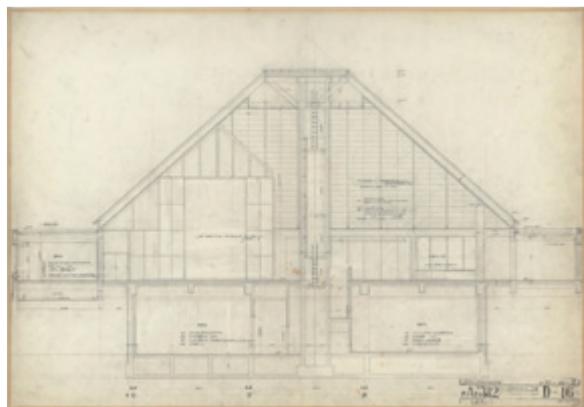


図5 群馬県立歴史博物館 (1979, 大高正人)

第3章展示作品リスト  
 ・千葉県立美術館 (1974, 大高正人)  
 ・群馬県立歴史博物館 (1979, 大高正人)

#### 第4章 個性的なミュージアムへ： 親自然、局所、世界、風景、1980年代

1980年代、建築家が空間創造の新たな根拠を求め中、原広司は、人間の意識に働きかける〈様相〉としての建築、経験としての建築を模索する。世界の集落調査から得た〈世界風景〉という像を求めて、ミュージアム建築を環境との連続のなかに位置づける空間的な試み

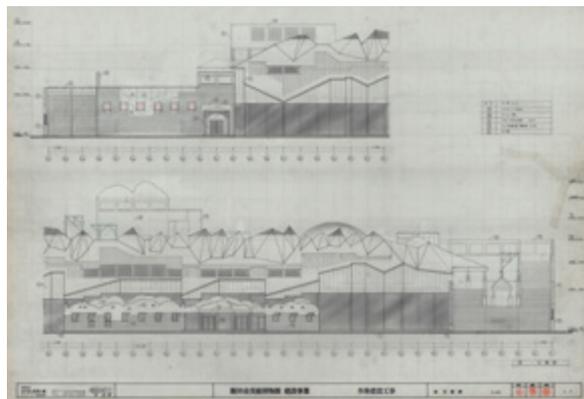


図6 飯田市美術博物館 (1989, 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所)

第4章展示作品リスト  
 ・末田美術館 (1981, 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所)  
 ・田崎美術館 (1986, 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所)  
 ・飯田市美術博物館 (1989, 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所)

と共に、山並み、雲、樹影等の風景の形象を造形に表していく。

## 4. 会場計画、オーラルヒストリー

### 4.1. 会場計画

会場計画は、コロナ禍にあってソーシャル・ディスタンスが求められていたことを考慮し、また個々の建築資料に鑑賞者が対峙する鑑賞空間とするために、展示点数を限定する方針で行われた。竣工時の空間構成を読み取ることができる基本図を中心に、設計過程を示すスケッチ、計画案、空間表現を支える詳細図等が抽出され、限られた図面から多様な読み取りが可能な構成となった。

### 4.2. オーラルヒストリー

資料館ではこれまで建築家や関係者へのインタビュー記録をとり「オーラルヒストリー」として展覧会などの機会に公開してきた。本展では、ミュージアム建築を多数手掛けてきた青木淳(1956-)と原広司(1936-)にインタビューを行い、展示会場とウェブサイトにて公開した。

両者にインタビューを依頼した理由は次のようなものであった。第一に、時代を画する特色あるミュージアム建築を設計していること。第二に両者の仕事および言葉を記録することが、現代ないし将来のミュージアム建築の在り方を考察するうえで重要な参照項になりうると考えたからであった。

青木が携わったミュージアム建築は渦博物館(1997)や青森県立美術館(2006)などが知られる。また京都市京セラ美術館の改修・リニューアルオープンに伴い、青木は2020年に館長に就任した。インタビューでは、建築家として、そしてコロナ禍の影響を受けながらの出発となった館長としての両面から話を聞くことができた。

インタビューにおいて、青木は、明治以降の日本のミュージアム施設の歴史を振り返り、一時的な見世物としての陳列ではなく、コレクションを核とした展示活動に立ち戻ることの重要性を指摘した。そのうえで、21世紀のミュージアムとして、モノを作り活動する現場としての在り方を提言し、「モノを作る猿」としての人間の始原的な姿に働きかけることが、ミュージアムの存在意義を確かなものにしていくとする。そのようなミュージアムは、完成した作品を見る場としての静的なものではなく、今日的な視点から継続的に働きかけることのできる現在進行形の場でもある。また、鑑賞体

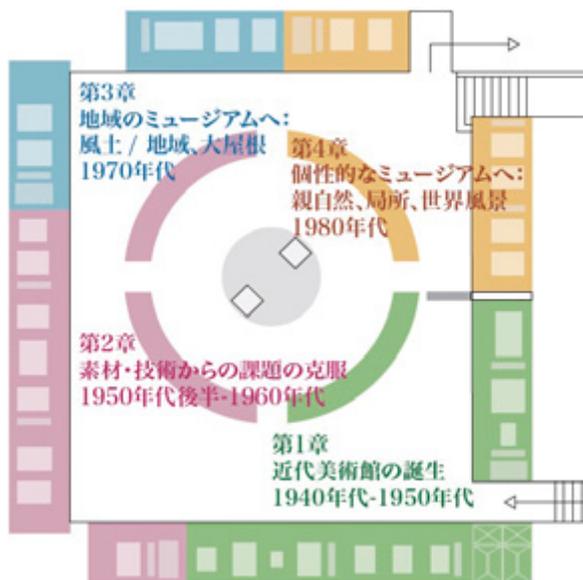


図7 会場構成



図8 会場風景

験でも決められた動線をなぞることとともに、歩く楽しみのなかに作品に出くわすという「散歩道を作る」ような鑑賞もまたミュージアムの魅力である。

作ること、そして散歩することの楽しみに開かれた青木の構想するミュージアムは、動員数だけを指標とするのではない、人々の多様な関わり方を受け止め、そして活性化するものである。建築を設計することと、建築

を人間が活動するための場ないし道具として活かしていくことを連続的に捉える視点性のなかから、新しいミュージアムの在り方が目指されている。

原は、末田美術館、田崎美術館、飯田市美術博物館の設計過程について、施主や技術的な協力者との協働や地形・気候・展示作品との関わりから、建築を構想し成立させていく過程を語った。これらのミュージアム建築は原の70年代の住宅建築群と90年代の大規模なプロジェクトとの、時期および規模の中間に位置しており〈様相〉の概念が組み立てられる時期と重なる。

末田美術館は住宅兼アトリエ、展示施設であり、集落調査や自邸の設計からの延長として設計された。田崎美術館では田崎廣助が描いた山の絵画を自然光の中で見せることを意図した。また、モダニズム建築が前提とする均質空間に対して、空間の現象全体を「様相」ととらえ、一期一会のものとして現れる建築を設計しようとした。飯田市美術博物館は、伊那谷から見る山の形やそこにかかる雲の形象を踏襲して設計された。原は同敷地内への柳田國男館の移築にも尽力し、日夏耿之介記念館を含めた展示施設は小道によって接続され、地域の歴史や芸術・自然科学を包括する一帯が作られた。

原は、ミュージアム建築を通じて、土地や収蔵品と密接に結び付きながら構想される建築の在り方を模索した。ミュージアムを訪れる経験は、展示室内のみで完結されず、建築の内外を歩き、その時間のなかで体験される気候や風景の様々な変化とともにある。自然現象と応答する建築においては、作品鑑賞の経験が何度でも刷新される可能性をも設計することが試みられている。

#### 4.3. 図録

本展の図録<sup>8</sup>は全36頁、展示した16つの建築プロジェクトのなかから41点の図面、及び一部建築の記録写真を掲載した。各章、各建築プロジェクトの解説文は日・英二か国語とした。資料館では展覧会毎に図録を制作してきた。本展の図録もこれまでの形式を継承し、会期中は展示を見る際の補助資料であるとともに、会期後は、展覧会記録となるよう展示した資料や解説を可能な限り盛り込んでいる。図録は、現在も当館で配布するとともに、当館ウェブサイトで公開している。

#### 5. おわりに

以上、本稿では、『令和2年度収蔵品展 ミュージアム 1940年代-1980年代: 始原からの軌跡』の企画プロセスと企画概要を中心に報告した。展覧会の企画内容は一義的には展示資料そのものに由来するものである

が、資料を抽出し配列することによって、企画のタイミングと対象とする建築作品が設計された時代というふたつの時間における、社会の状況やそれへの眼差しが相対的に位置付く、意味空間が生まれる(その詳細は、頒布されている図録にて是非ご確認いただきたい)。建築作品においては、資料相互から読み取れる情報は多岐に亘ることから、従って、展覧会企画の大半はその峻別作業に当てられることとなるが、その作業にこそ収蔵品展のひとつの意義を認めることができる。本展は、次々と運び込まれる収蔵資料を整理し活用に供すること、それを批評行為に接続するという、建築アーカイブズの可能性への試行と位置づくと考えらる。

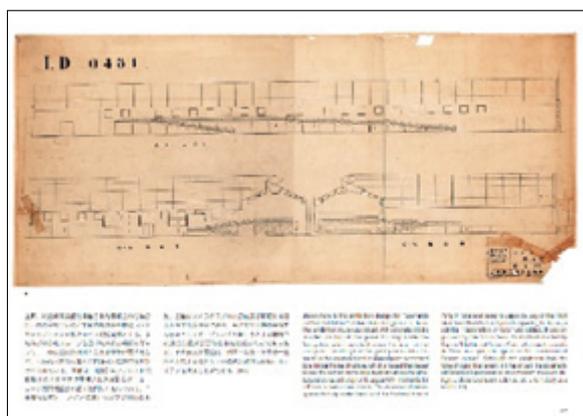
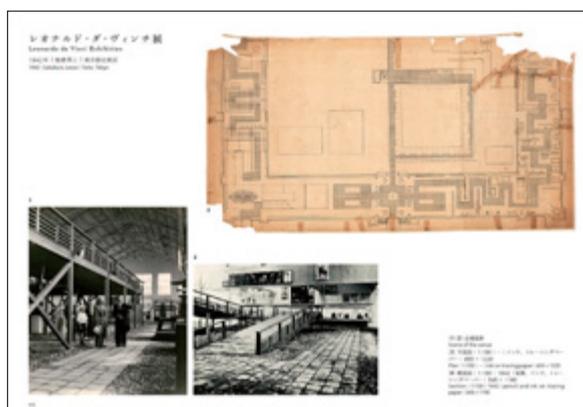


図9 図録より

注

- 1 令和2年度に予定されていた企画展『丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで』は、令和3年度に延期された。
- 2 文化庁国立近現代建築資料館では、平成25(2013)年の開館より年間2回の企画展が開催されている。令和2年度収蔵品展は平成29年、平成30年に続く、三度目の収蔵品展である。
- 3 令和2年2月、国立近現代建築資料館運営委員会第13回企画小委員会で、所蔵資料を展示するための常設コーナー設置についての意見提出があった。それを受けて3月第14回運営委員会において、将来的にロフト部分において新収蔵品展示コーナーの設置を検討する旨が報告された。
- 4 文化庁国立近現代建築資料館の研究部門は、館長・副館長以下、3班(企画・収集・情報)が設置され、それぞれ主任建築資料調査官1名、研究補佐員1~2名が配置されている。本企画開始時には全研究補佐員が部門を横断して企画素案の立案に関わった。
- 5 立案: 遠藤康一、木下紗耶子(企画班)、加藤直子、寺内朋子(収集班)、飛田ちづる(情報班)、2020.05
- 6 文化庁国立近現代建築資料館の収集方針は「我が国の近現代建築に関し、国内外で高い評価を得ている又は顕著に時代を画した建築・建築家に係るもの、又は、我が国の近現代の建築史や建築文化の理解のために欠くことができず、かつ、歴史上、芸術上、学術上重要なもののうち、散逸等のおそれが高く、国において緊急に保全する必要のあるものとする」とされている。
- 7 本展においてミュージアム建築とは、博物館・美術館・工芸館・歴史民俗資料館などを含み、広く展示空間を捉える概念としている。
- 8 文化庁国立近現代建築資料館令和2年度収蔵品展図録『ミュージアム 始原からの軌跡:1940年代-1980年代』文化庁、2020.10.1

(2021年5月31日原稿受理)

第1章 近代美術館の誕生 1940年代-1950年代

レオナルド・ダ・ヴィンチ展 | 1942年 | 坂倉準三 | 東京都台東区

1. 配置図	1:300	1942	鉛筆 色鉛筆 インク、和紙	568×745
2. 平面図	1:100	-	インク、トレーシングペーパー	655×1220
3. 断面図	1:100	1942	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	345×1190

神奈川県立近代美術館 (現・鎌倉文庫館 鶴岡ミュージアム) | 1951年 | 坂倉準三 | 神奈川県鎌倉市

1. 配置図	1:300	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	420×555
2. 一階平面図	1:100	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	515×611
3. 断面図	1:200	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	254×515
4. 展示室散光ルーバー 詳細図	1:200 1:50 1:20 1:1	1950	鉛筆、トレーシングペーパー	403×545
5. 立面図	1:200	1950	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	397×519
6. アクソノメトリック図	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	567×693

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館 | 1956年 | 吉阪隆正、大竹十一 | イタリア、ヴェネチア

1. 上階 アクソノメトリック図	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	550×805
2. 地上階 アクソノメトリック図	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	563×804
3. スケッチ (展示室空間の検討ダイアグラム)	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	430×373
4. 断面図	1:50	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	514×836
5. 地上レベル図	-	1956	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	403×804
6. 詳細図	1:20	1984	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	885×625

石橋文化センター・美術館 (現・久留米市美術館) | 1956年 | 菊竹清訓 | 福岡県久留米市

1. 二階平面図	1:100	1955	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	539×792
2. 北側・東側立面図	1:100	1955	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	543×786
3. 断面図	1:20	1955	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	537×790

国立西洋美術館 | 1959年 | ル・コルビュジエ、坂倉準三、前川國男、吉阪隆正 | 東京都台東区

1. 各階平面図 (基本設計)	1:200	1956	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	838×1062
2. 断面図 (基本設計)	1:50	1956	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	827×1438
3. 二階平面図	1:100	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	585×834
4. 断面図	1:100	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	583×837

第2章 素材・技術からの課題の克服 1950年代後半-1960年代

島根県立博物館 (現・島根県庁第三分庁舎) | 1959年 | 菊竹清訓 | 島根県松江市

1. 一般図	1:200	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	542×800
2. 立面図	1:100	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	549×803
3. 断面図	1:50	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	567×818
4. 配置図 (三列配置)	1:200	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	570×820
5. 照明器具 詳細図	1:10 1:5 1:2	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	568×824
6. ルーバーウォール 詳細図	1:10	1957	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	568×818
7. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	524×577
8. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	580×743

富山美術館 (計画案) | 1961-1963年 | 菊竹清訓 | -

1. 一般図	1:200	1961	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	534×791
2. 断面図	1:50	1961	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	535×788
3. 平面図	1:100	1962	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	537×795
4. 配置図	1:50	1962	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	536×794

佐賀県立博物館 | 1970年 | 高橋誠一/第一工房、内田祥哉 | 佐賀県佐賀市

1. 配置図	1:500	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×840
2. 三階床梁PC版リスト	1:100	1969	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	545×800
3. 一階平面図	1:200	1968	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	405×560
4. 三階平面図	1:200	1968	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	405×553
5. 東側立面図	1:200	1968	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	398×550
6. 断面図	1:200	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	398×552
7. 詳細図 (PC版梁、柱頭部)	1:10	1969	鉛筆、トレーシングペーパー	555×802
8. 詳細図	1:10	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	587×837

佐賀県立博物館構造設計図 | 1970年 | 木村俊彦 | 佐賀県佐賀市

1. 三階床伏図	1:100	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	550×800
2. PC格子梁 詳細図	1:30 1:10	-	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	550×800
3. PC柱 詳細図	1:10	-	鉛筆、トレーシングペーパー	552×800

EXPO'70 富士グループパビリオン | 1970年 | 村田豊 | 大阪府吹田市

1. 断面図	1:200	1968	青焼、トレーシングペーパー	596×848
2. 配置 構造図	1:100 1:30 1:20	1969	鉛筆、トレーシングペーパー	546×800
3. 平面図 (ピア・ガーデン計画案)	1:100	-	鉛筆、和紙	428×613
4. 空気層構造スケッチ (ピア・ガーデン計画案)	1:50	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	422×596

日本万国博覧会電力館 | 1970年 | 坂倉準三建築研究所 | 大阪府吹田市

1. 南側立面図	1:100	1968	鉛筆 インク、マイラーフィルム	552×801
2. 断面図	1:100	1968	鉛筆 インク、マイラーフィルム	550×803

第3章 地域のミュージアムへ：風土 / 伝統、大屋根 1970年代

千葉県立美術館 | 1974年 | 大高正人 | 千葉県千葉市

1. 透視図	-	-	インク 色鉛筆、トレーシングペーパー	625×879
2. 一階平面図	1:200	1972	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×841
3. 立面図	1:200	1972	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×841
4. 大展示室 断面図	1:20	-	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×841

群馬県立歴史博物館 | 1979年 | 大高正人 | 群馬県高崎市

1. 配置図	1:500	-	インク フィルム、トレーシングペーパー	637×1681
2. 一階平面図	1:200	1977	青焼 インク、トレーシングペーパー	601×851
3. 中庭 平面詳細図	1:50	1978	鉛筆 色鉛筆 インク、トレーシングペーパー	601×851
4. ホール 断面詳細図	1:50	1977	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	594×845
5. 断面図	1:200	1977	鉛筆 インク、トレーシングペーパー	595×838

第4章 個性的なミュージアムへ：親自然、局所、世界風景 1980年代

未田美術館 | 1981年 | 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 | 大分県由布市

1. 一階平面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
2. 二階平面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
3. 南側立面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	593×832
4. 断面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	418×593
5. スケッチ	-	-	インク、トレーシングペーパー	417×2124
6. スケッチ	-	-	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	417×580
7. スケッチ	-	1984	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	417×590
8. スケッチ	-	1984	鉛筆、トレーシングペーパー	417×519

田崎美術館 | 1984年 | 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 | 長野県軽井沢町

1. A棟 平面図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
2. A棟 断面図	1:50	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	593×837
3. 南側立面図	1:50	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	591×837
4. B棟 立面図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	340×418
5. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	340×590
6. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	423×594
7. スケッチ	-	-	鉛筆、トレーシングペーパー	418×1153
8. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	418×595
9. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	419×598

飯田市美術館 | 1989年 | 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 | 長野県飯田市

1. 一階・二階平面図	1:200	-	インク、トレーシングペーパー	593×840
2. 坂根ギャラリー 平面詳細図	1:50	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
3. 北側立面図	1:100	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	592×835
4. 東側・西側立面図	1:100	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
5. 断面図	1:30	-	鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
6. メインロビー 展開図	1:50	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	592×837
7. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	591×1447
8. スケッチ	-	-	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	419×593
9. スケッチ	-	1987	鉛筆 色鉛筆、トレーシングペーパー	420×590

【展覧会】

『ミュージアム 始原からの軌跡：

1940年代-1980年代』

主催：文化庁

協力：公益財団法人東京都公園協会

会場：文化庁国立近現代建築資料館

展覧会担当：

川向正人 (主任建築資料調査官)、

遠藤康一 (研究補佐員)、

木下紗耶子 (研究補佐員)

会期：2020年10月1日(木)～11月15日(日)

(開催日数 46日間)

入場者数：3,769人

【制作】

会場設営：株式会社芸芸

会場グラフィックデザイン：

西脇和馬 (株式会社 Echelle-1)、

株式会社ラビス・ラズリ

照明：合同会社サムアラ

会場計画：遠藤康一

【図録】

発行・監修：文化庁

編集：文化庁国立近現代建築資料館

編集協力：勝原基貴 (千葉大学特任研究員)

デザイン：日向麻梨子 (オフィスヒューガ)、

下田泰也+西脇和馬 (株式会社 Echelle-1)

翻訳：株式会社フローズン・クレーズ

印刷・製本：株式会社マップス





令和2年度

国立近現代建築資料館活動報告

# 令和2年度 国立近現代建築資料館 活動報告

Annual Activity Report of NAMA, 2020 (Reiwa 2) fiscal year

文化庁国立近現代建築資料館

## I. 資料の調査・保管等

### 1. 各資料の作業

各資料について、次のとおり調査～保管までの業務（資料調査、資料受入、契約解約、返却、資料整理・研究、目録作成、デジタル撮影、燻蒸、修復、資料利用等）を行った。

#### (1) 坂倉準三建築設計資料

##### ■ 概要

資料整理については、昨年度からの継続作業として、これまでに作成された目録データの公開を順次開始した。また資料の利用に伴い、一部の写真等資料についてデジタル化を行った。

##### ■ 著作権譲渡契約の締結

元所員又は施主が所有していたもので当該所有者から直接寄贈を受け資料館所蔵となっている資料について、令和3年3月22日付けで坂倉準三の遺族と著作権の譲渡契約を締結した。

##### ■ 資料整理・目録作成

昨年度寄贈資料の内容を反映した階層構造に従い、公開用目録の作成手順を更新し、東京事務所図面資料の目録整備を進めた。具体的には、閲覧等利用が申請されたもののうち主に東京事務所図面資料に関する既存の目録データ及び写真・箱資料のファイル目録を中心に、資料館共通フォーマットへの変更を行った。

##### ■ 調査研究

昨年度寄贈資料に含まれる国立西洋美術館ポートフォリオ及び図面の調査を行った。ポートフォリオについては、国立西洋美術館が所蔵している版との比較を行うとともに、ル・コルビュジェ財団蔵の関係資料も参考に資料館所蔵資料について考察した。図面資料については、令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」展での展示に伴い、当該資料の経緯について先行研究を踏まえて考察を行った。

#### (2) 駒田知彦資料

##### ■ 資料の概要（「(1) 坂倉準三資料」と独立）

坂倉事務所の元所員であった駒田氏所蔵の資料については、神奈川県立近代美術館関連資料のほか、ファイル目録作成を進めた。

#### (3) 村田豊建築設計資料

##### ■ 資料整理・目録作成

図面及びその他の資料整理を行った。具体的には筒番号25から48番までフラットニング、各資料への資料番号記載、及びファイルレベル及びアイテムレベルの目録作成を行った。

また、ファイル番号49番以降の図面以外の資料も約3箱の整理を終えた。

##### ■ デジタル化

ファイル番号25から33までの基本画像（400dpi）と閲覧用画像（200dpi）を作成した。

#### (4) 吉阪隆正+U研究室建築設計資料

##### ■ 目録作成

図面及び紙資料の目録作成を実施した。具体的には資料番号を記載し、アイテムレベルの目録作成を行った。なお、ファイルレベルの番号は既に決められており、整理上変更する必要はないため、そのまま使用した。

#### (5) 大高正人建築設計資料

##### ■ 保存管理

過去の展覧会で使用した図面について収蔵場所の確認を行い、戻す作業を実施した。その過程で、保存容器のないものがあり、保存容器の製作も行った。併せて目録に収蔵場所を記入した。

#### (6) 木村俊彦構造設計資料

##### ■ 資料調査・目録作成

資料整理・目録作成が完了し、資料の公開を開始した。

## (7) 菊竹清訓建築設計資料

### ■ 概要

昨年度に寄贈された1960年代及び慰霊碑関連の図面資料について資料整理を継続して進めた。なお、令和3年1月に鳥根県立美術館で開催された展覧会「菊竹清訓 山陰と建築」への資料貸出及びその他利用等の申請があった資料を優先して目録作成を進めた。また1970年代前半の図面資料及び慰霊碑関連の文書等資料について、賃借契約を締結して、令和3年1月に資料館へ搬送し、寄贈手続きに向けた作業を開始した。

アドバイザー・コミッティー（寄贈者、学識者、事務所関係者で構成）は、新型コロナウイルス感染症拡大により、委員が会する状態での開催が困難であったため、菊竹資料のアーカイブ化の進捗状況の報告及び資料整理等についての資料を送付し、それについて意見・助言等を受ける形での実施とした。

### ■ 委託事業等

当該資料の整理をより効率的かつ適切に行うため、資料整理にあたっては、1960年代図面資料は明るい建築計画、1970年代図面資料については有限会社ナスカへ委託、慰霊碑関連資料については、昭和女子大戸田譲氏へ資料整理協力を依頼した。

### ■ 資料整理

寄贈済み資料については目録作成を中心に実施した。借用資料については（株）情報建築から資料館へ搬入後、フラットニング及び資料番号の付与を中心に整理作業を進めた。なお慰霊碑関連資料についても、図面資料を中心にフラットニング、番号付与、目録作成作業を進めた。

### ■ 資料の修復

鳥根県立美術館への資料貸出しに伴い、鳥根県立武道館の図面資料2点（15-1015-21, 22）の修復を行った。

### ■ 菊竹清訓建築資料のアーカイブズ構築のためのアドバイザー・コミッティー

資料：

- (1) 令和2年度資料整理業務概要
- (2) 今年度寄贈リスト・作品名称の確認
- (3) 将来計画と今後の予定
- (4) 令和元年度委託事業概要報告
- (5) 今後のアーカイブズ公開について
- (6) その他菊竹資料に関する活動（展覧会等）報告

### ■ デジタル化

寄贈された資料のうち、整理された資料の一部、パシフィックホテル茅ヶ崎及び佐渡グランドホテル等、約1,000点についてデジタル化を行った。

## (8) 川添登資料

### ■ 資料確認・整理

令和2年11月2日付けで賃借契約を締結して資料館へ資料を搬送し、寄贈契約に向けて、段ボール箱に収納された資料整理、目録作成を進めた。

## (9) 岸田日出刀資料

### ■ 資料整理

昭和35（1960）年東京オリンピック施設委員長としての視察旅行時の日記帳の翻刻を実施した。

### ■ 保存、管理

図面のうち、A0以下のものを中性紙に包みマップケースに入れ替えた。

## (10) 高橋誠一・第一工房資料

### ■ 資料調査

寄贈に向けた調査のため令和2年6月24日付けで賃借契約を締結するとともに、WGを開催し、前年度策定した選定基準をもとに、寄贈を優先すべき「コア作品」を選定し、収蔵に向けた資料確認を行った。

### ■ 資料整理

資料整理・確認のためのフラットニング、ナンバリング、ファイルリスト作成を行った。

## (11) 前川國男建築設計資料

### ■ 寄贈契約

前川建築設計事務所は現在も活動しており、現存する作品については維持管理や増改築等のために当初の建築資料を使用することから、コンベ等で実現しなかった作品及び現存しない作品に関する建築資料の寄贈を順次受けることとなっている。今年度は、令和2年11月9日付けで寄贈契約（第2回）を締結し、蛇の目ミシンビル、晴海団地高層アパート等の図面資料の寄贈を受けた。

### ■ 資料整理

寄贈を受けた資料について、番号付与及び目録作成作業を開始した。

## (12) 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料

### ■ 概要

令和2年6月3日付けの借用依頼により、6月18日に資料館へ141件の資料を搬入し、令和3年2月にアイテムの数え上げを完了した。資料内容は主に図面。アトリエ・ファイ建築研究所との協議により、同年3月2日付けで15,140点を対象とした寄贈契約を締結した。

## ■ 資料調査

寄贈契約締結に向けたアイテム数の確認を行うとともに、資料の状態を確認し、カビなどが見られる場合は隔離を行った。

### (13) ブルーノ・タウト関連資料

## ■ 資料調査

所有者であるシュパイデル氏との貸借契約に基づき、令和2年10月9日に資料を預かっている工学院大学教授の鈴木敏彦氏から当該資料を引き取った。

## ■ 資料受け入れに向けた手続き

令和3年3月26日開催の第17回運営委員会に受入資料概要及び詳細を提出し、資料受け入れについて承認された。

## ■ 資料整理

令和2年3月、引取資料の数量を確認し、ファイル目録を作成した。

### (14) 渡辺仁資料

## ■ 追加資料の寄贈契約

遺族から寄付申し出があった資料のうち、手続きが進んでいなかった段ボール一箱分の調査と目録作成を行い、令和2年11月24日付けで寄贈契約を締結した。

## ■ 目録

既存目録を「最終目録」に合わせて書き換えた。

### (15) 渡辺義雄撮影西洋美術館・東京文化会館写真資料

## ■ 概要

資料館が借用していた本資料の一部を渡辺義雄氏撮影の写真を所蔵している日本写真家協会日本写真保存センターに保管してもらうことにして、資料所有者の了承を得た上、令和2年9月29日に資料館から上記センターに直接写真を引き渡した。

### (16) 平田重雄資料

## ■ 保存管理

資料の形状と状態を見て、次年度からの実施方針として、一部はマップケースではなく中性紙箱などを使用して保管することを決定した。

## 2. 新規受入資料の概要

### (1) 木村俊彦構造設計資料

木村俊彦は、大正15(1926)年香川県高松市に生まれ、昭和25(1950)年東京大学第二工学部を卒業後、前川國男建築事務所入所、昭和27(1952)年横山構造設

計事務所への移籍を経て、昭和39(1964)年に独立、木村俊彦構造設計事務所を設立した。

本資料群は、木村が横山構造設計事務所に在籍していた昭和29(1954)年頃から木村の死去によって事務所が閉鎖されるまでに作成された構造設計図書、構造計算書等のプロジェクト、構造設計に伴うプログラミング、文書、写真及びスケッチ等の資料並びに構造家倶楽部設立等木村が個人として関わった資料からなる。数多くの著名な建築家による建築物及び国内外で高い評価を得ている建築の構造設計を担った木村俊彦の構造設計思想を示す証跡であり、木村が構造家として活動を行った全期間を含む包括的な資料群である。

### (2) 前川國男建築設計資料(第2回)

前川國男は、明治38(1905)年新潟市に生まれ、昭和3(1928)年東京大学工学部建築学科卒業と同時にパリへ赴き、ル・コルビュジェのアトリエで学び帰国後、昭和5(1930)年にレーモンド事務所を経て、昭和10(1935)年に前川國男建築設計事務所を設立した。同事務所には、丹下健三、大高正人、木村俊彦等も在籍していた。

本資料群は、前川國男建築設計事務所が現在も存続し、前川作品の修理、保存、改築等の業務を継続していることから、現用でない資料について段階的に寄贈されることになったものであり、今回はその第2回である。

日本建築学会賞受賞した蛇の目ミシン工業株式会社、日本住宅公団晴海団地高層アパートはじめとした社会的に高い評価を得た建築の資料や、上海華興商業総合住宅、日本住宅公団の一連の住宅等、戦前から戦後の集合住宅の変遷をたどることのできる図面資料、また、トロント市庁舎コンペ、レオポルドビルコンペ、NHKテレビセンターコンペ、アムステルダム市庁舎コンペ等、その後の前川建築のデザインへ影響を与えたコンペ案の図面資料等が含まれている。

### (3) 角田栄資料

角田栄は、大正2(1913)年3月、京都府与謝郡宮津町に生まれ、京都帝国大学工学部建築学科にて坂静雄の指導を受けた。大蔵省営繕管財局、名古屋帝国大学事務嘱託などを経て、戦後、アジア競技大会に合わせて建設された国立陸上競技場と国立競技場附属テニスコートの設計を建設省関東地方建設局営繕部第一課長として担当した。建築家片山光生とともに国立競技場を設計した中心的人物である。

本資料群は、国立競技場等のスケッチ帳、東京オリ

ピック海外視察時の日記帳、国立競技場関連の書籍、ビルマでの自らの戦史を綴った文章やスケッチなどからなる。多くは個人資料であるが、国立競技場建設のための海外視察時の日誌や写真アルバム、聖火台、競技場内の装飾、自邸のエスキス等が描かれているスケッチブック、学生時代の写真アルバム、官位・各種委員等の任命・委嘱状、大蔵省営繕課の職員名簿といった資料は一次資料としての史的価値が高いと思われる。

#### (4) ヴァスマート社所有吉田著作関連資料

吉田鉄郎は、明治27(1894)年富山県東礪波郡福野町に生まれ、大正8(1919)年に東京帝国大学を卒業後、逓信省営繕課に入省、昭和20(1945)年の退職まで多くの逓信省の建築を設計した。代表作に東京中央郵便局、大阪中央郵便局などがある。その他、日本の建築文化を紹介する著作を海外で刊行。「日本の住宅」、「日本の建築」(以上、独語)、「日本の住宅と庭園」(英語)などの著作がある。

本資料群は、吉田によるドイツ語の著作「Das japanische Wohnhaus (日本の住宅)」、(第2版)、「Japanische Architektur (日本の建築)」、*„Der japanische Garten (日本の庭園)“*に関する写真・図版原稿やスケッチ(レイアウト指示書)で、吉田が逝去直前の昭和31(1956)年までに作成し、ドイツのヴァスマート社に送付したものを、同社が保管していたものである。

原稿及び吉田がページレイアウトを指示したスケッチ、並びに写真・図版に記されたキャプションやコピーライトの記述などは、吉田による日本の住宅や建築への理解を示す貴重な資料である。また吉田が生涯を通じて行ってきた設計活動との関連を考えるための研究資料としても、利用可能性を持つものである。

#### (5) 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料

原広司は、昭和11(1936)年神奈川県川崎市に生まれ、昭和34(1959)年に東京大学工学部建築学科を卒業後、昭和39(1964)年に同大学大学院博士課程修了、同年より東洋大学助教授を経て昭和44(1969)年より東京大学で教育・研究を行いながら、RAS建築研究所(昭和36〔1961〕年から昭和43〔1968〕年)、アトリエ・ファイ建築研究所(昭和45〔1970〕年から平成10〔1998〕年)、原広司+アトリエ・ファイ建築研究所(平成11〔1999〕～)を拠点に設計活動を行った建築家である。1970年代に住宅建築で注目を集め、昭和61(1986)年に田崎美術館で日本建築学会賞を受賞した。1990年代以降は梅田スカイビルや京都駅ビルなどの

大規模な建築が知られる。東京大学での研究として実施された世界の集落調査や、著作『空間〈機能から様相へ〉』(サントリー学芸賞受賞)でも知られる。

本資料群は、主として原広司がRAS建築研究所での活動及びアトリエ・ファイ建築研究所との協同において作成された建築設計図等からなる。

資料群に含まれる属性は、会社記録(工事請負契約書の頭部分のコピー)とプロジェクト記録(建築設計の設計図等)の2つに大別される。

## II. 展示・教育普及

### 1. 展覧会

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大による影響から当初予定していた丹下健三展の開催を延期したことに伴い、資料館収蔵資料を活用した収蔵品展として「ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡」を開催した。また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として実施する「日本博」の主催・共催型プロジェクトとして東京国立博物館、国立科学博物館及び資料館の3館共同で開催する「日本のたてもの-自然素材を活かす伝統の技と知恵-」の一環として「工匠と近代化-大工技術の継承と展開-」を開催した。

#### (1) 「ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡」

##### ■ 展覧会

会期：令和2年10月1日(木)～令和2年11月15日(日)  
(46日間)

来場者総数：3,769人

(合同庁舎正門：501人、旧岩崎庭園：3,268人)

一日平均来場者数：81.9人

主催：文化庁

協力：公益財団法人東京都公園協会

企画：文化庁 国立近現代建築資料館

館内担当者：川向正人(当館主任建築資料調査官・  
東京理科大学名誉教授)

遠藤康一(研究補佐員)

木下紗耶子(研究補佐員)

##### ■ 内覧会

新型コロナウイルス感染拡大対策のため開催せず。

##### ■ 刊行物

体裁・部数 ポスター：B2縦 500部

チラシ：A4縦両面 2,000部

図録：B5横・36ページ・無料配布  
3,000部

■メディア掲載

- ・Tokyo Art Beat (展覧会案内を掲載)
- ・KENCHIKU (展覧会案内を掲載)

■参照情報

- ・オーラルヒストリー 青木淳氏／原広司氏(Ⅲ. 1. (1) 参照)
- ・特設ウェブサイト (<http://nama-museums.jp/>)  
オーラルヒストリー映像を公開。

(2)「工匠と近代化—大工技術の継承と展開—」

■展覧会

会期：令和2年12月10日(木)～令和3年2月19日(金)  
(令和2年12月29日(火)～令和3年1月3日(日)を除く50日間)

※新型コロナウイルス感染拡大による都立旧岩崎邸庭園の臨時休園に伴い、令和3年1月9日(土)以降の土日祝日を休館としたため、当初の最終日令和3年2月21日(日)及び会期日数68日間から変更となった。

入館者数：3,348人(合同庁舎正門：2,491人、旧岩崎邸庭園：857人)

一日平均来場者数：67.0人

主催：文化庁

特別協力：キヤノン、JR 東日本、日本たばこ産業、三井不動産、三菱地所、明治ホールディングス、公益財団法人東京都公園協会

協賛：清水建設、高島屋、竹中工務店、三井住友銀行、三菱商事

協力：国立歴史民俗博物館、金沢工業大学

■実行委員会

a. 委員

- 池上重康(北海道大学助教)
- 清水隆宏(岐阜工業高等専門学校准教授)
- 永井康雄(山形大学教授)
- 山崎幹泰(金沢工業大学教授)
- 川向正人(当館主任建築資料調査官)

b. 館内担当者

- 木下紗耶子(研究補佐員)
- 小池周子(研究補佐員)
- 寺内朋子(研究補佐員)

c. 開催状況

令和2年2月より同年10月まで計5回の定例、ワーキングとして開催。

■プレスカンファレンス

新型コロナウイルス対策として内覧会は開催せず、プレスのみ事前に事前公開を行った。

実施日：令和2年12月9日(水)14:00～16:30

■ギャラリートーク

新型コロナウイルス感染対策のため開催せず。

■関連イベント：オンライン配信

ニコニコ美術館運営の下、オンラインでのギャラリーツアーを開催。

日時：令和3年1月12日(火)18:30～

進行：橋本麻里／モデレーター：川向正人

オンライン視聴者・アーカイブ配信数：

31,027回 / コメント数：17,767件

■刊行物

体裁・部数 ポスター：B2縦 500部

チラシ：A4縦両面 30,000部

図録：B5横・64ページ・無料配布  
3,000部

■メディア掲載

新聞

- ・読売新聞 令和2年12月6日 朝刊(1面、30面)
- ・毎日新聞 令和3年1月15日 富山版
- ・毎日新聞 令和3年1月20日 夕刊

雑誌

- ・『月刊文化財』 令和2年12月号
- ・『新建築』 2021年1月号
- ・『GENROQ』 2021年2月号

WEB、TV

- ・ジャパンデザインネット 令和2年12月11日
- ・カーサブルータス web 令和2年12月25日
- ・ペンオンライン 令和3年1月5日
- ・ファッションプレス 令和3年1月8日
- ・インターネットミュージアム 令和3年1月8日
- ・ニコニコ美術館 令和3年1月12日 18:30～
- ・日曜美術館アートシーン 令和3年1月17日

(3) 展覧会準備

令和2年夏季開催を延期した「丹下健三1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」展について、開催に向けたポータルサイトの立ち上げ準備を進めた。同展の開催は関係者と調整を行い、会期を令和3年7月21日(水)から10月10日(日)とすることにした。

■ワーキンググループ

豊川斎赫(千葉大学大学院准教授)、勝原基貴(千葉大学特任研究員)

## 2. 資料提供

### (1) 現物（貸出先：貸出資料 用途）

- ・島根県立美術館：菊竹清訓資料より図面25点 展覧会「菊竹清訓 山陰と建築」

### (2) 画像（貸出先：貸出資料 用途）

- ・企業：坂倉準三資料群より3点 NHK BS プレミアム「アナザーストーリーズ世界遺産スペシャル」放送
- ・個人：吉阪隆正+アトリエU研究室資料8点、大高正人建築設計資料1点 研究資料
- ・団体：大高正人資料より63点 建物改修の資料
- ・個人：坂倉準三資料群より2点 論文執筆
- ・個人：大高正人資料より3点 著書掲載
- ・企業：坂倉準三資料群より3点 菊竹清訓資料より1点 書籍『「奇跡」と呼ばれた日本の名作住宅』に写真掲載
- ・倉敷市立美術館：丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルムより40点 国登録有形文化財認定に係る建築紹介
- ・企業：大高正人資料より1点 ケーブルネット296「建築遺産」への写真放映
- ・企業：渡辺仁資料より1点 テレビドラマ「名建築で昼食をSP 横浜編」に写真掲載
- ・企業：吉阪隆正資料より6点 TOTO 通信(2021年春号)及びTOTO ウェブサイトに掲載
- ・企業：菊竹清訓資料より15点 島根県立美術館菊竹清訓展の書籍に掲載
- ・企業：渡辺仁資料より1点 テレビ東京「新美の巨人たち」に写真放映
- ・企業：菊竹清訓資料より2点 島根県立美術館菊竹清訓展の書籍に掲載
- ・団体：大高正人資料より101点 建物改修の資料
- ・企業：大高正人資料より1点 ケーブルネット296「建築遺産」への写真放映

### (3) 資料閲覧及び複写の提供

資料閲覧及び複写の提供実績の概要は、以下のとおりである。

#### ア. 閲覧実施件数及び閲覧点数の実績

- \* 実施件数：22件
- \* 閲覧に供した資料点数：76ファイル、1568点
- \* 資料群別の実施件数
  - ・坂倉準三建築設計資料：9件
  - ・丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルム：3件

- ・村田豊建築設計資料：1件
- ・吉阪隆正+U研究室資料：2件
- ・大高正人建築設計資料：3件
- ・菊竹清訓建築設計資料：3件
- ・吉田鉄郎建築設計資料：2件

#### イ. 複写の提供実績

- \* 提供件数：9件
- \* 提供点数：599点

## 3. 第2回近現代建築アーカイブズ講習会

近現代の建築資料を所蔵する組織の学芸担当者等を対象とし、近現代建築資料における収集、整理、保存及び利用等に関する必要な専門的知識と技能の習得を目的として開催した。

開催日：令和2年11月12日（木）、13日（金）

会場：湯島地方合同庁舎会議室・資料館会議室及び  
オンライン受講 ※オンライン受講は12日のみ

受講者数：来館12名、オンライン44名

講習内容：

#### 1日目（11月12日（木））

1. 近現代建築アーカイブズの概要  
講師：齋藤歩（京都大学総合博物館特定助教）
2. アーカイブズの歴史・アーキビストの使命と役割  
講師：森本祥子（東京大学文書館准教授）
3. 国立近現代建築資料館活動報告
4. 国立近現代建築資料館への寄贈という選択と寄贈後の経験  
講師：株式会社坂倉建築研究所
5. 企業アーカイブズの事例と課題について  
講師：畑田尚子（清水建設株式会社コーポレート企画室コーポレート・コミュニケーション部主任）

#### 2日目（11月13日（金））

1. 近現代建築資料における紙資料の取り扱いと保存について  
講師：安田智子（東京修復保存センター取締役ペーパーコンサバター）
2. 建築資料デジタル化の効用と実際  
講師：田良島哲（国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官）

### Ⅲ. 情報収集

#### 1. オーラルヒストリー

##### 「ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡」展関連

本展覧会の開催にあたり、ミュージアム建築を多数手掛けてきた青木淳（昭和31〔1956〕-）と原広司（昭和11〔1936〕-）にインタビューを行い、展示会場とウェブサイトに公開した。

両者にインタビューを依頼した理由は次のようなものであった。第一に、時代を画する特色あるミュージアム建築を設計していること。第二に両者の仕事および言葉を記録することが、現代ないし将来のミュージアム建築の在り方を考察するうえで重要な参照項になりうると考えたからであった。

#### (1) 青木淳

収録日：令和2年8月27日

収録対象：青木淳

聞き手：川向正人

記録時間：約21分

収録場所：文化庁国立近現代建築資料館

青木が携わったミュージアム建築は潟博物館（平成9〔1997〕）や青森県立美術館（平成18〔2006〕）などが知られる。また京都市京セラ美術館の改修・リニューアルオープンに伴い、青木は令和2（2020）年に館長に就任した。インタビューでは、建築家として、そしてコロナ禍の影響を受けながらの出発となった館長としての両面から話を聞くことができた。

インタビューにおいて、青木は、明治以降の日本のミュージアム施設の歴史を振り返り、一時的な見世物としての陳列ではなく、コレクションを核とした展示活動に立ち戻ることの重要性を指摘した。そのうえで、21世紀のミュージアムとして、モノを作り活動する現場としての在り方を提言し、「モノを作る猿」としての人間の始原的な姿に働きかけることが、ミュージアムの存在意義を確かなものにしていくとする。そのようなミュージアムは、完成した作品を見る場としての静的なものではなく、今日的な視点から継続的に働きかけることのできる現在進行形の間でもある。また、鑑賞体験でも決められた動線をなぞることとともに、歩く楽しみのなかに作品に出くわすという「散歩道を作る」鑑賞もまたミュージアムの魅力である。

作ること、そして散歩することの楽しみに開かれた

青木の構想するミュージアムは、動員数だけを指標とするのではない、人々の多様な関わり方を受け止め、そして活性化するものである。建築を設計することと、建築を人間が活動するための場ないし道具として活かしていくことを連続的に捉える視点性のなかから、新しいミュージアムの在り方が目指されている。

#### (2) 原広司

収録日：令和2年8月31日

収録対象：青木淳

聞き手：川向正人

記録時間：約17分

収録場所：文化庁国立近現代建築資料館

原は、末田美術館、田崎美術館、飯田市美術博物館の設計過程について、施主や技術的な協力者との協働や地形・気候・展示作品との関わりから、建築を構想し成立させていく過程を語った。これらのミュージアム建築は原の70年代の住宅建築群と90年代の大規模なプロジェクトとの、時期および規模の中間に位置しており〈様相〉の概念が組み立てられる時期と重なる。

末田美術館は住宅兼アトリエ、展示施設であり、集落調査や自邸の設計からの延長として設計された。田崎美術館では田崎廣助が描いた山の絵画を自然光の中で見せることを意図した。また、モダニズム建築が前提とする均質空間に対して、空間の現象全体を「様相」ととらえ、一期一会のものとして現れる建築を設計しようとした。飯田市美術博物館は、伊那谷から見る山の形やそこにかかる雲の形象を踏襲して設計された。原は同敷地内への柳田國男館の移築にも尽力し、日夏耿之介記念館を含めた展示施設は小道によって接続され、地域の歴史や芸術・自然科学を包括する一帯が作られた。

原は、ミュージアム建築を通じて、土地や収蔵品と密接に結び付きながら構想される建築の在り方を模索した。ミュージアムを訪れる経験は、展示室内のみで完結されず、建築の内外を歩き、その時間のなかで体験される気候や風景の様々な変化とともにある。自然現象と応答する建築においては、作品鑑賞の経験が何度でも刷新される可能性をも設計することが試みられている。作ること、そして散歩することの楽しみに開かれた青木の構想するミュージアムは、動員数だけを指標とするのではない、人々の多様な関わり方を受け止め、そして活性化するものである。建築を設計することと、建築を人間が活動するための場ないし道具として活かしていくことを連続的に捉える視点性のなかから、新しい

ミュージアムの在り方が目指されている。

#### IV. 調査研究等

##### 我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査

###### 1. 実施概要

1990年代以降は建築資料の電子化が進み、このような電子化された建築資料をいかにアーカイブとして構築するか、そして適切に保管、活用していくかといった方策を見いだすことが今後の課題として認識されている。

本調査は他の建築資料よりもその資料的特性等から、先行して電子化が進んだ構造資料を対象として、これまで資料館が行ってきた3か年の構造家の概要資料調査の成果をふまえつつ、複数の存命建築家の資料について調査し、アーカイブ構築のための課題を整理し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承にかかわるさまざまな可能性について検討することを目的とした。方法としては、存命建築家の構造資料とその保管の実態について明らかにし、現状の問題点、課題等について検討を行った。

###### 2. 実施の記録

次のとおりワーキンググループによる調査を実施し、その成果を「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告書としてとりまとめた。

主査：竹内徹（日本構造家倶楽部）

委員：伊藤潤一郎、佐々木睦朗、金田勝徳、金箱温春、多田脩二、中田捷夫、原田公明、満田衛資、森部康司（日本構造家倶楽部）、小澤雄樹（芝浦工業大学）、川口健一（東京大学）、安藤顕祐（日建設計）、浜田英明、藤本貴子（法政大学）

顧問：難波和彦

協力：加藤道夫、加藤直子（資料館）

第1回：令和2年12月23日

場所：オンライン開催

打合せ内容：

- ・これまでの経緯、今年度調査の目的と実施体制等の確認
- ・調査対象候補者及び調査方法の検討

第2回：令和3年1月21日

場所：オンライン開催

打合せ内容：

- ・調査の中間報告
- ・報告書内容についての協議

第3回：令和3年2月24日

場所：オンライン開催

打合せ内容：

- ・調査の報告
- ・報告書内容についての協議

第4回：令和3年3月22日

場所：オンライン開催

打合せ内容：

- ・最終報告書（案）の確認

###### 3. 調査結果概要

本調査では、まずこれまで3か年の構造家の概要資料調査の成果をふまえ、存命建築家を対象として、代表的な建築物、構造解析方法、構法とその施工法リストを作成した。それをもとに調査対象とする構造家を選定し、電子化とネットワーク化を視野に入れた資料継承の方法等の実態について調査を行い、その結果を体系的にまとめた。具体的には、構造家の事務所における構造資料の保存状況の概略を調査によって把握するとともに、国内外の大手組織設計事務所におけるデジタルデータの管理、及びアーカイブ手法についてヒアリング調査を実施した。

調査の結果、構造家の資料の保存は、管理組織がない場合は遺族により資料整理が行われるが、資料の分類や特定の難しさ等から破棄される事例もみられたこと、資料が保存されていても公開の際に遺族等所有者の同意を得ることが困難な場合があることが明らかになった。いわゆるアトリエ系の小規模な事務所では資料のデジタル化や著作権の整理も未着手である場合も多くみられる一方で、組織設計事務所の中には、構造資料をプロジェクト遂行段階より分類して共有データとして管理し、映像・画像データも保存の際に著作権を整理し組織名で利用できるようにするなど、担当者によらず把握が可能となっている事例もみられた。

## V. 委員会

### 1. 運営委員会

#### 令和2年度委員

(◎は委員長、○は委員長代理、五十音順 敬称略)  
加藤雅久(居住技術研究所主宰)、隈研吾(東京大学特別教授・名誉教授)、近角真一(日本建築士会連合会会長)、◎難波和彦(東京大学名誉教授)、○山崎幹泰(金沢工業大学教授)、山名善之(東京理科大学教授)、渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター教授)

#### 開催状況

第15回：令和2年9月14日 ※ Web会議

[主な議題]

- ・資料の受入について  
吉田鉄郎資料
- ・展覧会の開催について  
①「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」展の延期  
②令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡」

第16回：令和2年9月23日～9月30日 ※メール審議

[主な議題]

- ・展覧会の開催について  
令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡」

第17回：令和3年3月26日 ※ Web会議

[主な議題]

- ・資料の受入について
- ・展覧会の開催について  
①「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」展の開催時期  
②令和3年度収蔵品展
- ・資料公開に関する基準の策定について

### 2. 小委員会

#### (1) 収集小委員会

令和2年度委員 (◎は委員長、五十音順 敬称略)

加藤諭(東北大学准教授)、◎加藤雅久(居住技術研究所主宰)、角田真弓(東京大学技術専門職員)、藤木竜也(千葉工業大学准教授)、山崎幹泰(金沢工業大学教授)

#### 開催状況

第15回：令和3年1月29日 ※ Web会議

[主な議題]

- ・資料の受入れについて

#### (2) 企画小委員会

令和2年度委員 (◎は委員長、五十音順 敬称略)

太田泰人(前女子美術大学教授)、大村理恵子(パナソニック汐留美術館学芸員)、国広ジョージ(国土館大学教授)、◎難波和彦(東京大学名誉教授)、前田尚武(京都市京セラ美術館企画推進ディレクター)

#### 開催状況

第14回：令和2年9月18日

[主な議題]

- ・「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」展の延期について
- ・令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡」について

#### (3) 情報小委員会

令和2年度委員 (◎は委員長、五十音順 敬称略)

後藤真(国立歴史民俗博物館准教授)、齋藤歩(京大総合博物館特定助教)、永崎研宣(人文情報学研究所首席研究員)、森本祥子(東京大学文書館准教授)、◎渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター教授)

#### 開催状況

第11回：令和3年2月1日

[主な議題]

- ・国立近現代建築資料館 資料公開業務に関する基準の策定について

## VI. 運営

### 1. 広報・広聴

#### (1) 資料館ウェブサイト

ウェブサイトの保守管理を(株)ナカヨに委託して運用した。展覧会の開催案内、チラシ、図録などのデータを掲載したほか、新型コロナウイルス感染症のまん延にとまなう利用の制限等、臨時的措置に関する情報を、周知のため適宜掲載した。

開発を進めてきた収蔵資料検索システムについて、収蔵資料のデータを順次投入しウェブ上での公開の準備を進めた。令和2年度末には公開可能な状態に移行し、表示や使い勝手の確認を行っている。システム管理は(株)VVVに委託している。

#### (2) 文京ミュージズフェスタ2020

令和2年12月15日(火)～19日(日)にギャラリースピック(文京シビックセンター1階)にて開催された「文京ミュージズフェスタ2020」(主催：文京区、文の京

ミュージアムネットワーク)に参加した。今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため対面案内が制限されたことから、日本博の一環として東京国立博物館、国立科学博物館及び資料館の3館で開催する「日本のたてもの」展の共通ポスターと資料館を会場として開催中の「工匠と近代化—大工技術の継承と展開—」展のポスターを掲示し、区民ら来場者に広報を図った。

### (3) 上野文化の杜

上野文化の杜のポータルサイトで施設概要や開催する展覧会の情報を発信した。なお、従来は上野文化の杜新構想実行委員会が発行する UENO WELCOME PASSPORT(上野地区文化施設共通入場券)に施設情報を掲載し、当該パスポート持参者に特製ポストカードを進呈することによって広報を図っていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、今年度は発行が見合わされた。

### (4) アンケート調査

令和2年度取藏品展「ミュージアム 1940年代-1980年代:始原からの軌跡」、秋季展「工匠と近代化—大工技術の継承と展開—」の来館者に対して、展覧会の評価等に関するアンケート調査(任意)を実施した。

## Ⅶ. 予算

令和2年度予算額 114,050千円

## Ⅷ. 組織

### 令和2年度職員名簿

館長 清水 幹治(文化庁企画調整課長)  
館長補佐 中島 充伸  
(文化庁企画調整課課長補佐)

副館長 浅田 泰司

### 【研究系】

主任建築資料調査官(収集担当) 加藤 道夫  
主任建築資料調査官(企画担当) 川向 正人  
主任建築資料調査官(情報担当) 田良島 哲  
研究補佐員 遠藤 康一(R2.9.30まで)  
研究補佐員 加藤 直子  
研究補佐員 木下 紗耶子  
研究補佐員 小池 周子(R2.12.1から)  
研究補佐員 寺内 朋子  
研究補佐員 飛田 ちづる

文化財調査官 井川 博文(文化庁文化財第二課  
(建造物)調査部門調査官)

### 【事務系】

事務室長 浅田 泰司 ※副館長兼務  
専門職 山口 俊浩 ※建築資料調査官兼務  
事務補佐員 佐藤 知美

## Ⅸ. 年譜

### 令和2(2020)年

#### 4月

清水幹治館長(文化庁企画調整課長)就任(1日)

#### 6月

「木村俊彦構造設計資料」寄贈契約締結(5日)

#### 9月

国立近現代建築資料館運営委員会(第15回)(14日)

※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会(第14

回)(18日) ※ Web 会議

「角田栄資料」寄贈契約締結(23日)

国立近現代建築資料館運営委員会(第16回)(23~30

日) ※メール審議

#### 10月

令和2年度取藏品展「ミュージアム 1940年代-1980年代:始原からの軌跡」(1日~11月15日)

#### 11月

「前川國男建築設計資料(第2回)」寄贈契約締結(9日)

近現代建築アーカイブズ講習会(第2回)(12~13日)

#### 12月

令和2年度秋展「工匠と近代化—大工技術の継承と展開—」(10日~令和3年2月19日)

※旧岩崎邸庭園の臨時休園に伴い、当初最終日2月21日から変更

### 令和3(2021)年

#### 1月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会(第15回)(29日) ※ Web 会議

#### 2月

国立近現代建築資料館運営委員会情報小委員会(第11回)(1日) ※ Web 会議

高橋ひなこ文部科学副大臣「工匠と近代化—大工技術の継承と展開—」展視察(8日)

#### 3月

「原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 資料」寄贈契約締

結(2日)

「吉田鉄郎著作関連資料(ヴァスマート氏旧蔵)」寄贈契約締結(16日)

「坂倉準三建築設計資料」著作権譲渡契約締結(22日)

※元所員又は施主が所有していたもので、当該所有者から直接寄贈を受け資料館所蔵となっていた資料が対象

国立近現代建築資料館運営委員会(第17回)(26日)

※ Web 会議

---

国立近現代建築資料館紀要 第1号

2021(令和3)年9月30日 発行

編集・発行：文化庁国立近現代建築資料館  
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内  
電話 03-3812-3401  
E-mail: nama@mext.go.jp  
<https://nama.bunka.go.jp/>

制作：美学出版合同会社

非売品

---

**Bulletin of  
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs  
vol.1**

Published: September 30, 2021

Edited & Published by:

National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs  
4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8553, Japan  
Phone: +81 (0) 3-3812-3401  
E-mail: nama@mext.go.jp  
<https://nama.bunka.go.jp/>

Production by: Bigaku Shuppan LLC.

Not for sale

©2021 Agency for Cultural Affairs.





**National Archives of Modern Architecture,  
Agency for Cultural Affairs**